
無能力な先生

気まぐれ執筆家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能力な先生

【Nコード】

N5220V

【作者名】

気まぐれ執筆家

【あらすじ】

国同士で長年戦争があった。

しかしそれも数年前の話。

今では両国とも友好関係を築こうとし、国の内部も平穏に満ちていた。

そんな中、戦争で戦った傭兵は何を思っ
て戦い、結局どうなったのか。

現在作品も執筆中です。が、こ
っちも進めていこうかと思っ
てま
す。

ブローグ

とある紛争地帯。

何時までも戦争が絶えなく、人と人が素手で刃物で銃で戦車で戦鬪機で争い会う日々。

少年は、傭兵として雇われ、殺し続けた。

人を殺さなかった日は無かった。

男も女も幼子も老人も関係なく、ただ殺し続けた。

それが、自分の信じた平和に繋がると信じて。

少年は、殺し続けた。

自分の手から血が消える事はなかった。

戦争に関係した人種の、あらゆる血が少年に浴びせ続けられた。

それでも、少年は殺し、戦い続けた。

それが、自分の信じた日常に繋がると信じて。

それが数年続き、とある日。

「停戦……？」

突然の出来事だった。

自分が雇われた部隊が、国が勝った訳でもなく、負けた訳でもなく。

理由は、争っていた国の指導者達の勝手な都合で。

戦争の勝ち負けに関係なく、戦争は終わった。

「じゃあ……俺のした事は……今までしてきた事は……価値があったのか？」

周囲にいる人間達。

毎日の食事にも困り、やせ細っていく人間達。

彼らの日常を守るうとし、戦争に、殺し合いに自ら身を投じた。

だが、その結果。

戦争に直接関わった彼らの都合に関係なく、戦争は終わってしまった。

指導者達の、「戦争は終わった。平和になった」という美辞麗句。

しかし、その結果は実績には結びつかなかった。

相変わらず周囲の人間達は飢え、争いが絶えず、一切れのパンですら取り合いになる、そんな毎日。

「この戦争に勝てば、この戦争が終われば、俺の周りは平和になる、俺の周りは日常に戻ると信じて戦った」

「けど、いつも通りだ。人はまだ争い、戦い続ける」

「俺は、一体、何のために、人を殺し、戦ってきたんだ？今までやってきた事は、一体なんだったんだ？」

数年の戦いを経て青年となった彼は、戦争が終わっても変わらない非日常に、そして無力な自分自身に、絶望した。

そして数年後……。

長い間交戦状態だったトルバ王国とハルバード共和国は、数年の停戦を経て、共存体制に入りつつあった。

だが、その中で活躍した一人の傭兵の名は、戦争時に呼ばれた二つ名以外は歴史に刻まれる事もないまま歴史の闇の中に姿を消していった。

プロローグ（後書き）

処女作という訳ではありませんが、この度執筆文を投稿させていた
だきました。

正直な話、構想はある程度まで練っていますが、それが文章にでき
るか否か、その後が続くかどうか心配ですが、とりあえず書いて
みます。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

無能力な先生の退屈な授業

気。

古くから人に使われてきたそれは、万物全てに備わっているとされた。

それは万物が存在するその元となり、それが強ければ強い程、所有する物も比例して強くなっていく。

それは近代に近づくと共に研究され、その性質や使用方法も人々に理解されつつあった。

例えば性質の変化。

気を火に変えようとしたら火に、水に変えようとしたら水に、風に変えようとしたら風に、万物に備わるが故に、気とは所有者自身が望めば、いかなる存在にも変化が可能な存在だった。

「……と、これが今現在皆さんに知られている気についてですが……」

教科書を見ながら、黒板に文字を書き連ねていく教師。

生徒はそれを見ながら、黙々と勉学に励む。

そんな中、

「先生」

一人の生徒が手を上げる。

「はい、なんででしょうか」

「気の強さや性質の変化ですが、個人によって優劣は決まるのですか？」

「そうですね……」

先生はふと考えた後、

「通常、気の強弱には血統が大きく絡んでくると言われています。ごくたまに、何でもない人から気の力が強い人が生まれるという事もあります」

「ですが、強弱は生まれつきでも、鍛錬次第で強くなる事はありますね。そして」

「性質の変化ですが、これも生まれつき得意不得意があると言われるています。例えば、君は水の系統が得意ですね」

「はい」

「そのあなたが気を水に変化させれば、他の使い手よりも強い水の使い手となります。逆に、そのあなたが他の系統の力を使おうとすると、他の人より若干弱い力しか引き出すことしかできません」

「また、変化の得意不得意は家系に関わる事があります。この一族は火の系統が得意、とかですね」

「じゃあ……」

その生徒は、一息入れた後、先生を真っ直ぐ見て、

「先生は、何の系統が得意なんですか？」

「……その質問には、答えは否ですね」

その先生は、苦笑しながらも、

「自分には、得意な系統も不得意な系統もありません。あえていうなら、無ですかね」

そう。

この先生、ヴァン・ガルドは、得意な系統がない。

そう自分で公言しているのだ。

そのせいで、一部の先生や生徒の間では「無能力な先生」と揶揄されていた。

だが、

「ですが、気の方面に関して知識があるという事で、実践方式でなく、勉強で教えている事がボクには多いですね」

と、一息ついた後、

「少し脱線しましたが、授業を続けますね。そして気というのは各地方によっても呼び方が変わり……」

そして再びヴァンによる授業が続く。

「あー、つまんなかったー」

今日最後の授業が終わり、ヴァンが出て行った後。

大きく伸びをしながら、質問をした生徒、フラン・クラーはため息をついた。

「そんな事言わないの。教科書見ながらの歴史の授業も勉強の一つでしょ？」

「だけどさー」

フランは、頬を膨らませながら、自分の親友であるサラ・サーヴエントに文句を言う。

「普通、どんな先生でも、生徒に要望されたら自分の系統で実践するでしょ？けど、あの先生はそれが無いんだもん」

「まあ、ちよつと退屈だけどね」

彼女らの言う通り、普段は授業の合間に先生による実践が行われる事が多い。

だが、ヴァンの授業にはそれがない。

彼自身が、「自分は得意な系統が無いので、そういう実践はできないんですね」と言い、実践を全く行わないのだ。

実践でもあれば退屈と言えない授業ができていいのだが……。

「やっぱりつまらないよ、あんな教科書を読んで覚えるだけの授業。こつ、気を使う授業じゃないとね」

「背格好や性格はいいんだけどねー」

青い目に白髪、長身ながら細くもなく太くもなく。

歳は聞いた事はないが、見た目的には若い。

そして何より、優しすぎるのだ。

例えば。

ヴァンとぶつかったりした場合でも、例え相手が走ってきたりなど、相手に過失があった場合でも、第一声が「大丈夫ですか？」なのだ。

自分より他人を優先しすぎていて、それが生徒の間では優しい先生と認識されていて、そういう面では好意を抱かれている事も多い。

「背格好が良くても、つまらないのは変わらないよ」

と話をしていると、

「あ、そういえば」

「どうしたの？」

サラの問いかけに、

「図書室で、どうしても借りたい本があったのよ。ちょっと付き合ってくれない？」

「でも、もう夕方だよ？もう少し暗くなり始めてるし、明日にしようよ。最近の事件もあって物騒だし」

事件。

最近、この学校の周囲で殺傷事件が多発しているのだ。

特に夜に被害が多く、近辺ではあまり夜は外で歩かないように言われている。

「大丈夫だって。もし変な奴がいても、こっちが二人なら心配ないって。いいから行こうよ」

こうして、二人は暗くなりつつある中、図書室に向かった。

無能力な先生の退屈な授業（後書き）

ふう。

とりあえず書き終わりました。

ですが、1話目の時点から書き直しや設定の見直しなど、初っ端から波乱万丈な書き物で、書くこちらもどこかに矛盾がないか、字の間違いがないか等ビクビクものです。

続くかどうか心配ですが、とりあえず書ける所まで書いてみるつもりです。

意見や感想、評価等、書けていただけたら幸いです。

夜の邂逅（前）

図書室に本を借りに行き、帰る頃には周囲は暗くなっていた。
暗くなった校舎。

昼間とは違い、太陽の光もあまりなく、なんとなく漂うのは不気味な雰囲気。

そんな雰囲気の中、

「やっぱり、暗い学校の中って昼間と違って、何か雰囲気あるわよね」

そう言ったのは、本を片手に持ったフラン。

「変な事言わないで、早く帰りましょう、フラン」
言いながら、二人は暗い廊下を歩いていった。

「にしても暗いわね……」

呟くサラ。

彼女の言う通り、外からの光があまりない校舎は暗く、少し先を見ると暗黒に包まれている。

そしてあと少しで下駄箱に着くというところで。

「ねえ、何か足音がしない？」

言われて耳を澄ませると、確かに自分達以外の足音がする。

音源は……少し先の廊下の曲がった先から。

「ど、どうしよう」

不安なサラの声。

その中でフランは、

「とりあえず、姿を見せたら私が攻撃するから、サラは援護をお願い。大丈夫だって。なんとかなるよ」

自分達は複数。

相手は一人。

例え相手が武器を持っていたとしても、先手を取って二人で攻撃したら何も心配ない、そう思ったのだ。

そう考えている間に、足音は曲がり角に近づいていく。

そして、影が曲がり角から出てきた時。

「てやあっ!!」

声と同時に自らの気を水に変え、手のひらから、放水車から放たれるような勢いで鉄砲水を影に向けて噴射する。

「うわあっ!?!」

それをまともに浴びた影は噴射の勢いに押されて、廊下の壁に叩きつけられる。

「今よ、サラ!」

「ちよっと待って!」

フランの声に、ストップをかけるサラ。

「今の声、誰かに似てない?」

サラの声にフランが顔を合わせ、恐る恐るその影に近づいていくと……

「ヴァン先生!?!」

そこにいたのは、頭から靴の先までびしょ濡れになっていたヴァンだった。

「いたた……まさか生徒から攻撃されるとは思いませんでしたよ」
頭を押さえながら、ゆっくりと立ち上がるヴァン。

「しかし、今のはいい攻撃でしたよ、フラン。もし私が襲撃者なら押さえとしては十分でしたね」

「って、ヴァン先生が何でここに?」

「それはですね……」

少女達が図書室に向かう前後、授業の終わった後。

校長室にて……

「校長先生。少しお話が」

「なんですか、ヴァン先生」

「校舎の夜の見回りの件ですが……」

最近、町で起きている事件については学校の関係者も知っていた。だから、教職員が交代で夜の見回りに付く事になったのだが、

「今日はボクに行かせてもらえませんか？」

「別に構いませんが、どうして急に？あなたは明日のはずですよ？」

「ええ、どうも嫌な予感がするんですよ。こう、何かが起こる気配というか、なんというか……」

「ああ、なるほど。ヴァン先生はそういうのに敏感でしたわね」

校長先生は頷くと、

「……分かりました。万が一の時は頼みましたよ、ヴァン先生」

「ありがとうございます、校長先生」

ヴァルは頭を下げ、校長室を出て行った。

「もつとも、万が一の事が起こっても、あの人が負ける姿なんて想像もできませんけどね」

校長先生の言った独り言は、誰にも聞こえる事は無かった。

「……という訳で、最近は各教職員が交代で見回りをして、今日はボクがしていたという訳です」

「そういう事だったんですか」

「それより、あなた達こそどういう理由でここにいるんですか？夜に授業をするという予定は聞いていませんか？」

「あの……それは……」

二人は、困ったように顔を見合わせ、そしてフランが、

「ちよつと図書室に用事があったんですが、少し時間がかってしまつて……」

「用事ですか。まあ、それは別に構いませんが、早く家に帰りなさい。ボクが先導します」

「はい。分かりました」

二人は頭を下げ、ヴァンを先頭に出口に向かっていく。

そしてもう少しで出口に着く、その時。

ヴァンの足が止まった。

「どうしたんですか？ヴァン先生」

「二人は、そこを動かないように」

そう言つと、ヴァンだけが一人先に進んでいき、

「その角に潜んでいるのは分かっている。さっさと出てこい」

ヴァンの声が廊下に響き渡り……

「クッククク、バレたか」

廊下の角から現れたのは、今度こそ誰も知らない男だった。

目はギラギラしていて、片手にナイフを持ち、ユラユラと揺らしている。

「先生、その人っ!？」

「……噂の変質者、あるいは襲撃者ですか、どちらでも構いませんが、前者の可能性は否定できませんね」

「……その通りさ」

その男は、ゆっくりとヴァン達の方に近づいていき、

「今日もついさっき警備員みたいなのを切ったばかりだな、また収まらねえんだよ……」

そう言つて、手に持ったナイフをヴァル達に向ける。

「3人も切れば、この疼きも止まるだろうさ。ゆっくり切り刻んでやるぜ……」

「お前は、何者だ」

「ファルガ地域の生き残りって言や、分かるだろ？」

「!？」

ファルガ地域。

その言葉を聞いた途端、少女二人が一瞬震えた。

ファルガ地域とは、数年前まで紛争地帯だった地域の一つで、最も戦争が激しかった地域だった。

そこでは日常での殺し合いは当たり前で、生き残ったのは大きく分けて3種類の人間だけだった。

一つ目は部隊。

政府から派遣された組織で、トルバ王国とハルバード共和国の戦争に直接関わっていた。

二つ目は守られる者達。

町や地域ごとに組織が管理し、防衛していた所に住んでいた住人達。

そして三つ目。

どちら側にも一定には属さず、金、権力、思想、その他様々な考えで動いていた傭兵達。

彼らは、弱い者達は死んでいったが、逆に強い者は生き残り、名を上げていった。

「俺はよ、あそこで生き残った傭兵なんだがよ、どうにも刺激がないと疼きが止まらなくなっちゃってな。まあ、ここで出会ったのが運の尽きだと思ってくれ」

言いながらも、あと数メートルでヴァン達に接触するところまで近づいた、その時。

「フラン、それにサラも。ここはボクが対処するから、下がってなさい」

そう言って、ヴァンは片手を後ろに向ける。

「む、無理ですって！あそこから生き残った傭兵だったら、先生なんか一人で戦っても……」

半分泣きながら喚く二人。

だが。

「心配してくれるんですね。ありがとうございます。けど、その心遣いは無用です。何故なら……」

そう言って、ヴァン自身も男に向かって歩き出す。

「ボクは、得意な属性が何もない無能力者ですが……」

そして、サラは気づいた。ヴァン自身から、怒気というには生易しい、殺気と呼べる程の何かを感じるのを。

「日常を壊す存在に対しては、一切手加減はしませんから」

夜の邂逅（前）（後書き）

さて、どこにでもありそうな展開ですが、書き終わりました。

次以降先生がどんな力を出すかですが……それは大体決めているので、後は表現力の問題だけ、どれだけ分かりやすく書けるかですね。自分にどこまでできるかは分かりませんが。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

夜の邂逅（後）

あと数歩歩けばお互いが接触する位置までヴァンが近づいていった、その時。

「先生さんよ、教え子に別れの挨拶はいいのかい？」

「貴様を潰せばその必要もない」

互いに一言ずつ述べた後、お互いが動いた。

「な……何なの、これ」

フランが呟いたが、答えられる者はいなかった。

男はナイフの先から延長上に半透明の刀のようなものを武器に使って攻撃しているが、まったくヴァンには当たらない。

男の動きが悪いのではない。

ヴァンの動きが速いのだ。

左から袈裟に斬ろうとすると、それを予測していたかのようにヴァンがそれを右に避け、同時に右から回し蹴りを放とうとする。

それを避けながらナイフを横に薙ぐと、その場にいたはずはヴァンはすでにしゃがんでいて、足元を狙ったの蹴りを放とうとしている。

男は後方に飛んでそれを避けると、ナイフを両手で構えて叫ぶ。

「お前、一体何者だ！何でそこまで俺の攻撃を見切れるんだっ！？」

「下郎に教える筋合いはねえよ」

「てめえっ！！」

「ふんっ！」

再び二人の影が交錯する。

「……それに、ヴァン先生の口調も変わってる？」

そう。

自分達にいつも向けられている口調は優しいが、今の、男に向け

られている話し方はまったくの別物だ。

そして何より、

「顔が、怖い」

フランが喋った一言だったが、サラも同じ気持ちだった。

普段のヴァンと似ても似つかない、今のヴァルの顔。

それはまるで、

「人を、殺そうとしてるみたい」

何度も斬られそうになるところをヴァンがかわして反撃、それを何とか男が紙一重でかわしを延々と繰り返した後。

男は肩で息をしているが、ヴァンは息どころか、汗一つかいていない。

「さて、そろそろ諦めたらどうだ？」

「随分余裕あるみてえだがよ、先生さん。俺の攻撃はまったく当たらないが、てめえの攻撃も全部かわしてるぜ？」

「ああ、流石は元あそこの出身者と言えるな。だが」

「もう貴様の攻撃は当たらん。正確には当たっても通用しないというべきか」

「何だと？」

そう言つと、ヴァンは構え、気を集中し始める。すると。

ヴァンの体が白い何かで覆われ始める。

それはヴァンの体全体を覆い、全身が白い何かで覆われた。

「て、てめえ、なんだそりゃ……」

「行くぞっ！！」

ヴァンが男に向かって走る。

「くそっ！」

男もヴァンに対してナイフを振り下ろす。だが。

それはヴァンには届かなかった。

「何、あれ……」

その質問に、誰にも答える事ができなかった。

本当ならそのナイフの延長上に具現された刃に一刀両断された。

そのはずなのに。

その刃先は、ヴァンの肩で止まっていた。

正確には、肩の周りを覆っている白い何かに阻まれていた。

「何だ……とぐうっ!？」

男が言い終わるより早く、ヴァンは男の腹部に蹴りを入れた。

それを男はまともに喰らい、廊下に転がった。

「今は……一体……なんだってんだ？」

「気を俺の体の周囲に纏わせ、簡単に言えばCランクまでの攻撃は全て無効化できる壁を作った。故に、貴様の刃は壁の前で止まった」

「無効化……白髪……そうかよ……」

そんな様子を見ている少女達に、ヴァンがいつもの笑顔で振り向く。

「さて、サラ。課外授業でもしましょうか」

「課外……授業？」

「私達の普段使う気ですが、それはランク付けされてますね。そのランクと、その攻撃がどういう結果を生むのかは分かりますか？」

「えっと……」

「現在、ランクはカテゴリーA、B、Cの3つに分けられています」

「まず一番下のCですが、軽いもので人に怪我をさせたり、強いもので車などの物でも破壊できる威力」

「次にBですが、メートル級四方を吹き飛ばす事ができる事を前提としています。人がまともに喰らえばひとたりありません」

「最後にランクAの攻撃ですけど、これは建物ですら吹き飛ばしたり、破壊したりできます。ミサイルや大砲の威力にも匹敵する事から別名「兵器級威力」とも言います」

「正解です。まあ、ランクの中でもピンからキリまでありますが、

一般に定められているカテゴリーはそうですね」

「そしてこの男、襲撃者ですが、おそらくCランク、そして物体に自分の気を通して思い通りの武器を作る具現に近いものですね。

属性は、風ですか。それを刃の形に具現化していたようですね」

「ちなみにですが、ボクのこの白いものは気を具現化した鎧のような物で、先ほど言ったようにCランクまでの気による攻撃は全て防いでしまいます。細かい事は省きますが、それでこの結果になった訳ですね」

「先生、大丈夫ですか？」

恐る恐るといった感じでヴァンに近づく二人。

そして、

「ええ、もう心配ありません。この男はしばらく動けません」

「そういう……意味じゃ……ねえんだろ？ククク……」

「まだ口は動けたのか？随分しぶとい奴だな」

「気いつけるよ嬢ちゃん達。そいつ、何で今はそんな口調なのか訳は知らねえが……」

「昔はそいつ、ファルガ地域でも有名だったからな……」

「それって……っ!？」

「もついい、それ以上喋るな、下衆が」

言うと同時に、ヴァンは男に近寄り、彼の顔を蹴り、

「ぐぶっ……」

男は動かなくなった。

「先生、先生って一体……」

「ボクが昔、ファルガ地域に住んでいたのは本当です。できれば活動内容は秘密にしておきたいのですがね」

その言葉に、少女達は身を震わせる。

「ですが、ボクは平穩を願ってこの学校に勤務させてもらっているんです。それだけは信じてください」

「……」

二人は無言でヴァルを見つめる。

その目には恐怖、畏怖が映っていた。

そんな中、

「先生、聞いてもいいですか？」

「はい。何ですか？フラン」

「先生の、今までの日常は、本当ですか？それとも……偽りですか？」

「……」

ヴァンは、外に出ていた夜空の月や星々を見上げ、

「ボクは、あそこにいた時も、そして今も平和を願っています。それは偽りのない真実です。それだけは信じてください」

「……はい」

その後、警察が呼ばれ、男は逮捕された。

二人は厳重注意の上開放されたが、ヴァンは参考人として警察に連れていかれた。

「心配無用ですよ。すぐに帰ってきます」

そんな一言を二人に残して。

夜の邂逅（後）（後書き）

自身初のバトル物が出てきましたが、自身の表現力の無さで少しだけになってしまいました。

次からもうちよつと表現力を上げたいものですが。

ヴァンの設定については、矛盾のない程度に後からちよくちよく出していくつもりです。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

襲撃の日、その裏側

「やれやれ。平和になったと思っただけでまたファルガ絡みの騒動か。何とかして欲しいものだな」

「原因はお前達にもあるだろう？」

高層ビルの一室。

そこで、二人の男が椅子に座っていた。

片方はどこかの軍人を思わせる風貌で、左胸にはいくつもの勲章があった。

黒い髪の中に白髪が数本入り混じっていて、初老を思わせたが、その顔はどこか威圧感を漂わせた。

もう片方は、ヴァンだった。

ヴァンは、最初は警察に連れていかれたのだが、とあるところからの電話により警察署を離れ、車でその場所に向かっていた。

その場所が、現在ヴァンとその軍人の風貌をした男が話しているビルの一室だった。

「お前達政府がもつとしっかりしていれば、あの戦争ももつと早く終わったはずだ」

「そう言ってくれるな。こつちも全部一枚岩ではないのでな」
男はため息をついた。

「しかし、ファルガの種がああ場所より離れたこの地域でも見つかるとは。この一帯の警備も厳しくせんといかんかの」

「その辺りはあんた達に任せるよ。俺は俺と俺の教え子と俺の住んでいる町に火の粉がかければ消し飛ばすが、それ以外は関係ない」

「まったく、ワシも老いたというのに、まだ無茶をせんといかんとはな」

「あの戦争に加わった者にとっては後始末と同じだろう」

「違うじゃない」
ククク、と男は苦笑を浮かべる。

ファルガの種。

トルバ王国とハルバード共和国の戦争で、最も激しかった地域であるファルガ地域。

その地域で生き残った者の中には、その激しさ故に精神に異常を持った人が確認されているという。

そういう人達を、上層部、あるいは関わった者達の間ではファルガの種と言われている。

（今日捕まえた男もその一人だったみたいだが……まだこの世にいるんだろうか。ファルガの種と呼ばれる人間が）

「しかし、ヴァンよ」

そう言うのと、男は顔から笑いを消し、真顔になる。

「お前もファルガの種になりかねないと思われる事を忘れるでないぞ。ワシらはともかく、お前を単なる傭兵の残党とは思っていない連中はお前も種と同様だと思っとる」

「ああ、分かってる」

「お互いに心労が絶えぬな」

「そうだな」

今度は、お互いに苦笑を浮かべる。

「そつえば、お前に聞きたい事があるのじゃが」

「なんだ？」

「お前、学校で教師をやつとるんだろっ」

「そうだが……それがどうした？」

「お前の力は少し、いやかなりのものじゃろう？それこそ、本気のお前を相手にしたらAランクですら手が負えない程の」

「自分で言うのもなんだが、そうだな」

「お前、その学校でどうやって生活しておる？目立つたりはしてないのか？」

「ああ、いい意味で目立ってるさ。何の属性も使えない、「無能力の先生」だってな」

「無能力？……ッハッハッハッハッハッハッ！」

今度は、苦笑ではなく、膝を叩いて文字通り爆笑した。

「そんなに笑う事じゃないだろう。普段はあの力を制御してるんだからな。傍から見たら気があるだけで何も使えないと思われても仕方がないだろう」

「いやいや、すまんすまん。しかし、戦場の白髪鬼と言われ、ホワイト・デーモンの二つ名を得たお前が無能力とはな……ハッハッハ……」

「もうその話はよしてくれ。俺も今の平穩を気に入ってるんだ。自分から壊す気はない」

「ああ、分かった。すまんかったな」

その後も二人は談笑し、そして時間が過ぎ……

「おっと、もう深夜を過ぎとるのか。そろそろ帰ねばならんな」

「そうだな、明日に響く」

「お前には悪い事をしたな。日付は過ぎとるが、大丈夫なのか？」

「心配無用だ。昔は3日3晩戦った事があつてな。今でも数時間寝ただけで眠りすぎじゃないかと思うくらいだ」

「それを聞くと、ますますお前が化け物に見えてくるわい」

「そう言うな。あんただって、俺からしたら権力って力を持った化け物なんだからな」

「お互い様じゃの」

「だな」

それから一言二言別れの挨拶を済ませた後、ヴァンは車で送られ

……

次の日。

教室は、襲撃者の話題で持ちきりだった。

警察関係の人が学校にいたので無理もなかったが、
そしてそんな中。

「……ねえ、克蘭」

「何よ、サラ」

「先生、来るかな」

「……」

昨日、ヴァンは警察に連れていかれた。

参考人としてだったが、警察に連れていかれた経験がない二人にとっては、一晩二晩で済むのかが分からなく……

「おはようございます」

そんなヴァン先生の一言で、彼女らの心の不安はハンマーで木っ端微塵に砕かれた。

「せ、先生、昨日は……」

ヴァンは克蘭とサラのところまで近寄っていき、

「先生にも、心強い味方がいますので。どんな味方かは秘密ですが、あなた達が心配する事ではありませんよ」

そう、二人にしか聞こえないような声で話した。

そしてヴァルは教卓の後ろに立ち、授業を始めた。

「先生って……」

「何者……？」

二人して疑問に思ったが、それは結局分からずじまいだった。

襲撃の日、その裏側（後書き）

とりあえず、書き終わりました。

ログインしてない状態で見ると、ユニークユーザーはまだ100人にも達してないにも関わらず、このような書き物に評価がされていて、内心非常に嬉しく思います。

さて、これからどう主人公と周囲が動くのかはある程度構想練つてますが、自身がMMOをしているPLASTERAにも手を出し始めたため、執筆スピードはちと遅くなるかもしれません。

それでも諦めないで書くのは続けようと思いますので、これからはよろしく御願います。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

昔の友人との再開

とある休日。

ヴァンは散歩がてら、町中を歩いていた。

何事もなく、過ぎていく平穏。

ヴァンにとって、それは過去にあった出来事とはかけ離れた日常で、またその光景それはヴァンにとって至福の日常だった。

そんな平和な町中を歩いていると……。

「まあまあ、落ち着いてくだされ二人共。ほら、お茶でも飲んで」「何で私がこの吸血鬼なんかと一緒にいなきやいけないんですか。本来なら八つ裂きにでもされるべきですよ」

「それはこっちのセリフよ。誇りある吸血鬼が、何故信仰バカと一緒にいなければいけないのかしら？」

そんな物騒な会話が聞こえてきた。

しかし、三者とも聞き覚えのある声であり、同時に懐かしい声だった。

ヴァンの足は、自然と声のする方に向かっていった。

「だから、お互いに落ち着いてくだされ。たかが思想の違い、それだけではないか」

黒く長い後ろ髪を紐でくくった、極東方面の古風な服を着た女性は、修道女の服を着た青い髪の女性と、白のハイネックと紫のロングスカートを着た金髪の女性を収めようとしていたが、

「「思想の違い!?!」」

二人は同時に振り向いた。

「それだけならまだ許せます」

「ええ。教会連中と仲を持ってくださいと頼まれば、百歩譲って持ってやらない事もないでしょう」

「ですけどね！」

「しかし！」

二人は、お互いの顔を指差して、

「「こいつと仲良く！？そんなの、天変地異が起ころうとお断りです！」」

「……随分仲がいいじゃないですか」

「「「???」」」

予想もしない4人目の声がして、3人はそちらを向く。
すると、

「時雨さん、シエルさん、アリエルさん、元気そうだなによりですね」

顔に笑みを浮かべながら、軽く会釈をするヴァンの姿があった。

3人にヴァンも加わり、4人での楽しい(?)お茶会は進んでいた。
た。

「にしても、その口調は何ですか？随分雰囲気が変わったようですが」

「そうだな。あの殺伐とした雰囲気はどこへ行ったのだ？まあ、今のヴァン殿もまた良しだが」

「私としてはあの頃のヴァンも好きだったわよ？フフフ……」

「まあ、色々ありましたね」

三者三様の感想に、ヴァンはまた苦笑いを浮かべる。

4人はかつて、ファルガ地域で知り合った仲だった。

と言っても、各々傭兵として活躍していて、互いの事情により味方だった事もあれば敵だった事もあったが。

それが今では笑いながら話すというのも奇妙な事ではある。

「そういえば、ヴァンさん。あなたはどこかのギルド、もしくは軍に入ったのですか？あの戦争以来あなたの噂は聞きませんが」

「今は学校で教師をしていますよ」

「ヴァンが教師？」

「ええ、そうですよ。なかなか平穏な毎日を送らせてもらっています」

「ほう。ヴァン殿が教師か。あの頃を思うと、意外と言えば意外だな」

と、3人はあの頃、戦争時のヴァンを思いだす。

戦争時のヴァン。

少年から青年時代を戦場で過ごしていた彼は、文字通りの殺戮兵器だった。

指令が出れば容赦なく人を殺し、組織を潰せと言われたら言われるがままに指定された集団を皆殺しにしていた。

そんな彼も、戦争が終わったと同時に姿を消していたのだが……。

「まさか教師でしたか。まだどこにも属していないなら、教会に誘おうと思っていたのですが」

教会。

気を聖の属性へと変化させ、それを操る事に長けている者達による大手ギルド、傭兵達が自分達で組織した集団の事である、の一つ。その特性から、主に気が負の方向に暴走した化け物の討伐等が主な仕事である。

「またその話ですか。もしボクがまだどこにも属していなくても、

入ろうとは思ってませんよ」

「どうしてですか？我々は神に仕える身であり、神に救われる存在。異教徒はダメですが、どの信仰にも属していないあなたなら大歓迎ですよ？我々の仲間になれば、あなたにも我らが神の守りが得られるでしょうに」

「ボクは一度絶望し、何もかも失いました。そして今信じているのは、この平穏な日常のみなんです」

「……あなた程の人が、もったいないですね」

「それはボクの力を見て、ですか？それとも、人柄を見てですか？」
「無論、両方ですよ」

そんなヴァンとシエル話を、聞いているのか聞いてないのか、おそらく後者だが、ずずーっとお茶を飲んでいるアリエル。

と、その時、

「それよりヴァン殿」

「何ですか？時雨さん」

「近々開かれるという気道大会とやら、ヴァン殿は出るのか？」

気道大会。

それは気を操る者同士が戦う大会の事で、トーナメント式で行われる。

目的は様々。

単に自分の力を確かめたい者、自分の実力としての名声を得るため、理由は色々あるが。

実力を示した者にギルドや軍からの勧誘が来る事もあるため、それ目的で出る者もいるが。

「ボクは出るつもりはありませんよ。ボクの仕事は教師であり、名声もいりませんしギルドや軍に入る予定もありませんからね」

「ふむ。ヴァン殿が出るのなら、拙者も出ようと思ったのだが。久々にヴァン殿と手合わせもしたいのでな」

「簡便願いますよ」

手を振り、笑いながらも断るヴァン。

「話は終わった？」

「アリエル殿。……今までずっと茶を飲んでいたのか？」

「どれもこれも興味はありませんし。もともと、ヴァンとまた戦う事ができるなら氣道大会というものに出てもよかったのだけれど」

「まったく、二人とも簡便してくださいよ。ボクは争い事是可以ならもう避けたいんですから」

そんな会話を交わしながら、ヴァンは久々に昔の戦友とも、好敵手とも、旧友とも呼べる人間達と語り合った。

補足事項

吸血鬼。ヴァンパイアとも呼ばれる。

気とは負の方向に長時間変化させると、ほとんどの生物や物は耐えられず、精神や存在が保てず崩壊し、暴走したり消滅したりする。だが、気を負の方向へと変化させ、それでも自我を保っている者達の一部は体が通常の人間より遙かに強化される。

また、他人の気を吸い取ったり、気を自身の体に直接送り込み、体そのものを変化させて武器にしたり、気を物体化させて何かを召喚する事もできる。

他人の気を吸い取る事ができるのが、吸血鬼と言われる所以である。

昔の友人との再開（後書き）

構想は練ってたのでどんな内容にするかは決めてたのですが、中身はどんな文面にするか考えてないので、文字通り行き当たりばったりですね、ハハハ。

新しい登場人物として3人の女性が出てますが、なんとなくで誕生させました。

シエルはイメージとしては某。姫のカレー好きな先輩を、アリエルはヒロインの吸血鬼ですが、そのままだともったいないので高貴な感じをイメージして書きました。

時雨に関しては自分のオリキャラで、日本の侍風の女性ってな感じですよ。

現在一日1作ペースで投稿してますが、それがいつまで続くことやら……。

意見や感想、評価等、書けていただけたら幸いです。

大会への参加と、それぞれの思惑

「気道大会にボクも出場？」

それはヴァンにとって、突然の事だった。

とある昼休み。

校長先生に呼ばれ、ヴァンが校長室に行ってみると。

「ちよつと相談があるのですが」

「はい、なんでしょうか」

「数日後に気道大会があるのは知っていますでしょう？」

「ええ。学校中でも噂になってますからね。今回はどの人が優勝するのだ、とか」

「それに、ヴァン先生も出場してもらえませんか？」

「……理由を教えていただきたいのですが。少なくとも、ボク自身は自分の力がどの程度かは知ってますし、名声も何もいりません。今の日常があればそれで十分なのですが」

「少し薄暗い噂がありましたね」

その噂とは。

今大会には王族の一人が見物として来る事になっている。

そして、大会優勝者には毎回大会の責任者からトロフィー等が渡される事になっているのだが、今回はそれがその王族自らが渡す事になるかもしれないという。

その機会を狙い、王国と共和国の共存を良く思っていない連中が暗殺のために大会に出るとか、そんな類の噂らしい。

「暗殺関連はあくまで噂程度なんですけどね。念には念を、という事です」

「それで何故ボクが？そういう事ならギルドにも要請が入るかもしれませんが、軍も黙ってはいないはずでは？」

王族に何かあれば王国直属の軍の面目は丸潰れでしょう？と付け加えるも、

「言ったでしょう？念には念を、と。理事会でも貴方では力不足では、他の先生を送った方がいいのでは、と反対の声がありました、5人のうち私含め3人が賛成の決を取ったので決定となりました」
「そして私が軍に、念のためこちらで預かっているヴァン・ガルドを送ってもいいかと聞いたら、初老の軍人さんが一声で良しと言ってくれましたよ」

「……まさかあのジジイが……」

小さい声で呟いたが、校長先生には聞こえなかった。

「というより、軍に直接コンタクトが取れるあなたは何者なんですか？」

「それは秘密です。それはさておき……」

「そういう訳で、あなたにも出てもらいたいのですが。どうでしょうか」

「しばらく考えさせて……もう余裕もなさそうですね。数日後にという事は、もう登録は済ませているのでしょうか？」

「ええ。大会を辞退するには、あとは棄権しかありませんね」

「……仕方ありませんね。そういう事なら出る事にしますよ」

「そう言ってもらえると助かりますよ」

そしてヴァン先生が部屋から出ていった後。
校長先生はあるところに電話をかけていた。

「ハルバードさん、あなたの言う通りにしましたが、これでいいんですか？」

「ええ。こっちで用意できる手駒は多ければ多い方がいいですからな」

「『理由をつけてヴァンを大会に出場させてほしい』と言われた時は何事かと思いましたが、あなた達はもしかして……」

「先生の想像通り、かどうかは分かりませんが、軍上層部が、ファルガ方面が関わっているかもしれない、と考えたのです」

「やはり……」

校長先生は、深くため息をついた後……

「あの戦争は、まだ終わってないのでしょうか？」

「そう考えている連中が、少なからずいるという事は確かですな。まだ見ない連中や、そして我々の中にも」

それから出場する人間の名簿が町の掲示板に張られ、そこにヴァンの名もあり、ヴァンが出場するという事は学校でのちょっとした噂になっていた。

もつとも、ヴァンの实力を知らない者が学校のほとんどだったので、「初戦敗退じゃない？」「少しは頑張ればいいのにねー」等といった冷やかしのような感じだったが。

だが、

「先生、出場するって本当ですか？」

「ええ、そうですよ」

「頑張ってくださいねー」

「ええ、極力負けないように努力しますよ」

人柄のおかげか一部応援もあった。

しかし、そんなヴァンの内心は、

（暗殺か……。またファルガの生き残りが関与してなければいいんだが……）

そんな心配をしていた。

大会への参加と、それぞれの思惑（後書き）

休日を利用してとはいえ、投稿できるとは思ってませんでした。

逆に言えば、連休が終われば一日投稿もできなくなるという事でしようか（汗）

これで起承転結の起か承の辺りだなー。

アクセス解析で見られている人が分かるという事や、評価ポイント等、お気に入り登録してくれている人がいるというのは自身にとって嬉しい事です。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

大会前日

ヴァンが大会出場を決意してから数日後……大会の一日前。

「先生、何か用ですか？」

「いえ、少し念のため、ですね」

放課後、学校の人気の無い場所に、ヴァンはフランとサラを呼び出した。

「二人とも、ボクが気道大会に出る事は知ってますか？」

「はい」

「とある事情で、大会に出る理由ができたのですが、少し問題があります」

「問題？」

「ええ。二人には、少し手伝いをしてもらいたくて来てもらいました。予定は大丈夫ですか？」

「それは大丈夫ですが……一体何を手伝えば？」

「簡単に言えば、二人がかりでボクと戦って欲しいんですね」

「「はあっ？」」

ヴァンのその発言に、どういう意図があるのか分からずに、二人は間の抜けた返事を返した。

「先日の戦闘で二人はご存知でしょうが、ボクはある程度の相手なら遅れをとるつもりはありません」

「ですが、大会ですと、どんな相手がいるかボクにも分かりません。ボク自身、動きや気の使い方が鈍っているかもしれませんね」

「鈍って……あれで、ですか？」

フランは、先日の襲撃者とヴァンの戦闘を思い出しつつ、目を丸くした。

「まあ、そういう訳で、鍛えなおすという意味でボクと模擬戦闘として戦って欲しいんですよ。もちろん、危険な技や危ない術は無しで、ですがね」

「……でも、色々と問題ありそうじゃないですか？いくら模擬戦闘と言っても、先生と生徒で……」

「その点は問題ありませんよ」

急に4人目の声がしたのでそちらの方を向くと、そこには校長先生がいた。

「ヴァン先生がどうしてもと言う事で、許可を出しました。万が一危ない事が起こっても止められるように、私も来ましたけどね」

「もしよければ私が模擬戦闘を、と言ったのですが……」

「自分の授業がいつも暇そうなので、たまにはこういう息抜きもいいのではないか、と言われましてね。二人もヴァン先生の力を見たくはありませんか？」

「先生の……力……」

確かに、普段は気を扱う事のないヴァンの能力は未知数。

そういう意味では、ヴァン先生の力がどれ程のものか、それを体験したくないかと言われれば、その誘いに乗りたくもあつた。

「……分かりました。じゃあ、ヴァン先生、お願いします」

「同じく、サラ・サーヴェントもお手合わせ願います」

そう言うつと、二人はヴァンに対して構えた。

「では、開始の合図は私が取りますね。勝敗の結果は、ヴァン先生が負けを認めるか、二人のどちらかが決め手となる攻撃を受けたらでいいでしょう」

そういうと、校長は右手を掲げ、

「始めてください」

同時に手を下げた。

「てやあっ！」

最初に動いたのはフランだった。

あの夜と同じような鉄砲水をヴァンに向けて放つ。
だが、

「勢いは確かにすごいものですがっ！」

ヴァンはそれを右に避ける。

そこへ。

「私を忘れてませんか!？」

避けたところへ、風の刃、俗に言う鎌鼬がヴァンを襲う。

「おっとっ」

ヴァンはそこから後方に飛び、それをも避ける。

そして、

「次はこちらから行きますよ!」

言うと同時にヴァンが地を蹴り、フランに肉薄し、軽く飛びながら中段蹴りを放つ。

そしてそれを、

「えい!」

水の壁を作って防ぐフラン。

そこから更に、

「これなら!」

サラが風の塊を作り、それを放ってヴァンにぶつけようとする。

だが、水の壁を蹴った勢いでその場を離れ、サラの攻撃は再度ヴァンを捕らえられなかった。

そうして二人とヴァンは距離を取り、

「今度はこっちから!」

フランは両手に水の塊を作り、サラも右手に風を集中させ、ヴァンに向かって走っていった。

ヴァンは二人を迎え撃つように構える。

先にフランが両手を両手を合わせ、さっきの倍の体積になった大きな水の塊をヴァンに放つ。

「くっ!？」

避けようとするも、その水の塊の一部が、僅かにヴァンの体にかすった。

バランスが崩れ、ヴァンの体がよろける。

そこへ、

「今!!」

右手に集中させた風の塊を刃状に変化させ、ヴァンに斬りかかる。

(これで……っ!)

そう思ったサラだったが、風の刃は受け止められてしまった。

あの時の夜と同じ、白い光で覆われた左手で。

そして、

「霸っ!」

右手による掌打をサラの腹に打ち、サラは吹き飛ばされた。

「そこまで!」

校長先生による声により、模擬戦闘は終わった、

「やはり、能力者相手だと徒手空拳だけで勝つのは難しいですか…

…」

「いくらヴァン先生が強くても、一般人と能力者では雲泥の差がありますからね。気には気に対処するしかありません」

「しかし、この無効化能力だけはあまり使いたくありませんね。何だか反則気味っぽくて」

「なら、普通に火や水等の能力を使えばいいんじゃないんですか？」

「やはりそうなりますか」

「……え？先生、そういう気の変化を使えるんですか？」

「フランと、腹の痛みの引いたサラは同時に疑問を投げかけた。

「ええ、使えないと言えば嘘になりますね。」

「でも、授業では使えないって……」

「得意ではないと言いましたが、使えないとは言ってませんよ？」

「……」

二人は何だか騙されたような感じがして、呆気に囚われた顔をした。

「それで、どうでしたか？結果は」

「そうですね。過去の経験から、相手の能力による攻撃を避けたりこちらの攻撃を当てたりするのは可能かもしれませんが、ある程度の強者には1対1でも能力を使うしかない、そういった感じですね」「とすると、やはり能力を出す必要があるかもと？」

「相手によると思いますね。大会でもあまり目立ちたくはないのですが……明日次第ですね」

言い終わるとヴァンは二人に顔を向け、

「二人とも、今日はよく手伝ってくれましたね。ありがとうございます」

「いえ、私も久々に模擬戦ができたので、楽しめました」

「最後のは少し痛かったです、私も問題ないです。むしろ私達を選んでくれて、ありがとうございます」

「いえいえ」

「それより、明日からの試合、頑張ってくださいね。応援していますから」

「私も、先生が勝つのを期待してます」

「そう言われたら、ボクも期待に答えるしかないですね」

ヴァンは苦笑しながらそう呟いた。

大会前日（後書き）

さて、このような文でいいのかと少し迷いましたが、投稿させてもらいました。

大会への繋ぎみたいなもの、ですね。

今回でも少し書きましたが、次から戦闘のシーンが多くなってくると思うのですが、うまく書けるかどうか……。

自分なりに書くことは思ってますが、ヘタに書いてたらすいません
orz

意見や感想、評価等、書けていただけたら幸いです。

大会予選

大会当日。

参加応募者は五十人を超え、会場は賑わっていた。

「これは……沢山いますねえ」

その光景を見ながら、ヴァンは呟いた。

だが、その大勢いる人の殆どが、何かしらの体術、武術、気の扱いに慣れている事をヴァンは雰囲気のようなもので感じ取った。

「これは、なかなか苦労しそうですね」と苦笑する中。

「お待たせいたしました」

審判を勤める男が、参加者の前に出てきた。

「今日は忙しい中集まっていたいただき、ありがとうございます。ただ、人数が多いため、今回は予選を通じて参加者を絞り、本戦を行いたいと思います」

「くじ引きにて対戦相手を決めてもらい、勝った方が本戦出場となります」

そして全員がくじを引き、ヴァンの対戦相手も決まった。

最初の予選。

相手は大柄な男だった。

ヴァンと男が戦いの舞台に着き、一定の距離を保って互いに向かい合う。

「ルールは、相手が負けを認めるか、場外となった時に勝ちが決まります」

「また、基本Cクラスの攻撃はそのまま通りますが、Bクラス以上の攻撃は気で構成された結果により直接当たる事はありませんが、衝撃が相手に伝わるようになっていきます」

「武器や能力を使つての刃物等の構成は認めます。また、実戦を想定しているため、急所への攻撃も認めますが、その場合もまた結果が張られ衝撃のみが伝わるようになっていきます」

そして審判が一息置いて、

「では、始め！」

その合図の瞬間、ヴァンが走り、男に走り、

「覇っ！」

勢いに任せて拳を放つ。

だが、

ガゴッ！

鈍い音を立てて、ヴァンの拳は男が肘から先を覆うように作った石の腕に阻まれる。

続いて体を回転させ、回し蹴りを当てようとするも、同じくそれも石の腕に当たる。

「受けっぱなしは趣味じゃねえんでな！」

そう言い放つと、両手を石の塊と化した男が連続で攻撃を繰り返す。

しかしそれを、ヴァンは紙一重で避けていく。

「ふんぬ！」

男が体を回転させて、裏拳を放つが、ヴァンはそれを避けて、男の無防備な顔に蹴りを当てた。

「ぐがつ！」

それで男は倒れ、同時に腕の周囲の石が崩壊した。

男は起き上がったが、再度石の腕を作り出す前に、

「崩拳！」

掛け声と共にヴァンの放った拳が腹に当たり、男は吹っ飛び、場外となった。

「それまで！ヴァン・ガルド選手の勝ち！」

「ヴァン先生、予選通過おめでとうございます」

舞台を降りたヴァンに、フランがねぎらいの言葉をかける。

「ありがとうございます。何とか能力を使わずに倒す事はできましたね」

「ところで、さっきのハウケンとは？」

「この世界の極東地方に伝わる拳法の型の一つですよ。ボクはそっち方面の拳法を主に学んでいますので」

そんな会話が続くうちに、予選が進んでいく。

予選は順調に進み、64人いた参加者は32人になった。

「予選が終わったので、次は本戦となります」

「では本戦の前に、王族の一人であるノア様からの挨拶です」

そう審判が言くと、一人の若い男が舞台上がり、審判からマイクを受け取った。

王族特有の豪華な服を着た青い金髪の男は、周囲をぐるりと見渡し、
「皆、今日は天気にも恵まれ、いい試合日和となった」

「これだけの強者が集ってくれた事を私も嬉しく思おう！」

「本大会にて、各々が力を出し切って戦ってくれる事を切に願いたい」

演説が終わり、会場から拍手が送られる。

では、とノアは審判にマイクを渡し、座っていた椅子に戻る。

「ノア様からの挨拶も終わりましたので、これから本戦を始めたいと思います！」

その声に、会場が歓声に覆われた。

「さて。問題はこれからですね」

集められた参加者達。

この中で、自分はどこまで勝ち進む事ができるのか。

また、本当に暗殺を考えている人間がいるのか。

問題は山積みだった。

「まあ、とりあえずは一戦一戦を勝ち進む事ですか」

大会予選（後書き）

書いて一言。

相変わらずの文章力だな」と。

戦闘シーンもありだし。

そんな自身の作品を読んでくださっている皆様方には感謝感謝です。
一応何作か先行で書いていて、誤字脱字がないのを確認してから投稿してるんですが、それでも毎回「こんなんでも面白いかな」とか「相変わらずのバトルシーンがなー」とかですが。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

本戦1回目

予選が終わり、本戦が始まった。
舞台上上がった選手達は、能力を身に纏い、あるいは放ち、互いに戦う。

そうして順調に本戦は進み、

「次、ヴァン・ガルド選手とライ・サラザール選手！」
審判に呼ばれ、ヴァンは舞台上上がる。

次に出てきたのは、細身の体格の男だった。

（武術体術を使うようには見えませんが……放出系を得意とする人でしょうか）

互いに距離を取り、

「では、始め！」

合図と共に、戦いは始まった。

合図の掛け声が上がると同時に、ライは周囲に小さく丸い火の玉を何個も作り出した。

そして、

「はあっ！」

手を前に突き出すと、それらが一斉にヴァンに襲い掛かる。

（流石に全部を体術で避けるのは無理そうですか）

そう考えたヴァンは、両手に薄い水の膜を張り、向かってきた無数の火の玉を徒手空拳で叩き、打ち落とす。

だが、

「らあっ！」

その間にライは炎の剣を作り、ヴァンに走り出していた。

火の玉を全部打ち落とした頃にはライはヴァンの目前に迫り、掛け声と共にヴァンに切りかかる。

（近距離も得意のですか。意外ですね）

そう思いつつも、それをヴァンは紙一重でかわす。

だがそれでも完全にかわしきる事は敵わず、ヴァンの体に炎の剣の熱が走る。

そして接近した後は近距離で互いに攻撃を当てようとし、またはかわし、距離が離れると再度火の玉がヴァン目掛けて空を走る。

だが、だんだんとヴァンの攻撃の手数が少なくなっていき、ついには防戦になった。

そうして、ヴァンの防戦一方な戦闘は続いていく。

「大丈夫かな、ヴァン先生」

「私もヴァン先生が能力を使ったのは初めて見たけど、それって相手が強いって事だよね」

観客席にてその光景を見ているフランとサラは、心配げに言葉を交わしていた。

「今、ヴァンって言った？」

「……」

聞いた事のない声に、二人が振り向くと、そこには修道女と、金髪の女性と、古風な服を着た女性が立っていた。

「隣、いいかしら」

「あ、ええ。どうぞ」

了解を得ると、その三人は二人の近くに座って戦いを見物し始めた。

「あの、あなた達は？」

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね」

そう言うと、金髪の女性は二人の方を向き、

「私はアリエル。ヴァンの旧友といったところかしら」

「拙者は風祭時雨と申す。ヴァン殿との関係はアリエル殿と同じです。以後、お見知りおきを」

「私はシエルです。二人と同じく、ヴァンさんの旧友ですね」

「私はフラン・クラーです。ヴァン先生に授業を教えてもらってます」

「私はサラ・サーヴェントです。同じく、ヴァン先生の生徒です」

「成る程。あなた方がヴァン殿の教え子でしたか」

「こんな可愛い生徒を持っているとは、ヴァンも果報者ね」

可愛い、と言われて、二人は赤面する。

「それにしても、ヴァン殿。大会に出ないと言っておきながら出ているとは。もし知っていたら拙者も参加していたのに」

「あー、それには何か事情があるらしくて」

「事情？……まあ、それは後で本人に詳しく聞こうかしら」

「それにしても……」

五人は、互いに自己紹介をした後、ヴァンの戦いを見ていた。

ライは火の玉と剣を操り、ヴァンに攻撃を仕掛けている。

対するヴァンは水の膜を腕に纏って防御しているが、防戦一方である。

「先生、大丈夫かな」

「何がですか？」

「だって、先生防戦ばかりで、攻める気配がないんですよ？」

「大丈夫です。相手があの程度なら、何とか耐えますよ」

そう言うシエルの顔は、それが当然とばかりな顔をしていた。

防戦一方のヴァンだが、避ける事はできても体は相手の能力による熱で熱くなっていた。

だが。

（相手がどういう戦法をするのか大体は把握できました。火の玉と炎の剣を同時に出す事はできないようですね。なら……）

そしてライが再び火の玉を作り出し、ヴァンに放った、その時。ヴァンは腕に張った水の膜を強い勢いで前方に放ち、全ての火の玉を打ち消し、同時に走って接近する。

火の玉の残留がヴァンの体に掠り、熱い感触が体に残るが、構う事なくライの目前まで迫った。

「なっ!？」

驚いたものの、炎の剣を作り出そうとする。

だが、

「だあっ!」

それが作られる前にヴァンが飛び蹴りを放ち、それがライに当たり、彼は倒れた。

そして起き上がろうとするも、その目前には戦闘態勢を構えるヴァンの姿があった。

「ま、まいった」

「それまで! 勝者ヴァン・ガルド選手!」

その声に、会場は騒ぎたった。

「ね? 何とかなったでしょう? あの火の使い手は遠距離と近距離を同時に使う事ができないようなので、火の玉を消されて無防備になったところを狙われたんですね」

「はあ……」

シエルの解説に、二人は相槌を打つしかなかった。

そして戦いが終わり、ヴァンが控え室に向かうと、

「先生、1回戦勝利おめでとうございます」

ヴァンの勝利を嬉しく思っているフランクと、

「次も頑張ってくださいね」

同じ思いを抱いたサラの二人の生徒と、

「ヴァン殿。出ないと言っておきながら出ている理由、少し聞きたいのだが」

少しムツとした顔つきの時雨と、

「ヴァンさん、1回戦目としてはまあまあですね。でもあの頃と比べると動きが鈍っていましたよ?」

少し悪くなつた成績を見る先生のような表情のシエルと、

「ヴァン、今日はゆつくりと見学させてもらうわよ?」

普段と変わらない雰囲気のアリエルの、三人の旧友が出迎えてくれていた。

「三人とも来てたんですね。時雨さん、訳は一応言わせてもらえますか?」

「そのつもりで労いも兼ねて来たのでな」

そしてヴァンは、時雨達に、大会に出た理由を話す事にした。

本戦1回目（後書き）

とりあえず投稿させてもらいました。

やっぱ戦闘シーンうまく書けないっすorz

その辺がどうにかできればな！。

お気に入りさんが増えていつてるのを見て、「これを見てくれる人があるんだな！」と思うだけで感謝感激です。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

本戦2回目

大会を利用した王族の暗殺。

その話を聞くと、しぶしぶ納得したといった感じで時雨は引き下がった。

「まあ、ボクも噂程度だと聞かされているだけですし、念のため程度でしょうが」

と、両手を肩の位置まで持っていき、やれやれのポーズを取るヴァン。

「しかし、物騒な話だな。王族の暗殺とは……」

「もし本当だとしても、……実行なんかさせませんよ。ヘタをしたら、また前戦争のような抗争が起こるかもしれませんからね」

そう言ったヴァンの目は、静かな真剣味を奥に見せていた。

その間に他の試合が終わり、第二試合目が始まり。

次々と勝者敗者が決定していく中、いよいよヴァンの出番になった。

そしてヴァンと対戦相手が呼ばれ、両者が舞台に立つ。

合図が出る前に、構えるヴァン。

それに対して、対戦相手のは両手に収まる程の筒のような物を持つていた。

そして相手が集中すると、その両端から刀の長さ程度の風の刃が出現した。

（変わった武器ですね。どいう戦い方をするのか分かりませんし、相手するのに苦労しそうです）

「両者準備はいいですね？……では、開始！」

合図と同時に相手の女性はヴァンに向かっていった。

向かいながら、両手で持った武器の柄部分を回転させる。

そうする事により、風の刃は回転し、円盤状になる。

その円盤状になった武器で、袈裟切りの形でヴァンに切りかかる。

「つつ！」

それを避けるが、今度は武器を巧みに操り、武器を両手で回転させ、または体を回転させながら、両刃の武器をうまく利用して両刃で交互にヴァンに切りかかる。

それを紙一重で避けつつ、

（風属性ですか。火や水で受ける……のは今のボクの力から考えると論外として、なかなか能力を使わせてもらえる暇を与えてくれそうにありませんね）

「へえ……今度の相手はなかなかやるじゃないの？」

「だな。あれでは今のヴァン殿では苦戦するかもしれん」

「そんなに相手は強いんですか？」

「風属性に対して、有効な手段は物理的な防御等ですが、ヴァンさんはその系統を接近戦ではあまり使わないですよ。ほとんど無効化能力で戦ってましたからね」

「石や鉄等を使った操作、放出系なら使えますが、相手が接近戦となるとなかなかその機会を与えてくれそうにありませんしね」

そんな五人の思惑とは別に、戦闘は続いていく。

三人の考察通り、ヴァンはまた防戦一方になっていた。

風に対しては物理的な攻撃や防御が有効だが、なかなかその機会を与えてもらえない。

「どうしました？防戦一方でも勝てませんよ！？」

そんな挑発にも、

「そんなに反撃されたいなら、そこで横になって寝転んでくださればいいのですがっ！」

「それは無理な相談ですねっ！」

そんな会話を織り交ぜつつ、戦闘は続いていく。

そんな中、ヴァンが勢い攻勢の勢いに負けて体のバランスを崩す。
「今っ！」

その好機を見逃さず、女性はヴァンに切りかかる。

そのタイミングといい、ヴァンには避ける暇がなかった。

（仕方ないですね……）

ヴァンは一瞬神経を集中させ、体に白い衣を纏う。

「!?」

初めて見る能力だが、それでも女性は攻めの手を緩めずにヴァンに切りかかる。

そしてヴァンの目前に風の刃は振り落とされる、その時。

ヴァンの白い光に包まれた左手が、相手の風の刃を文字通り受け止めた。

「なっ!？」

この行動は想定外だったらしく、女性は一瞬動きを止める。

その隙をつき、

「せやっ！」

声と共に、ヴァンは女性の腹部に蹴りを打ち込む。

「ぐっ?!」

女性は何とか持ちこたえるが、それでも体のバランスを崩していた。

その機会を狙い、ヴァンは女性に肉薄する。

「なんのっ！」

女性は再び両刃の剣を作り出し、ヴァンに切りかかる。

だが、

「もうあなたの攻撃は効きません！」

そう言つと、白く光る左腕で再度風の刃を受け止める。

「なっ!?!」

その光景に、驚きを隠せない相手選手。

その一瞬の隙を狙い、

「霸っ!」

無防備になつていた相手の体に拳を打ち込み、女性は倒れこんだ。

「くっ……動けないか。降参だ」

「それまで! ヴァン・ガルド選手の勝ち!」

「やはり、あの手合いだと、無効化能力を使う必要がありましたか」
戦闘の様子を見て、感想を述べるシエル。

「と言うより、ヴァンが弱くなつてるんじゃないかしら。あの頃と比べると明らかに動きが鈍つてるわよ?」

「あれで、ですか?」

「二人はどこまで知ってるかは知らないけれど、昔のヴァンはもつと強かつたわ。それこそAランク相手でも引けを取らない程度にはね」

「……」

その言葉に、フランとサラの二人は絶句した。

「まあ、結果はヴァンの勝利に終わった事ですし、また労いの言葉でもかけに行きますか」

だが、時雨は、

「拙者は少し気になる事があるのでな。他の試合も見に行く事にする」

「分かりました」

シエルの言葉に、時雨を除く四人は控え室に向かった。

その試合が終わつた後、別の試合では。

傭兵風の男が、圧倒的な強さで対戦相手を屠っているところだった。

「まだこの程度じゃ終わらねえなあ…… 蛮、早くお前と戦いたいぜ……」

その独り言は、周囲の歓声に紛れて誰にも聞こえる事はなかった。

そしてその場に居合わせた時雨は……

「やはり……あの男……」

「先生、2回戦もおめでとうございます」

「しかし、ここまで勝ち進むと、先生に対する周囲の注目度も上がる一方ですね？」

「それはできれば簡便願いたいのですがね」

苦笑するヴァン。

「ですが、やはりあの相手だとあなたの力を使う必要がありましたか」

「ええ。強い相手でした」

「あなたが弱くなっているんじゃないか？」

「……言わないでください」

そんな中、

「ヴァン殿」

遅れて時雨が控え室に入ってきた。

「ヴァン殿、4回目の相手だが」

「3回戦が残っているのに、もう4回戦の話ですか？」

「少し引つかかる事があつてな」

「引つかかる事？」

「ヴァン殿の試合が終わった後、ある選手の試合を見ていたのだが……」

「あれは、なんとなくだが、あの地域の傭兵の気配がした」
その一言に、ヴァンは少しではあるが、顔を強張らせる。

「とすると……」

「断定はできぬが、暗殺の可能性。少し注意した方がいいかもしれないぞ」

「……分かりました。一応頭に入れておきます」

そう言い返したヴァンだが、その顔は陰しくなっていた。

本戦2回目（後書き）

とりあえず、今書いてる分は全部投稿し終わりましたあゝ。

……疲れた。

全体的にまとまっている（と思いたい）のですが、自身でどれけ書いてもあまり満足できる結果になったかどうかは分らず。精進するしかないですね。

1作1作自体の文章が短めなので書くペースは速いですが、今日からまた仕事始まるので投稿するペースそのものは遅くなるかもorz
ぶっちゃけ、三戦目以降どんな相手でどういう能力を使うか、どんな構想で書くか決まっていんですが（苦笑）

……笑い事じゃねーよ。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

大会一日目終了

本戦二戦目が終わり、三戦目以降は次の日に持ち越される事になった。

それぞれの選手が休息を取る中、ヴァン達もロビーにて休息を取っていた。

「それにしても、ヴァン先生があんなに強いなんて思わなかった！」
「そうね。学校で無能力だって言ってた人達はどんな顔するのかしら」

「やめてくださいよ、二人共。ボクはあまり目立ちたくないんですから」

そんな生徒と教師のじゃれあいに混じりつつ、

「ヴァン殿、今度このような試合があれば登録する時は一緒にしてください。拙者もヴァン殿と手合わせしたい」

「あら、その時は私もよ？ヴァンとまた戦えるなんて、楽しみで仕方がないわ」

「もうしませんよ。一度きりでこりこりです」

「その吸血鬼が出るのなら、私も出ないといけませんね。まだ決着が着いてないんですから」

「そういえばそうだったわね。次があれば楽しみだわ。フッフ……」
「二人共、少し落ち着いてください」

そんな会話が織り交ざる中。

「ヴァン・ガルドさん」

声をかけたのは、二戦目で戦った女性だった。

「軍の中で噂は聞いていましたが、なかなかの強さでした。私、感謝いたしました」

「いいいえ、あなたこそ強かったですよ。流石二戦目まで勝ち残ってきた、とも言うべきですね」

しかし、ヴァンはそこでふと気づいた。

「……軍の中？」

「はい。私は今回の噂を確かめるため、軍から派遣されたうちの一人です」

「なるほど、それであれだけ強かった訳ですね。……そういえば、あなたは？」

「はっ！？失礼しました。私はシヴァ・トレインと言います。シヴァと呼んでくだされば、それで結構です」

「分かりました。ボクの事も、ヴァンでいいですよ」

「はい。ところでヴァンさん、気になっていたのですが」

「何がですか？」

「あの試合中に見せたあの白い力の事です」

「あれは何の属性ですか？白く光る事から、聖属性あたりと踏んだのですが……それでもあれほど簡単に私の風の刃を受け止めたのが納得できません」

「あー、あれはですねー……」

ヴァンは困った顔をして、

「とりあえず、企業秘密という事にしておいてください。あれは対能力者戦においては少し反則気味な能力なので」

「……」

シヴァはあまり納得できないといった様子だったが、

「それよりシヴァンさん」

途中から割り込んできたシエルに、話を持ちかけられた。

「軍所属の人が試合にという事は、暗殺の件は本当なんですか？」

「いえ、私達でもそこまでは掴んでいません。ただ、火のない所に煙は立たないと言いますから、念のためですね。まさか防止する者同士で戦う事になるとは思いませんでした」

「そこはくじ運が悪かったと言っしかありませんね」

とヴァンは苦笑し、

「少し外の空気を吸ってきます。ちょっと気疲れしたもので」

そう言って、ヴァンは夜の空気を吸いに、控え室を出て行った。

「ふう……」

勝ち進む事、暗殺の事、考える事は色々あったが、ヴァンにとっては別の事も考え始めていた。

「ボクの力が、弱くなっている、ですか」

自覚はあまり無かった。

だが、あの数年前の頃と今を比べると、反応速度や能力の使い方等、気になる点はいくつかあった。

そしてなにより、

「ボクは、日常を壊す相手なら心置きなく本気を出せるのですが…

…」

そう。

今回はあくまで大会という、日常の中での一部に過ぎない。

だから、ヴァンはあまり本気を出せずにいるのだ。

「どうしたものでしょうか……」

と、そんな事を考えていた時。

「よう、蛮。間違えたぜ。最初見た時はどこの弱虫かと勘違いした程になあ」

その声と共に、背中に寒気が、そして同時に驚きも走った。

蛮。

それはヴァンが、ヴァンと名乗る前の名前。

それは戦争時まで遡る。

昔ヴァンは、幼少の頃、極東の傭兵に拾われた。

その時に付けられた名前が、賀戸蛮という名前だったのだ。

それからというもの、ヴァンはその傭兵に、戦場で生き残る術を叩き込まれた。

戦闘技術、能力の使い方、心構え、他にも色々あった。

もつとも、ヴァン自身が最初から備えていた無効化能力にはその傭兵も少し驚いていたようだったが。

とにかく、ヴァンは小さい頃にその傭兵に世話になっていた。

そしてある程度生き残る術を身に付けた後、その傭兵は死に、ヴァンは一人になった。

それからヴァンは、今のヴァン・ガルドと改名し、それ以降は単独の傭兵となつて戦場を駆け巡つた。

以後、ヴァンはその傭兵からもらった名前を一度も使つた事はない。

だが、それを知っているという事は……。

「貴様、まさかあの時の……」

ヴァンの昔の名前を知っている人物は二人しかいない。

ヴァンを保護した、もう名前すら覚えていない傭兵。

そして、その傭兵を殺した一人の傭兵……ガルド。

「そうさ、俺だよ。久しぶりだなあ」

「貴様、よくもぬけぬけと言えたものだな！」

ヴァンはガルドに対して臨戦態勢を取る。

「おっと、今ここでお前とやりあう気はねーよ。やるんなら試合でつてな」

「……」

言われながらも、臨戦態勢を解く事ができないヴァン。

そんな中、

「それよりも、お前は気づかないのか？」

「……何にだ」

「はあ……」

ガルドは心底呆れたようなため息を出す。

「小さいガキだった頃のお前が、よっぽど怖いぜ。しつかり平和ボケしてやがる」

「一体何の事だ！」

「じゃあヒントを出してやるよ。この匂い、なんだと思う？」

そう言われ、ヴァンは嗅覚を研ぎ澄ませる。

すると……

「これは……血の匂い……？」

「ああ。さっきお前の第三試合の相手だった奴を潰してきたところだ」

「貴様、何て事を……！？」

「つれねえなあ。ガルトって呼んでくれよ、蛮。心配はしなくてもいいぜ。命に別状はないからな」

おどけながら話すガルト。

だが、周囲からはガルトの殺気が満ち溢れていて、そう簡単に手が出せるような雰囲気ではなかった。

「お前の名前があった時は驚いたぜ。まさかお前もこの大会に出場しているなんてな」

「貴様には関係ない」

そつけない態度を取ったヴァンだったが、この時ヴァンは王族の暗殺とこの男が関係あるのでは、と思い始めていた。

「貴様は何の用があつてこの大会に出た？」

「ああ、そついや忘れてたぜ。確かどつかの貴族様を殺せつて言われてたんだつたか」

「じゃあ、やはり貴様がっ……」

「最初は退屈な事だと思つたがな。お前がいるつて分かつたんなら、そんなのは二の次だ。お前との対戦、楽しみにしてるさ」

「そうそう、もし俺との対戦を邪魔するような素振りを見せたら、まずは王族から先に殺す。だから逃げるなよ？」

じゃあな、とガルトは手を振り、闇の奥へ消えていった。

「……」

その後姿が消えるまで、ヴァンは警戒態勢を解く事はなかった。
いや、正確には動けなかったと言った方が正しかった。

それ程まで、ヴァンにとってはガルムは脅威に感じられたのだ。

「俺に、あの男が、倒せるのか……？」

それが、この夜、ガルムに抱いたヴァンの思いだった。

大会一日目終了（後書き）

ふいふ。

とりあえず、一日目終了〜と。

久々に戦闘のないシーンでしたが、新しいキャラまた出しちゃいました。

次からまた戦闘シーンの連続だと思うのですが、うまく書けるものと心配気味です。

まあ、自分なりに書くしかないんですが。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

本戦3回目

外から戻ったヴァンは、誰が見ても分かるように考え込んでいた。
「どうした、ヴァン殿。何か考え事か？」

「ええ、少し、ですね」

そしてヴァンは少し迷った素振りを見せた後、

「王族の暗殺を実行しようとしている奴が分かりました」

その言葉を前に、一同に動揺が走る。

「それは、一体……」

ヴァンは少し間を置いた後、

「時雨さん、前に言っていましたよね。あの地域の傭兵の気配がする人物を見た」と

「ああ」

「彼ですよ。王族の暗殺を依頼された男というのは」

「本当か!？」

「ええ。さっき外で会ってきました。彼自身は依頼には乗り気ではなかったようですがね。正確には暗殺の件に関してはどうでもいいといった感じでしたが」

「どんな男なのだ？」

「……一言で言えば残忍で、目的よりも過程を楽しむ性格です。正直言って、強いですね」

「彼は試合でボクと戦う事を希望していたようです」

「その前に彼を捕まえないと!」

そんなシヴァの言葉に、ヴァンは首を横に振り、

「いえ。あの男は、ボクとの戦いを第一に考えているようでした。もしそれが達成されないような事が起これば、先に王族を殺す、と念を押してね」

「そんな事が……」

「要するに、ヴァンがその男に勝てばいいだけじゃない。勝算はあ

るのかしら？」

「正直、分かりません。最初から全力でやろうとは思ってますが」

「まあ、どっちにせよ、まずは彼の前に明日の第三試合ですね」

「その必要はありません」

「どうしてですか？」

シエルの言葉に、

「あの男は、ボクが戦う予定だった選手に怪我を負わせたようです。多分ボクは不戦敗で、自動的に第四試合であの男と戦う事になると思います」

あの男が負けなければの話になりますが、とヴァンは付け加えた。

そして翌日。

「皆様、大変長くお待たせしました」

舞台上上がった審判がマイクで喋る。

「少しトラブルがありました。ヴァン・ガルド選手と戦う予定の選手が戦闘不能となりました。よって、第三試合、ヴァン選手は不戦勝として第四試合に繰り上がる形となります」

その言葉に、会場はざわめいた。

また、事の次第を知っていたヴァンも、改めてそれを聞くと、なんと说不えな気持ちになった。

そして、第三試合が始まった。

各自順調に試合が進む中、ついにその男が姿を現した。

「次、ガルド・ヒューガ選手、舞台上上がってください」

その声と共に、その男が出てきた。

ガルドは舞台上上がると、対戦相手を見る。

「さてと。ちょっとは楽しませてくれるんだろうな……」

そして、審判の合図と共に試合が始まった。

ガラムは手で拳銃の形を作り、人差し指を対戦相手に向け、
「おらよっ」

その声と同時に、人差し指の先から気の弾が発射された。
それを対戦相手はかわしたその先に、二発目の弾が迫っていた。
「喰らうものかっ！」

対戦相手は気で構成された鎖鎌のようなものでそれを弾くが、
「なかなかやるじゃないか。ならこいつはどうだ？」

言っと、ガラムは今度は両手を拳銃の形にし、
「そらそらそらっ」

両手で交互に気の弾を発射していく。
だが、対戦相手もそれを器用に弾いていく。

しかし、連続で発射されている事もあって、なかなかガラムに近づけない。

「はあ……てめえもつまらねえな。」

そう言ってガラムは片方の手に気を集中させ、

「らあっ！」

銃弾と言つには大きすぎる、大砲の弾のような大きさの気の塊が
対戦相手に襲い掛かった。

それを避ける事は敵わず、対戦相手はまともにそれを受け、場外
まで吹き飛んだ。

「……じよ、場外！ガラム・ヒューガ選手の勝ち！」

「あれは……」

「ガラムは、見た通り、気そのものを銃弾や大砲のように発射する
放出系を得意技の一つとして持っています」

「赤い髪の色とその技から、赤髪の射手とも呼ばれていたそうです
が」

「ですが、まだあれでも本気じゃない」

「あれでもなんですか？ヴァン先生」

サラの問いかけに、ヴァンは頷く。

「あいつは、その気になればテレビや漫画であるような大口徑のレーザーのような弾も出せます。しかし、今回はあれしか使ってない」

「それで、そんなあいつに勝てるのかしら？ヴァン」

「今回はかりは、やってみないと分かりませんね」

そんな会話をしている時、ガラムは、

「少しはこいつらみたいにつまらない試合じゃなく、ちゃんと楽しませてくれよ？蛮」

クツクツと、喉で笑いながら呟いていた。

そして、第三試合も進んで行き……第四試合。

「次、ヴァン・ガルド選手とガラム・ヒューガ選手！」

呼ばれたヴァンは、舞台に向かっていく。

「大丈夫ですか？ヴァン先生」

そう言われたフランに、

「まあ、ベストを尽くしますよ」

ヴァンは顔だけ振り向き、苦笑いを浮かべながらそう言って、そのまま舞台の方に歩いていった。

本戦3回目（後書き）

遅れましたが、新作投稿しました。

つか、これからの展開どうしよ。

とまあ、個人的な悩みはさておいて……。

個人事情によりやる事が増えたので、投稿期間は少し？長めになる
かもしれませんが、それでも読んでいただければ幸いです。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

本戦4回目

舞台に立つ二人。

そして、

「よう、蛮。戦う準備はできたか？」

「一応、貴様を倒す気ではいるさ」

そう言つて、互いに距離を取る両者。

ヴァンは気を集中させ、体の周囲に白い光を纏わせる。

「ん？なんだそりゃ？」

言いながら、両手を拳銃の形に構えるガルム。

「それでは、いいですね？」

審判は片手を高く上げ、

「試合、開始！」

同時に手を振り下ろし、試合は始まった。

ヴァンはその合図と同時にガルムに向かって走る。

だが、

「おいおい、真っ直ぐ走ってくるだけかよっ！？」

言いながらガルムは両手の人差し指から連続で気弾を発射する。
だが。

その全てがヴァンの光に無効化された。

「つて、なんだよそりゃあっ」

ガルムは驚きながら、そして笑いながらも次々と気弾を撃つが、
その全てが無効化される。

そしてヴァンはガルムの目前に迫り、

「せあっ！」

軽く飛んでからの、頭を狙った蹴り。

だが、それをガルムは腕でガードする。

しかしそれでも、ヴァンは連続で徒手空拳による連続攻撃を続ける。

だが、ガルムもその全てを腕で掌で足でガードし、決定的なダメージを受ける事はなかった。

そしてある程度の攻防が行われた後、両者は一旦距離を置いた。

「……どうやら、その白いは俺の弾を無力化する何かみてえだな」
「……」

「そいつはちと厄介だな。それがある限り、俺は気で攻撃する手段がないと……」

ヴァンは両手を肩の位置まで持っていき、やれやれのポーズをした。

だが、

「でも思ってたかよ!？」

ガルムは片方の指一本に気を集中させ、その一点に気が集まり始める。

（おそらくあれはBクラス程度の攻撃。今のままでは防げないだろうな。だが……準備はできている!）

ヴァンは気を集中させていた左の拳と、右の掌を胸の前まで持っていく、

「コウ!」

その声と共に、胸の前で右の掌に光る左の拳を打ち合わせる。

すると、左の拳に集まっていた光が一気に左腕全体に広がり、同時に青白い紋章のようなものが左腕全体に浮かび上がった。

「なんだそりゃ!？」

言いながら、ガルムは指の先に集まった気を収縮し、それを撃ち出した。

大砲の弾程の大きさに撃ち出されたそれは、ヴァン目掛けて飛んでいく。

そして、

「らあっ!!!」

ヴァンはそれを左腕で弾いた。

「おいおい、マジかよ」

ガルトはその光景を呆気ながら見ていた。

「言っておくが、その攻撃はこれには通じないぞ」

「……」

そんな戦いを、観客席で見ていたサラとフランは目を丸くして見ていた。

だが、

「やはり、あれを出したか」

「あれには我々も散々困らされましたね」

「フフフ。面白くなってきたじゃない」

「あの、三人はあれが何か知ってるんですか？」

サラの問いかけに、

「あれは、ヴァンの特技の一つですよ」

シエルが説明をする事にした。

「確か、名前は英雄の光と言ってましたね。全ての災いを打ち消す希望の光って意味だと本人は言っていましたか」

「英雄の……光」

「あれは左腕限定ですが、Bクラスまでの攻撃を無効化する事ができます。アンチ能力者の異名を持つ原因となった技術の一つですね」

「更に、身体能力も上がります。例で言うなら、マシンガンの弾程度なら普通に避けられますね」

その言葉通り、

「うらうらうらうらっ!!」

ガルトは両手で弾を発射し続けるが、それをヴァンはそれらを目で追い、そして全てを避ける。

そしてガルムに肉薄し、

「せあっ！」

ガルムに拳を当てようとし、

「ぬあっ」

それをガルムが防いだ、と思った時にはヴァンの姿はそこにはなく、

「っらあ！」

側面から、頭部を狙ったヴァンの蹴りが放たれる。

今度はガルムの反応が遅れ、

「があっ！？」

蹴りがまともに側頭部に入り、ガルムは吹き飛ばされる。

同時に、

「これで、終わりだっ！」

ヴァンは左手で空を殴りつける動作をした。

すると、その左手から増幅された気の塊が発射され、追い討ちのような形でガルムに直撃した。

だが。

「ててて……やるじゃねえか、蛮」

起き上がったガルムはよろけてはいるものの、顔そのものは余裕で、むしろ笑ってすらいた。

「そっじゃねえとなあ。小競り合い、喧嘩、戦争。争い事ってのはこっじゃねえとなあっ！！」

高々に言い放ち、右手をまた拳銃の形に構える。

だが、今度はその腕に左手を添えて、

「あれは防がれたが、コイツならどうだ！」

気の集中された右手の指が光り、

「っらあっ！」

そこから、それが発射された。

弾。

そう表現するには薄すぎる威力、正にレーザー砲のようなものが

ヴァンに向けて撃ち出された。

「なっ!？」

ヴァンはそれを避けるが、その砲撃と呼ぶべきものは観客席の方に向かい、

ドオオオオンッ!!

幸いにも軌道はそれで観客席の方には向かわず、舞台を囲っている壁にその砲撃は当たったが、壁はあっけなく崩れ落ちた。

(まずい。あれが観客席に向かったら……)

「まだまだ行くぜっ!」

そして、再度ガルドが気を集中させ、

「これで、どうだあっ!」

再度、砲撃が放たれる。

「いけない!」

それを今度は避けず、左腕で耐えようとするヴァン。

だが、それでも耐え切る事敵わず、ヴァンはその威力に負け、後方に吹っ飛んでいった。

「ぐ……」

ヴァンは何とか立ち上がったが、今にも倒れそうな頼りない立ち方だった。

(これは……少し困った事になったな)

もし今の砲撃をもう一度喰らえば、自分に勝ち目はない。

そう思ったヴァンだったが、

「……」

ガルドは、気の抜けた顔でヴァンを見ていた。

そして、

「てめえ、今試合の勝ち負けより、観客を優先したろ」

「……」

ヴァンは沈黙を取るが、それをガルドは肯定と受け取り、

「はあ、戦う気が失せた。しらけたぜ」

そう言つとガルドはヴァンに背中を向け、舞台を降り、

「おい、審判さんよ。俺の負けでいい」

「は、はい。勝者、ヴァン・ガルド選手！」

その判定が下つた瞬間、会場にまた歓声が響いた。

「おい、蛮」

舞台から遠ざかる姿はそのまま、ただし顔だけヴァンに向け、

「こんな舞台に縛られたお前はよええ。今度はルール無しの戦場で戦いたいもんだな」

「……俺が言つのも何だが、任務の方はいいのか？」

「別に構わねえよ、そんなの。それよりも、久々に戦えて嬉しかったぜ、蛮」

そう言つて、姿を消していったガルド。

「蛮、蛮、蛮、何度もそう気安く呼ぶんじゃないよ」

ヴァンのその呟きは、誰にも聞こえないまま空に消えた。

本戦4回目（後書き）

ふう、とりあえず書き終わりました。

メインとして戦闘シーンもそれなりに書きたかったのですが、頭の中の表現力という引き出しに限度がorz

もつとうまく書きたいなあつてのが今の心境です。

明日からまた仕事なのでプラスこの先どうするのかまったく考えてないので、次がいつ投稿できるかはまったくの未定ですが（笑）
笑える状況じゃないんですがね。

他にもネットゲやら妄想やらやる事が多くて」（＾Д；）↑

そんなボクの作品でも、意見や感想、評価等、書けていただけたら幸いです。

……改めて見てみたら、投稿した時のユニークが1000人を超え、17人の方々にもお気に入り登録をしてもらい、実際嬉しい限ります。

書き手にとって、読み手がいるというのは何よりの励みになりますので。

大会二日目終了

「お疲れ様でした、ヴァン先生」

ロビーで、皆から労いの言葉をかけられるヴァン。

「だが、あのガルムとやらだが。暗殺の件はどうなったのだ？」

「本人はもうどうでもいいと言ってましたね。任務の事は本気でどうでもいいと思ってたんでしょう」

「これで、安心して大会に挑める訳ですね、ヴァンさん」

「その件ですが……ボクは辞退しようかと思ってます」

「……え？」

思わぬヴァンの一言に、皆唖然となった。

「それは……どうしてですか？ヴァン先生」

「そもそも、ボクが出る理由は、暗殺を未然に防ぐ事。それが解決した今、もう目的は達しましたからね」

「ふーん……でも、なんだかつまらないな。もっとヴァン先生の活躍する場面見たかったのに」

「ハハハ、もう十分見れたでしょうに」

そんな会話をしている最中に。

「大会を辞退？それは少し困るんだが」

他からそんな声が聞こえ、そちらを向くと、

「俺としては、あのガルムに勝ったあんたに少し興味が沸いてね。決勝戦で戦ってみたくなつた」

喋り続ける、金髪の若い男がいた。

「ヴァン先生、この人、前回の準優勝者です」

「そういう事。あんたが本来三回戦で戦うはずだった相手は、前回俺を決勝で倒した男だね。できればあんたとその男が戦って勝つた方と俺が戦うつてのが俺のストーリー的には盛り上がったんだが」

「それで、ガルムとはどういう関係なんですか？」

「何、あの男は傭兵の間では噂が立つ程強い男だろ。それを負かし

たあんたに興味が沸いたって訳さ」

「負かしたというより、ガラムの方が勝手に試合を放棄したんですがね」

「どっちでもいいさ。ここまで勝ち上がってきたって事は、それに腕はいいんだろ。頼むよ、辞退なんかしないで決勝で俺と戦おうぜ」

「……」

どうしようか。

ヴァンは心の中でそう思った。

（別に断ってもいいのですが、何だか熱血漢タイプで、後がうるさそうですしねえ……）

「ヴァン殿。この方もそう言っているのだし、決勝に出てみてはどうか？」

「時雨さん、あなたもそう言いますか」

「別に減るものではないのだし、いいではないか」

「はあ……仕方ないですね」

「よし、そうこなくちゃな！」

男はヴァンの手を握り、上下に振った。

「俺はグレイ・バース。グレイって呼んでくれ」

「ボクはヴァン・ガルド。ヴァンで結構です」

「それじゃ、明日の試合もあるし、俺はこれで退散する事にするさ。あんたもゆっくり休めよ」

じゃあな、と片手を振り、グレイはその場をあとにした。

「ヴァン殿、それで明日の試合、どう戦うのだ？」

「どうと言われても……相手の戦法次第ですね」

「ふむふむ。明日の試合、ヴァン殿とグレイ殿の戦いが楽しみだ」
時雨は、ウキウキといった感じで一人盛り上がっている。

「そういえば、あのグレイって選手、ヴァンが二回戦で戦った人が

いたじゃない？」

「ええ」

「あの女の人、 그레이の弟子だって聞いてたわよ」

「だとすると、同じ、もしくは類似する武器の可能性が高いですか」

「どちらにしても、相手の出方を待つのみですね」

「……」

そんなヴァンの思考を、まじまじと見つめるアリエル。

「ん？どうしたんですか？アリエルさん」

「あなた、変わったわね」

「と言うと？」

「昔のあなたは、あの白い力、英雄の光を使って、相手がどんな武器でどんな攻撃をしてきても問答無用で倒していつていた」

「そんなあなたと今のあなた、随分違うと思っただけよ」

「あの力は少し反則気味っぽいので、こういう試合ではあまり使いたくないんです」

「とか言いながら、あなた二回目は英雄の光に頼りつきりじゃない」

「それを言われると、返す言葉ありませんね。次の決勝ではどうなる事でしょうか」

確かに、ヴァンはどうしても普通で勝てそうにない場合、最後の手段として白い光の力を使っていた。

だが、それは絶対に負けられない理由があつたからで、その理由が無くなった今、

（憂いも無くなりましたし、決勝では、あれに頼らない戦法でやってみるのもいいですね）

そんな事も考える余裕ができていた。

「そういえばヴァン先生。英雄の光ってネーミング、どうやって考えたの？それに試合中はコウって叫んでたけど」

「ああ、戦争中は自分にとって、あの光は正に希望そのものだったんですよ。だからそんな名前を付けたんですよ」

「それと、光は極東の方ではコウとも呼びますので、使う時はつい

クセでコウって叫んでしまっんですね」

「でも、すごいですよ。あんな大砲みたいな攻撃も防いでしまっんですから」

「あの状態の左腕は、Bクラスまでの能力を無効化する事ができるんです。気の消耗も少しありますし、数十秒は気を集中しなければいけませんから普段はあまり使えません」

「それに、ヴァンさんは戦争の時はいつもシン・コウを使ってましたね」

「シン・コウ？」

「それはコウの上位版みたいなものです。極東の言い方で真の光と言つのですが。Aクラスの攻撃も無効化できますが、発動まで約5分はかかりますから、使いづらいんですね」

「ふん……」

「まあ、明日の決勝では、一度普通の能力で戦ってみようかとは思つてますよ。どこまで 그레이に通じるかは分かりませんがね」

苦笑を浮かべながら、昔ならありえない思考にヴァンは驚きながらも、楽しんでいた。

そんな気分で戦いに望む。

それはヴァンにとって、新鮮なものだった。

「それで？何か策はあるのかしら？」

「相手の出方や能力にもよりますが、接近戦になるなら考えはありますね」

「フフ……。どんな試合になるか、楽しみにしてるわよ？ヴァン」

「まあ、勝つか負けるかは分かりませんがね」

そんな談笑をしながら、大会の二日目は過ぎていった。

大会二日目終了（後書き）

さて、二日目が終わりました。

ラストバトル、相手がどういう技を使うのか、ヴァン自身にどういう戦い方をさせるか等の構想は練ってはいるので、今回は拠点編みたいな感じです。

ただ、どういう書き方にするかはまだ決めてませんが。

問題は、この大会編が終わってから次のストーリーをどうするかを決めてないという事なんですよね。

早く構想を練らないと。

意見や感想、評価等、書いていただけたら幸いです。

大会決勝戦

「さて、皆様。いよいよ決勝戦です」

舞台の中央で、審判が観客に呼びかける。

「どちらも激しい戦いを潜り抜けてきた猛者です。いい試合を期待しましょう」

「では、双方とも舞台上上がってください」

その声とともに、控え室から二人の選手が舞台に向かう。

一人はヴァン・ガルド。

とある学校の教職員にして、元傭兵の格闘者。

もう一人はグレイ・バース。

前大会に準優勝者としての肩書きを持つ、金髪の男。

二人は舞台に立つと、会場が歓声に包まれた。

「ヴァン。お前がどんな戦い方を見せてくれるのか、期待してるぜ」

言っと、グレイは両手に剣の鞘のような物を持ち、

「期待通りにできるかどうかは分かりませんが、善戦しますよ」

それに対してヴァンは身構える。

「両者、準備はいいですね？ それでは、開始！」

その声と共に試合は始まった。

「行くぜっ！」

声と共に、グレイの両手の鞘から刃が出現し、ヴァンに走り、迫ろうとする。

（二刀流ですか!?!）

それに対し、ヴァンは電流を体中に走らせ、

「せりゃあっ！」

グレイが右手で放った袈裟切り。

だが、それをかわすヴァン。

しかし、更にそこから左の刃で横に薙ごうとする。

その動きは流石とでもいうべきか、一撃目と二撃目に隙がなかった。

普段のヴァンなら二撃目は避けられなかっただろう。
だが。

「……今、お前何した？」

ヴァンは、二撃目の横薙ぎをかわし、後方に飛んでいた。

「今の攻撃、見てから普通にかわしたのでは間に合いませんでした。
なので、近距離戦のとおきを使わせてもらいました」

「簡単な事です。体が動くのは、脳から微弱な電気信号が体に流れるからです。ですが、今はそれを手動で行っています」

「手動で、だと？」

「見て、二撃目が来ると分かった瞬間に、脳から体に流れる電気信号を雷属性の能力を使って早め、通常より早く、避ける動作を行いました」

「分かりやすく言えば、見て、頭で考えながら即時にその動作を行える、つまり今のような俊敏な動きができる訳です」

「……やっぱ、ヴァンお前すごいな」

「それ程でも」

そして両者はしばらく無言で向かい合い、

「これだから、強い奴と戦うのは面白いっ！」

言いながら、再度グレイはヴァンに向かっていった。

「うらうらうらうらっ！」

グレイは自前の二刀を使い、上下左右あらゆる方向から斬撃の連打を繰り返していく。

だが、ヴァンも能力による体術を使い、巧みにそれらをうまくかわしていく。

その間にもヴァンも反撃を仕掛けようとするのだが、片方の刃で防がれ、その間に片方の刃で反撃させられ、うまく攻撃があたらない。

そんな攻防が続き、

「うらあっ！」

그레이が片方の刃による突きをヴァン目掛けて行う。

だが、それをヴァンは紙一重で避ける。

しかし。

「見える攻撃が避けられるならっ！」

그레이はヴァンの視線からもう片方の刃を隠すように体を回転させ、

「見えないところからならどうだっ！」

背後から、ヴァンをその刃で斬ろうとする。

「っ！？」

ヴァンも、流石にこの攻撃は避けられず、片方の手を刃の前に持つていき、

そのまま受け止めた。

白く輝いた右手で。

「なあっ！？」

その光景に 그레이の動きが一瞬止まった。

その隙にヴァンは左手を構え、その手に電気系の力を溜め、

「雷華崩拳！」

雷の属性を伴った崩拳が 그레이に炸裂した。

「ぐはっ」

それをまともに喰らい、 그레이は吹っ飛び、そのまま転がった。

「な、なんだ今の白いの、それに今の技は……」

「白いものはボク自身の能力で、技は崩拳に雷属性の能力を上乗せしたものです」

「なるほど。前者はよく分かんが……とりあえず動けねえ。まいった！」

「 그레이選手が降参を認めました！よって、今回の気道大会優勝者、ヴァン・ガルド選手……」

審判の言葉に、会場が騒ぎ立った。

「ふーん、結局あの無効化使っちゃったのね」

「それ程、グレイ殿が強かったという事だろう。まったく、あの斬撃は凄まじいものだった」

「ヴァン先生、やっぱり強いな」

「うん、すごく強いね」

「師匠、負けてしまったか」

「……あなたは誰ですか？」

「失礼。私はグレイさんに教わっている者です。ヴァンさんと二回戦で戦ったと言えば分かるでしょうか？」

「ああ、あの時の」

「師匠は負けてしまったようですが、あの顔を見ると、悔しいのとすつきりしたのが一緒になってるみたいです」

「お主の師は、余程こういう事が好きなようだな」

「ええ。強い人と戦うのが師匠の楽しみでもありますから。今回は残念ながら負けてしまいました」

そんな会話が観客席の一部で行われている中、

「グレイさん、立てますか？」

「ああ、何とかな。しかし、あの一撃はまいったぜ。あの背後からの攻撃で決まると思ったからな」

「ボクもあれは想定外でした。おかげで切り札を使うしかありませんでした」

「あれについては、こっちも考えてなかったぜ。まさか刃を直接手で受け止めるなんてな。手、怪我してないか？」

「それについては問題ないです。あれは能力そのものを無効化する能力なので」

「なるほど。道理で気の刃が通じなかった訳か。機会があったらま

「たやろうぜ」

「できれば簡便してほしいですね。ボクは争い事は嫌いなので、ヴァンは苦笑し、グレイはそんなヴァンに、

「それだけ強いのもったいない」

と言い、そんなこんなで大会は終了した。

大会決勝戦（後書き）

さて、書き終わりました。

しかしぶつちやけ、次は何を書こうか、まったく考えてません。
何を書こうか。

何を書こうか。

大事な事なので3回（ry

とりあえず、妄想……じゃなくどんなストーリーにしてみるか、
頭
の中で構想してみます。

意見や感想、評価等、書けていただけたら幸いです。

大会終了、その後

大会が終わり、内容は授与式に移った。

会場がざわつく中、

「二位、グレイ・バース選手！」

言われて、グレイが王族の一人、ノア・シースの前まで歩いていく。

そして彼の前に行くと、

「グレイ・バース。今大会も惜しくも二位となったが、その二刀の捌き、誠に見事であった」

ノアはそう言つて、グレイに賞品を渡す。

「ありがとうございます、ノア様」

グレイは一步退くと礼をし、その場を去っていった。

「続いて、一位、ヴァン・ガルド選手！」

そして、ヴァンもまたノアの前まで歩いていく。

ヴァンが彼の前に立つと、ノアは品定めをするような目でヴァンを見据え、

「お主がヴァンか。軍から噂は聞いているぞ。今大会、難儀であった」

「もったいないお言葉です」

二人は一言ずつの会話をすると、

「ヴァン・ガルド。今大会初出場ながら、よくここまでの結果を残した。天晴れである」

ヴァンは頭を下げると、ノアから賞品を受け取り、グレイと同じようにその場から去った。

「さて。これで今大会も終わった訳だが、各々の武術、気術、どれもこれも目を見張るものがあった。各自、よりいっそう精進しても

らいたい」

「では、これにて閉会式を終えるものとする！」

「ヴァン先生、優勝おめでとうございますっ！」

「優勝おめでとうございます」

「ありがとうございます、二人共」

「次またこのような事があれば、教えてもたいなものだな、ヴァン殿」

「そうですね」

「シエルとの決着を決めるにはいい舞台だわ」

「ボクが参加するかどうかは分かりませんがね」

「ヴァン、今度やる時は負けないぜ」

「私も、師匠やヴァンさんに負けないよう努力します」

そんな会話をしながら、会場をあとにする一同。
だが。

「すいません、皆さん。先に行ってもらっていいですか？少し急用ができたもので」

そう言つて、ヴァンは皆と別れ、

「……そこにいるんだろう？ガルム。出て来い」

言われて、建物の影から姿を現したのは、ヴァンの想像どおり、ガルムだった。

「今更何の用だ？」

「何、優勝おめでとう、の一言でも言つてやろうかとも思つてな」
「……」

「まだ、あいつを殺した事を根に持つてるのか」

「あの時、立場はお互い敵同士だった。状況を見れば仕方の無い事だ。が、納得はできない」

「ま、好きに考えりゃいいさ」

ガルムはため息をついた。

「王族の暗殺。お前が関わっている事は聞いたが、一体何故今更そんな事を？」

「さあな。依頼した奴に聞いてくれ。俺は依頼され、それをこなそうとした。ただそれだけの事だ」

「そいつの名前は？」

「おいおい、そこまで教えられねえな。一応俺の依頼主様だぜ？まあ、もしかしたらの話だが、あの戦争の再来を望んでいる奴か、その集団がいる、のかもしれないなあ」

「お前はどうかんだ」

「俺か？俺は単なる傭兵さ。依頼があれば動いて、それをこなす。ただそれだけさ」

「……」

「お互い、縁があつたらまた会うだろうよ」

じゃあな、そう言い残してガラムは去っていった。

「あ、ヴァン先生、遅いー！」

「すいません、遅れました」

ヴァンは先に行っていた一同に追いつくと、一言そう言って、いつもの日常に帰っていった。

彼にとつての一つの騒動は、とりあえず終わりを迎えた。
だが。

彼の過去に関わる者達が起こす騒動にまた関わる事がないとは、少なくとも言い切れない。

その時、ヴァンが何にどんな形で巻き込まれるかは……まだ誰も知らない。

大会終了、その後（後書き）

いつもより短めになりましたが、投稿終わりました。

……本気と書いてマジな話、次のストーリーどうしよう。

まあ、どうにかありますか（笑）

笑えないねえ。

さて、これで一つの物語が終わった訳ですが。

次はどんな風にしようか、ちと思考中です。

もしかしたら打ち切りでこのまま終わりってな可能性も……あまり考えたくないなあ。

もしまた見かける事があれば、意見や感想、評価など、よろしくお願ひします。

傭兵との出会い

昼休みの屋上。

そこには適度な日差しがさし、そこでフェンスにもたれていたヴァンは、いつものこの平穏な日常を楽しんでいた。

もっとも、前とは学校での授業の内容が少し変わったが。

大会で優勝した事もあって、普段は関わりのない生徒からすらも「実習して欲しい」とせがまれるのだ。

ヴァン自身は少しでも授業が楽しくなるのなら、と要望に答え、言われる度に能力を使っているのだが。

「にしても、こう毎日続くと疲れますねえ」

苦笑しながら、ヴァンは呟いた。

そんな時。

「ヴァン先生」

声の方を振り向くと、フランの姿がそこにあった。

フランはヴァンの隣まで行くと、

「先生、今日も実技お疲れ様です」

「わざわざありがとうございます」

更に。

「フラン、行くの早いよ」

遅れて、扉の向こうからサラの姿も出てきた。

「二人とも、どうしたんですか？」

「いえ、少し気になる事があったので」

「気になる事？」

サラは息を整えると、じっとヴァンの目を見て、

「ヴァン先生はあの三人、時雨さんとアリエルさんとシエルさんと

昔からの知り合いなんですよね？」

「ええ。最初に知り合ったのは、ファルガ地域でボクが傭兵をしていた時でしたね」

「その時、四人はどんな関係だったんですか？」

「そうですね……時雨さんはボクと同じ傭兵、シエルさんは教会所属、アリエルさんは気分そのまま自由奔放といった感じで、皆バラバラでしたからね。味方の時もあれば、敵だった時もありましたよ……それが今ではあんなに。シエルさんとアリエルさんは除いてですけど、それでも皆仲はいいですよね」

「そうですね」

「敵だった時もあったのに、どうしてそれだけ仲がいいんですか？」

「まあ、色々ありましてね」

「……よかつたら、教えてもらってもいいですか？」

その質問に、ヴァンは軽く空を見上げ、

「あの頃は、色々ありましたね……」

昔を思い出すように語り始めた。

ヴァンが生まれた町。

店や露店から品物が奪われ、それを行った者に店主が暴力を加える。

だが、そんな光景は日常茶飯事。

脅し、喧嘩、争い。

それらが絶えない、そんな場所だった。

ヴァンは生まれつき、特殊な能力を持っていた。

それは、集中すると体の周囲が白く光り、全ての能力を無効化する能力無効化能力。

そのおかげもあってか、普段から能力での争いに巻き込まれても、生き残る事はできた。

突然の事だった。

町に対する、無差別のAクラスの気による攻撃の連打。
町の住人はなす術も無く、ただ屍と化していった。

女も男も老人も赤子も関係無く。

そして。

その日を境に、その町は地図から姿を消した。

「これは酷いな……」

町、いや、町だった廃墟に立ち寄ったある傭兵は、一言だけ、そう言った。

その場に広がるのは、文字通り廃墟と化した町の残骸。
その傭兵は、ガレキとなったその場所を歩いていた。
別に用事があった訳ではない。

こういう場所にも、何か拾い物があるかもしれない。
そう思った事での行動だった。
そして。

歩いていた傭兵は。

「お前、誰だ？」

一言だけ聞いた。

あまりに不可解だったから。

周囲は死体だらけ、そしてガレキの山。

そんな中、一人でポツンと立っている少年がいた。

その少年は、何をするでもなく、ただぼうつと立ち尽くしていた。
少年は傭兵の方を向くと、

「俺のいつもを、こんなにしたのは、何なんだ？」

傭兵は黙り込んだ後、

「……さあ、分からない。この一帯は戦争、争いが盛んでな。こんな光景も珍しくもない。誰がやったかなんて、それこそ分からない」

「じゃあ、戦争が、俺の町を、こんなにしたのか？」

「そう言うなら、そうかもしれないな。二度目になるが、お前、誰だ？」

「……この町に住んだ。少し前に何かが色々降って来て、皆死んで、壊れた」

「そうか。生き残ったって訳か。運が良かったな。いや、こんな時勢に生き残って、運が悪かったって言うべきか」

「おじさんこそ誰なんだ？」

「俺か？俺は、どこにでもいる傭兵さ。名前は――」
傭兵は、自分の名前を語った。

「――、戦争が無くなるにはどうしたらいいんだ？」

「それは、どっちかが勝ってどっちかが負けるしかねえな。ただ、どっちにも言い分があるし、どっちが悪いとも決められないが。まあ、いつも勝った方が正義なのさ」

「じゃあ、俺を連れて行ってくれ」

「何？」

「どっちかが勝つ事で俺の日常が戻るなら、その為なら何でもする。だから、それを教えてくれ」

「……お前、名前は」

「名前はウアン」

「じゃあ、今日からお前は俺の養子にする。だから、俺の言う事をちゃんと聞け。お前の願いを叶えたいならな。色々教えてやる」

「分かった」

「それと、ウアンじゃ呼びにくいから、俺が新しい名前を付けてやる。俺の苗字が賀戸だから……賀戸、蛭でどうだ？」

「ばん？」

「そうだ。お前は今日から賀戸蛭だ」

「分かった」

それから、傭兵とウアンの二人旅が始まった。

「つて、まずそこからですかあっ!？」

「……まずかったですか？」

「いえ、ヴァン先生の過去も興味あるので、もう少し聞いていたいです」

「……それもそうね。ヴァン先生、続けてお願いします」

「分かりました。では、続けて……」

そして、ヴァンの過去から話は続く。

傭兵との出会い（後書き）

何とか過去の回想という手段を思いつく事により、今の時の流れの物語を一時中断する事に成功しました。

…… 全力でごめんなさいorz

この過去辺終わったら書く（予定？）ので。

それでは、しばしの間過去の回想をお楽しみください。
意見や感想、評価等、いただけると幸いです。

一人の傭兵との別れと一人の傭兵の誕生

ヴァンと傭兵との二人旅が始まった。

傭兵は自分の仕事をこなしながら、その傍らで字や言葉、生活に関わる事等の一般常識から、気の扱い方や体術、武術に関する事も教えていった。

またヴァンも、それが自分の生きる目標になる事ならと、それらをどんどん吸収していった。

そんな中、

傭兵は自分の能力が無効化されるのを間近で見て、

「そんな能力があるのか」
と驚いたりもしていたが。

閑話休題。

時折、傭兵の仕事、つまり戦争や紛争にも手を出し始めたヴァンだったが、元々資質があつたのか、彼はその才能を伸ばしていった。そんなヴァンにとって、この傭兵は教えられる師であり、親に近い存在だった。

その傭兵に、色々教えられる事は、ヴァンにとってある意味新鮮だった。

親のいないヴァンにとって、それは非日常の中の幸福でもあつた。傭兵も、

「まるで本当に自分に子どもができたみたいだよ」
とヴァンに笑いながら語りかけた。

そんな時、事件が起こった。

事の始まりは、自分も傭兵として参加したとある紛争。

「相手には赤髪の射手がいるのか」

そんな呟きをもらしたのは自分の育ての親である傭兵。

その呟きには、苦々しさが混じっていた。

「そいつ、そんなに強いのか？」

「ああ。強い奴には通り名が付く。中でも彼は別格だな。とても強い」

そして。

「へえ。子連れの傭兵なあ、珍しいじゃねえか」

そいつと出会った。

自分達と彼は敵同士であったため、すぐに戦闘になった。そして。

傭兵と赤髪の男との激しい闘争になった。

当時のヴァンの目では追いつけない程。

そして。

自分の育ての親でもあった傭兵は死んだ。

赤髪の男の光の砲撃で、物言わぬ亡骸と化した。

「蛮、すまない。俺はここまでだ。今まで楽しかったよ」
そう言い残して。

赤髪の男はヴァンに近づき、

「へえ。蛮ってのか、お前は」

「何で殺したっ！」

「何で？そりゃ、敵同士だからな」

「俺も、殺すのか？」

赤髪の男に対して、ヴァンはこれでもかという程の殺気を出す。

「おいおい。そんな小せえのに、なんて殺気を出しやがるよ」

そう言いつつ、男は右手を鉄砲の形にし、

「そらよ」

声と共に、指先から気の弾が出現し、ヴァンに向かった。

そして、ヴァンはそれをまともに喰らい、その場に倒れた。

「俺の名前は、ガルム・ヒューガだ。覚えとくといひさ。今のは挨拶代わりだ。もし生き残ってたなら、また出会う事もあるだろうよ」

そっくり残し、赤髪の男は去っていった。

それからしばらく経って、ヴァンはまともに動けるようになった。そしてそばで亡骸と化していた傭兵の近くに寄り、

「今までありがとう。あんたの事は忘れないよ」

そう言って、地面に穴を掘り、そこに傭兵を埋めた。

しばらくして、とある紛争地域にて。

「おいおい、子どもがこんな所にいちゃ危ないだろ」

部隊がいる駐屯所に、一人の子どもが尋ねてきた。

だが、その子どもは、

「俺は傭兵だ。あんた達、戦力が欲しいんだろ？俺を雇ってくれ」

「雇う？お前を？」

対応した部隊の一人はそう述べた後、大声で笑った。

「いいかい坊主。ここは危ない場所なんだ。近くに町があるから、そこまで送って行ってやろう」

「二度同じ事を言わせるな。俺は傭兵だ」

「お前みたいになちつこいのがね。ハッハッハッ！」

男はひとしきり笑った後、

「じゃあ、軽くテストしてやるよ。ほら、どこからでもかかってき

な」

男は、軽く構え、そして、

ドッ！

ヴァンはその懐に一瞬で入り、その腹部に拳撃を放った。
その衝撃に耐え切れず、男は数メートルふっとんだ。

「……ってえ。お前、何者だよ」

倒れながらも言う男に、

「これで三度目だ。俺は、傭兵だ。俺を雇え」
そう言い放つヴァン。

そんな騒動に、他の人も集まってくる。

「おいおい、どうした？」

「いや、この子どもが、うちで傭兵として働きたいんだとよ」

「それで、何でお前が倒れてる訳？」

「いやあ、それはな……」

「テストをされると言われた。だからふつとばした」

「なんだよ、子どもに倒されたのか」

「ただの子どもじゃねって、マジで痛かったんだからな……」

そんな会話が男達の間で続く中、一人の兵士がヴァンに近寄った。

「……ここはいつ死んでもおかしくない紛争地帯だ。お前に、死ぬ覚悟はあるのか？」

「死ぬ覚悟はない。元々生き残るつもりだからな。俺の中には、この争いだらけの非日常を日常に戻すという覚悟しかない」

「……」

兵士は少し黙った後、

「分かった。お前を傭兵として雇う事を隊長に言おう。ついて来い」

「分かった」

「そついや、お前の名前はなんて言うんだ？」

「……」

賀戸蛮は、あの時、あの傭兵と一緒に死んだ。

今の俺は、あの人の子どもじゃない。一人の傭兵だ。だから。

「……ヴァン・ガルドだ」

「よし。ガルド、こつちだ」

兵士とヴァンは、一緒に隊長のいる宿舎へと歩いていった。

そして、これが、一人の傭兵としての、ヴァン・ガルドとしての始まり。

一人の傭兵との別れと一人の傭兵の誕生（後書き）

さて、書き終わりました。

ヴァンを育てた傭兵とのからみはもう少し書きたかったのですが、引き出しの容量&想像の少なさから、それはあまりうまく書けませんでしたorz

次からどんな風に書こうかと今更考えてますが、「まあ、なんとかなるだろさ」との樂觀気味。

…… もうちょつと何とかしろし自分。

とまあ長い話は無しにして。

これまで読んでくださった読者方、これからも読んでくださる読者方、これからもよろしくお願いします。

意見や感想、評価等、あればお願いします。

傭兵としての日々

部隊に傭兵として雇われ。

それから、ヴァンの傭兵生活が始まった。

そんな日々のうちの一つ。

「……今日はどこを攻めるんだ？」

「敵拠点の一つらしい。ヴァン、お前も出るんだろ？」

「ああ」

短く返事を返し、ヴァンは戦場に出る。

戦場に出たヴァンは、機械のように人を殺す。

男も女も子どもも老人も関係なく、ただ殺す。

そこには、罪の意識も殺人の快楽も無かった。

あつたのは、早く戦争を終わらせ、平和な日常を取り戻す、ただそれだけ。

戦場では、ヴァンは能力を利用し、Aクラスの能力攻撃をも無効化する英雄の光、と名前は本人が付けたが、それを身に纏い、戦った。

そのため、彼の前にはあらゆる能力は無効化され、彼はアンチ能力者として名高い評価を得ていた。

もっとも、付けられた二つ名は戦場の白髪鬼という英雄とはかけ離れたものだったが。

閑話休題。

そして戦いは続き、ある日常での会話。

「ヴァン、お前はどんな目的で戦争に参加してるんだ？」
名も知らない兵士にそう言われ。

「俺は、この戦争を終わらせるために戦争に参加した」

「戦争を終わらせるためにねえ……」

「そう言うあんたはどうなんだ？」

「俺か？お前と同じさ。この戦争を、一日でも早く終わらせるため
にな」

「そうか」

「その点、あの傭兵は異質だな。どっちが勝つてより、争いその
ものを楽しんでやがる」

「あの傭兵？」

「お前、知らないのか？最近うちに所属された傭兵なんだがな。確
か通り名は赤髪の射手だったか」

「っ！？」

「……どうした。顔が青いぞ」

「そいつは、今どこにいる」

「さあな。そこで休憩でもしてるんじゃないか？」

言われ、その場をあとにし、目的の傭兵を探すヴァン。

だが、その時は見つからなかった。

そして、とある日、戦場にて。

ヴァンは両の拳に気を集中させ、

「シン・コウ！」

胸の前で両の拳を叩き合わせる。

するとその光は体全体に広がっていき、両腕には紋章のようなものが浮かび上がった。

そして、ヴァンは戦場へゆっくりと向かって行く。

「俺にそんなものは効かない」

言いながら、自分に放たれた能力による攻撃を蹴散らしていくヴァン。

そしてその歩みを止めず、いつも通りの虐殺をヴァンは行つ。

そして時は経ち。

ヴァンの周囲には、敵兵の亡骸しか存在しなくなった。

「これを毎日続けていれば、いつかは戦争がなくなるのか……？」
英雄の光を解除したヴァンは、その光景を見て、自問するように言った。

だが、それに答える者はいなかった。

「さあな。どうだろうな」

否。

ヴァンに答えを返す者が、後ろにいた。

（生き残りか！？）

ヴァンは急いで振り返ると。

そこには。

過去に自分を育ててくれた傭兵を目の前で殺した、あの赤髪の男がいた。

「……貴様」

「つと、待った待った。攻撃は無しだぜ」

両手を上に上げながら、敵意を見せないガルムに、ヴァンは不信感を持った。

「あの時は敵同士だから殺したまでだ。今は同じ部隊にいるんだか

ら、仲良くしようぜ」

クツクツ。と喉で笑うガルム。

だが。

「あの人を殺したお前を許せると思うなっ！」

そう言いつつ、ヴァンは臨戦態勢をとる。

「まあ、そう言っつなよ。それより、いつかは戦争がなくなるかって言っつてたな」

「……ああ」

「人は何かがあれば人と憎しみあつ。それが人同士なら喧嘩や殺し合いに、町単位なら暴動に、そして国単位ならこんな風に戦争になる」

「人がこの世から消えない限り、戦争つて奴はこの世界から消えないのさ」

「だが、それでも。俺は、戦う。それが俺の覚悟だから」

「そうかよ」

ガルムはそう言うつと背中を向き、歩き始めた。

「お前はお前のやりたいようにしたらいいさ」

「待て。お前は何を望んでこの戦争に参加した？」

「俺か。俺はこの戦争そのものが面白くてな。それで参加した」

「面白いだと……？」

「結果よりも中身。それが俺なんぞな。……俺も今日でこの部隊と契約が切れる。まあ、縁があつたらまだどこかで会えるだろうさ」

じゃあな。

そう言い残し、ガルムは去つていった。

「人と人との憎しみ……それが消えない限り、戦争はなくなるらないのか？」

そう自問するも、やはりヴァンには答える事ができなかった。

だが、それでもヴァンは自分の中の覚悟と共に戦う事を諦めなかった。

「戦争と自分の覚悟ですか……」

生徒相手に聞かせるため、ヴァンは自分の経験を簡略化して、なるべく刺激的にならないよう二人に話した。

それでも二人にとっては十分刺激的な話になったようだが。

「ヴァン先生は、戦争終結までそのままの覚悟で戦争に関わったんですか？」

「ええ。自分で言うのもなんですが、並大抵の事ではありませんでしたけどね」

「……」

フランとサラの二人は、それに沈黙で返した。

「それで、続きはまだなのかしら？」

その場にいないはずの第三の声。

声のした方を見てみると……

「アリエルさん？だけじゃないですね」

そこは、アリエルと、時雨とシエルがいた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止のはずですが？」

「ヴァンの知り合いだって言ったら、校長先生が通してくれました」と、シエル。

「本当にあの人は……ところで、どこから聞いてたんですか？」

「ほぼ最初からですね。盗み聞きしてるようで悪かったのですが、私達もヴァンさんの過去には興味ありましたので」

「それで？続きはまだかしら？」

「……仕方ないですね」

そして、ヴァンはまた語りだした。

傭兵としての日々（後書き）

何とか書き終わりましたが、何だか今回モヤッとした感じになったなと自己嫌悪。

次からもっとうまく書きたいのですが。

さて、次からどんな形で過去に入ろうかと、そんな事を考えてます。意見や感想、評価等、あればお願いします。

傭兵としての日々 とある吸血鬼との出会い

「最近、付近で吸血鬼が出るようになったらしい」

「吸血鬼？」

駐屯所で休んでいたヴァンは、初めてその単語を聞いた。

「何なんだ、吸血鬼というのは」

「お前、知らないのか？」

顔を知る程度の兵士に言われ、ヴァンは頷いた。

「吸血鬼つてのはな、一言で言えば、化け物だな」

「化け物？」

「ああ。身体能力は普通の人間よりも高く、牙が生えている。何より、他人の気を吸うんだ」

「それは危険なのか？」

「そりゃあな。気が少なくなれば人は疲労するし、完全に無くなれば死ぬ事だってある」

そんな会話が、ヴァンにとってのフラグだった。

ある日、ヴァンは隊長に呼び出された。

その内容とは……

「ヴァン、最近近辺に吸血鬼が出没するという噂は知っているな」

「ああ」

「それでうちの部隊にも被害が出るようになったから、教会と合同で吸血鬼を始末する事になったのだが、その混成部隊との連絡が途切れた。様子を見に行つてほしい」

「様子を見に行くだけか？」

「連中が無事ならお前もその部隊に合流し、吸血鬼を始末してほしい。もし怪我人等がいるようであれば、行軍が無理なようなら連れて帰ってきてくれ」

「分かった」

ヴァンは頷き、駐屯地を出た。

しばらく歩いて、ヴァンはその現場に着いた。

鼻には鉄と死臭の匂い。

目の前には教会と軍の混成部隊だった者達の成れの果て。

その中央に、彼女はいた。

死体の喉に牙を立て、血を啜る金髪の女性。

その光景は現実離れしすぎていて、ヴァンには神秘的な物に思えた。

と、女は血を啜るのを止め、立ち上がり、ヴァンの方を向く。
改めて見ると、綺麗な女だった。

白のハイネックと紫のロングスカート。

金髪の髪は整えられ、顔立ちもよく、美人の部類に入る女性だった。

彼女はヴァンを見ると、

「あなたも私を殺しに来たのかしら？」

口元の血を拭いながら語りかけてきた。

「俺が隊長から受けた依頼は二つ。部隊が無事なら合流して吸血鬼を始末しろ。行軍が不可能な程度の怪我人がいるのなら連れて帰れ」

「だが、見たところ部隊は全滅しているようだ。これでは再度隊長に指示を仰ぐ必要があるな」

「……私を殺しに来たんじゃないの？」

「その指令は受けていない。もっとも、これ以上被害が広がるようなら対処する必要があるだろうがな」

「ふん……」

彼女はヴァンを品定めするような目で見ると、

「もう気は十分に取り込んだからこれ以上はいらないけど、彼ら弱すぎて運動にもならないのよね。あなた、付き合ってくれないかし

ら」

「どういう意味だ？」

ヴァンは言いつつも、いつでもそれを発動できるようにしておいた両の拳を構える。

「こつこつ事よっ！」

言つと同時に、彼女はヴァン目掛けて走つて来る。

両手の十本の爪から気を伸ばし、それは鋭利な刃物と化す。

「やはりそうくるか！」

ヴァンは両の拳を胸の前で叩き合わせ、

「シン・コウ！」

両腕に紋章が浮かび上がり、ヴァンの体が白く光る。

「何、それ！？」

言いながらも、片腕を振るい、爪を振り下ろす。

だが。

その爪はヴァンの腕によって防がれる。

そして爪を手に取り、そのまま投げ飛ばした。

「きゃあっ！？」

悲鳴を上げつつも、彼女は空中で体制を立て直し、地面に着地した。

「……何なの今は。私の爪が防がれた？」

「俺の能力だと言っておく」

「そう……じゃあ、遠慮はいらないわねっ！！」

言つなり、彼女は再度接近し、再び爪による連続攻撃をヴァンにしかける。

だが。

「無駄だ」

その言葉通り、彼女の爪は、いくらヴァンの体を引き裂こうとしても白い光の前に防がれる。

そうして何度も何度も爪による攻撃をしかけた後……

「ハア……ハア……ハア……まったく。私の爪を防ぐなんて、反則じゃないの？あの兵士達は一薙ぎで全員殺せたのに」

息を切らしながら言う彼女に、

「そういう能力だから仕方がないだろう。それよりも、気は済んだか？」

「え？」

「お前の爪による攻撃。俺を殺そうとする殺気は籠っていたが、俺そのものを殺したいという殺意はお前からはまったく感じられなかった。そして今ではその殺気すらない。どういっつもりだ？」

「どういっつもりと言われても……あなたは、食事をした事は？」

「あるが？」

「何かを食べる時、いちいち食材に懺悔の思いをかける？」

「かけないな」

「それと同じよ。私達吸血鬼は普通の人間と同じ食事をしなくても済むけど、その代わり自然界にある気を体に取り込む必要があるのよ。それで、生き物からそれを摂取するのが効率がよくて、一番いいのが人間だという、ただそれだけの事よ。今のは軽い食後の運動って所かしら」

「……言い分は分かった。だが、それイコールお前を野放しにするという訳にはいかないな。部隊に被害があつては迷惑なんだ」

「じゃあ、一つ提案があるのだけれど、いいかしら」

「なんだ」

「あなたの気、吸わせてもらっていいかしら」

「……何故だ？答えと結果によつてはお前を殺す必要があるが」

「簡単よ。戦ってるうちに気がついたのだけれど、あなたの気、何だか特殊で美味そうなのよ。少しだけ吸わせてもらっていいかしら」

「……俺は餌か」

「一度だけでいいから、お願い、この通り」

敵だったはずの女。

その女に手を合わされ、頭を下げられ、ヴァンは困惑していた。
だが。

その行為で部隊の被害が無くなるのなラと思ひ、

「まあ、好きにしろ。ただし、少しでも敵意を見せるようなら……」

「そんな事しないわよ。それじゃ、お言葉に甘えようかしら」

そう言つて彼女はヴァンに近づき、ヴァンの腕を取り、その腕に
牙を立てた。

「……っ」

痛い、と思つたのは一瞬で、麻痺作用でもあるのか、いくら牙と
肌の間から血が流れようと、痛みを感じる事はなかつた。

そして数十秒経つた後。

「ふうああ……」

腕から口を離れた彼女は、恍惚の笑みを浮かべていた。

「思つた通りだわ。あなたの氣、結構美味かも」

「そうか。なら、これから好きな時にいつでも吸わせてやる。条件
を飲めばな」

「あら？何かしら」

「今後一切、俺以外の人間には手を出すな」

「……あら、そんな事でいいのね。分かつたわ」

「自分から言つておいてなんだが、いいのか？お前にとっては食事
だろう？」

「最初に言わなかつたかしら？氣はこの自然全てに存在するのよ？

そこから氣を抽出するくらい問題ないわよ。それに」

「それに？」

「これだけ美味しい氣を味わつた後に不味い氣を摂取する方が私に
とつては嫌よ」

「そうか」

命令にはなかつたが、これで部隊に被害がいく事もないだろう。

そう考え、ヴァンはその場を離れようとする。

「待つてくれない？まだお互いの自己紹介もまだじゃない」

「そう言えばそうだったな。俺はヴァン・ガルド。傭兵だ」

「私はアリエル・ブリュン。アリエルでいいわ」

「じゃあ、機会があれば、またどこかで会える事を祈るわ。私には祈る神がいらないのが残念だけど。じゃあね、ヴァン」

「そっぴい残すと、アリエルはその場を去っていった。」

「……部隊と教会の連中には気の毒だが、結果は良しか。とりあえず報告に戻ろうか」

「そう言うとな、ヴァンも駐屯地に帰っていった。」

「これが、自由奔放なアリエルと、傭兵のヴァンの出会った最初の話。」

「そうそう、そんな感じだったわね。懐かしいわ」

「この吸血鬼は、そんなうらやま……いえ、汚らしい事をヴァンさんに……」

「過去を懐かしむアリエルと、そんな彼女を敵意丸出しの目で睨み付けるシエル。」

「まあまあ、落ち着いてください二人とも」

「それで、アリエル殿はそれ以降、人を襲ってはいないのか？」

「ええ」

「信じられないな。吸血鬼というものは、人を襲うというのが定番だというのに……」

「同じく」

「私もです……」

「本当でしょうね……」

「四者四様の対応を見せる四人に、」

「まあ、時々ボクの気を吸わせていましたからね。もし他の人間を襲っていたと聞いていたなら、その時点でボクはアリエルさんを殺していましたよ」

「……本気で何気なく言うのが怖いわね、ヴァン」

「それで、他にはどんな話があるんですか？ヴァン先生」
「そうですねえ……」

「言われ、ヴァンはまた過去の出来事を思い出していた……」。

傭兵としての日々 とある吸血鬼との出会い（後書き）

大体の中身は決まっていたのですが、書く時間がorz

それでも短時間で書けるという事は、中身が薄いのかなと。

精進せねば。

さて、次は「誰書こうかな」な気分ですが、正直だんだん頭の中の引き出しが無くなってきた。

本当に続くのか？

感想や意見、評価等いただければ幸いです。

傭兵としての日々 修道女との邂逅

とある日。

ヴァンは一人で敵軍の拠点を攻めるといふ任務を請け負っていた。味方はヴァン一人。

敵は数十人。

数だけ見れば、どれだけ無茶で無謀な任務か、と思われるが、実際はそうではなかった。

実弾武器、鉄砲や戦車、大砲等も昔は使われていたが、所詮昔の話である。

現在はAランクの気による攻撃を扱う人間も増えたため、暴発の可能性があったり持ち運びに不便な重火器を使用するより、それらを買う金で能力者数名を雇う方が遙かに効率がいいのだ。

そして目的の拠点も例外ではなく、重火器系統はほとんどなく、戦力はほぼ能力者だけであった。

故に、アンチ能力者であるヴァンが制圧の任務を受ける事になったのだが。

そしてヴァンが拠点着くと、戦闘、いや一方的な蹂躪が始まった。あらゆる攻撃はヴァンには通じず、虐殺が行われていく。

そして、数刻経った後、ヴァンは任務の完了を報告していた。

「さて、帰るか」

そう言い、ヴァンは帰路につく。

その途中、ヴァンは個人と個人の戦闘に出くわした。
片方は女性。

青い髪に、修道女の服を着たシスターらしき人物。
両方の指の間に計八本の白い刃の剣を挟み、それを使い、時々蹴
撃等の白打も加えて相手と斬りあう。

だが、相手と共に互角のようで、なかなか勝負がつかないようだ。
そして一方の相手は……

「あいつか」

（どういう理由かは知らないが、知り合いが巻き込まれているなら
少し行ってみるか）

ヴァンは戦っている二人の元に近寄っていった。

「この吸血鬼がつ！いい加減諦めなさい！」

「フツ、そう簡単にはいかないわよ！」

言いながらも、互いに一步も引かず、互角の戦闘能力を見せる。

そして一旦距離を取った後、

「せやあつ！」

「らあつ！」

掛け声と共に片方は爪で、片方は剣を振り上げ、相手に斬りかか
ろうとする。

そんな時、

「ちよつと待て！」

その間に割り込み、すでに発動させていた白い光を纏った腕で、
爪と剣を遮るヴァン。

「ヴァン！？」

「誰ですかあなたは？」

急に割り込んできた乱入者に、驚く二人。

「アリエル、久々だな。こんな形での再会になるとか思わなかった
が」

「私もよ。久々に会えて嬉しいわ」

「……あなた、一体誰ですか？」

三者三様の態度にて言葉を交わす三人。

そして、

「アリエル、ここは俺に任せて、さっさとどこかへ行け」

「えー。ここから面白くなってきたのに」

「軽口は止せ。俺の見たところ、二人は互角だ。このままでは消耗戦になって、共倒れだぞ」

「……仕方ないわねえ」

「ちよつと、待ちなさい！」

「おつと、お前にはまだ動かないでもらおうか」

言いながら、四本の剣を片手で鷲掴みにするヴァン。

「なっ！？この剣は聖なる属性で精製された剣、邪なる者には触れるだけで傷がつくはずなのにつ！？」

「今だ、アリエル」

「分かったわよ。また今度、機会があれば会いましょう」

そう言つて、その場を離れるアリエル。

「……一体、どういう事ですか？」

剣を捕まれながらも、敵意を隠そうともしない女はヴァンに問いただす。

「あの女は吸血鬼ですよ？……それにこの剣には邪なる者には触れるだけで傷がつく、それ以前に剣を普通に握っている事自体が信じられないのですが。あなたは何者ですか？」

「アリエル……あの女が吸血鬼だという事は俺も知っている。事情により知り合いになつてな、敵でもないが味方でもない、そんなところだ」

「ちなみに、俺は真正銘普通の人間だ。剣を掴めたのは、俺の能力に関係しているとだけ言っておこう」

「それで……あなたは私の敵ですか？」

「どうだろうな。あいつとは今言つたとおりの関係だが、あんたと

は初対面だ。故になんとも言えない」

「……私はシエル・バーナント。教会の人間です。負の気に染まった存在を抹消するのが私の役目です。今のも教会側の私にとっては、負の気に染まった存在をこの世から浄化するという、ただ当たり前な事をしていただけのことです」

「そうか」

「それで、再度聞きます。あなたは私の敵ですか？」

「俺からはなんとも言えんな。別に教会と敵対している訳でもないし、あんたともそうだ。故に敵になる理由がない」

「吸血鬼の味方をしているというだけでも立派な敵対理由ですが？」

「ああ、あいつとは互いに危害を加えないという意味で特別だな。」

他の奴なら黙って見過ごしていたさ」

「……」

シエルはしばらくヴァンを見据えるが、ふつとため息をつくと気を緩めた。

その瞬間、ヴァンの握っていた白い剣が消え、指の間に挟んだ柄だけが残った。

「吸血鬼と知り合いという件は見過ごせませんが、見たところあなたは普通の人間ですね。なら警戒する理由はあるにしろ、敵対する理由はありませんね」

「それはなによりだ」

シエルは指の間に挟んだ八つの柄を懐にしまう。

「じゃあ、俺も用が済んだ事だし戻らせてもらっ」

そう言い、拠点に戻ろうとすると、

「ちよつと待ってください」

「なんだ？まだ何か用か？」

「あなた、教会に入りませんか？」

「……どういう理由でだ」

「あなたは聖属性の能力は使えますか？」

「自分で言うのもなんだが、ほぼ万能型に近いからな。練習すれば

使えない事もないだろう」

「なら、私と一緒に活動しませんか？強そうですし、あの白い能力にも興味があります。何より、私達と一緒に行動したら、吸血鬼に知り合いがいるなんて蛮行、すぐに間違いだと気づくでしょう！」

「勧誘はありがたいがな。俺は傭兵で、すでに軍に雇われている」

「それは残念ですね……」

シエルは残念そうな顔を浮かべ、しかしその後すぐに笑顔を浮かべ、

「では、傭兵として雇われた期限が過ぎたら、教会を訪ねてみてください！何、私の名前を出せば通してくれますよ」

「ああ、未来の可能性の候補として入れておこう。……そう言えば、まだ名前を言ってなかったな。俺の名はヴァン・ガルドだ」

「では、ヴァンさん。またいつか、機会があれば」

「じゃあな」

これが、シエルとの初めての邂逅だった。

「そんな事があつたんですか……」

フランとサラは目を丸くし、

「なるほど、そうして二人は出会ったのだな」

時雨はウンウンと頷き。

「言っておきますけど、今のヴァンさんは教職員になっているとはいえフリーなんですからね。機会があれば教会にいつでも来てくださいよ」

「どう返せばいいんでしょうかね」

ヴァンはシエルの誘いに苦笑いで返す。

「ところで」

フランが時雨の顔を見て話し出す。

「アリエルさん、シエルさんとくれば、流れでは次は時雨さんとの話ですよ。一体どんな話なんですか？」

「そうですね……あれは、珍しく大規模な戦闘で、特殊な形での三人との出会いでしたね」

そう言い、ヴァンは空を見上げ、話し出した。

傭兵としての日々 修道女との邂逅（後書き）

ども。書き終わりました。

誤字あったので、書き直しました。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

それは、とある拠点を攻める時の事だった。

この時はヴァンの他にも軍からの兵や傭兵が入り乱れ、敵拠点は乱戦になった。

能力による攻撃が入り乱れ、あちこちから重火器の放たれる音が聞こえる。

そんな中、

「今の俺に得意技、必殺技はない」

そう言っただる動作をすると、その拳から大砲のような威力の気の塊が放たれ、その先の敵の群れが吹っ飛ぶ。

「なぜなら今の俺にとって、すべての白打が技になるからな。例えば」

今度は空高く飛び、両手を頭の上で組む。

「鉄槌！」

言っと同時に両手を振り下ろすと、両手から気の塊が地面に落とされ、その場にいた兵士が息途絶える。

そして着地すると、ヴァンに敵数人が殺到する。

だが、ヴァンは横に蹴る動作をし、

「鞭っ！」

その足から気が鞭状になるように放出され、敵がそれに当たり、吹っ飛ばされる。

「今だあっ！」

声と共に、敵がヴァンに向けて火の弾を放つ。

だが、

「効かん」

言いつつもヴァンは片腕で火の弾を弾き、

「大砲！」

言いながら空を殴る動作をすると、拳から気の塊が放出され、火の弾を放った敵にあたり、敵は息途絶えた。

「こんな事を続けていれば、いつかはこの戦争も終わるんだろうか

……」

そんな思いを考えると、

「おらあっ！」

背後から掛け声と殺気と共に、剣が振り下ろされる。

ヴァンは面倒臭そうに、それを避けようとする。

だが。

ガキンッ！

金属と金属のぶつかる音がし、その剣撃は防がれた。

「はあっ！」

ヴァンへの攻撃を防いだ主は、そのままヴァンを攻撃しようとした敵を切り殺す。

「大丈夫か？」

ヴァンが声のした方を向くと、そこには女性が立っていた。

紫の髪。

後ろは伸ばしており、紐でくくって束ねている。

極東風の服を着ていて、腰には今防ぐのに使った刀の鞘をつけている。

「ああ。問題ない。別に避けられもしたんだが、一応礼は言っておく」

「いや、お主がそうであるならそれでいい。それよりも……」

女は周囲を見渡し、

「流石にこれだけの規模の基地となると、敵味方両方に結構な被害が出そうだな」

「ああ」

「そういえば、まだ名を告げていなかったな。私の名は真田時雨。時雨で構わぬ」

「俺はヴァン・ガルドだ。俺もヴァンで構わない」

「おっと、悠長に自己紹介をしている暇はなかったな。敵はまだ大勢いる。気を引き締めねば」

「そうだな。お互い、生き残ったらまた話でもするか」
「喜んで」

時雨は笑顔で返し、その場を去っていった。

ヴァンもその場を離れ、敵拠点の内部に入っていた。

敵兵士も大勢いた。

中には能力だけでなく、重火器を使う敵もいたが、

(銃口の向きを見れば、銃弾など避けられない事はない)

その思い通り、ヴァンは敵兵の放つ弾を避け、次々と敵を屠っていった。

そして通路を進み、多くの敵兵を屠り続け。

「な、なんだ貴様は！」

「あんたがこの基地の司令官か」

言いながら、片手に白い光を集め始めるヴァン。

「ふん、殺そうというのか？このワシを。だが、そうかいくな！」

言うとも男は背後にあった扉を開け、その奥に逃げていった。

「逃がすかっ！」

ヴァンをそれを追いかけようと扉を潜る。

「ハア……ハア……ハア……」

司令官は、目の前に現れた男から逃げたが、もはやこの基地が陥

落寸前だと半分悟っていた。

だが、わざわざ負けるくらいなら。

「どうせ負けは決まっている。アレを放ち、基地そのものを破壊してやる」

そう言いながら、彼はある部屋へと向かっていった。

「さて、行き止まりのようだが？」

扉の奥、通路を少し走った先の部屋の中央にいた司令官を見て、ヴァンは問う。

「ふん、確かにここでの戦争はワシの負けのようだがな……貴様達も道連れだ！」

その言葉と同時に、部屋の片隅にあった牢屋のような場所が開かれ、一体の何かが出てきた。

「これは……」

それは、今まで見たことの無い、何かだった。

体長は普通の人間の数倍。

身体中が黒い体毛で覆われ、その風貌はゴリラと人間を合わせたようなものだった。

「ふん。人間の気を負の方向に変化させ続けて生成した、まさしく怪物だ。お前も殺されてしまえ。行け！」

司令官は怪物に指示を下す。

だが、

「グウウウウウ……」

怪物は、唸るばかりで動こうともしない。

「何をやっている！早くあの男を殺さぬか！」

司令官は怪物に怒鳴りつけた。

その声に、やっと怪物は反応し、司令官の方を向いた。

「そつだ！早くあの男を殺せ！」

喚く司令官だったが、怪物は何故か司令官の方へを歩いていく。

そして司令官の目の前まで歩くと、片腕を振り上げる。

「お、おい。どうした。ワシはあの男を殺せと言ったのだ。ワシではなくあの男を……」

最後まで言う前に、司令官は怪物の振り下ろした腕の下で。潰され、血まみれになった。

「……どうなっているんだ？これは」

ヴァンも困惑を隠せず、動揺する。

怪物はその後も目につく物を手当たり次第に腕で拳で足で体全身のあらゆる部分を振り回して破壊していく。

「ひょっとして、自我がないのか？」

ヴァンは、吸血鬼の話がされた時、精神の崩壊と暴走の話を聞いていた。

負の気を長時間体に蓄積していると、精神が崩壊し、自我がなくなり、暴走する事があると。

「なら、これは敵だ味方だとか、そんな事じゃ済まなくなるな」

ヴァンは、目の前の怪物に対処する事にした。

傭兵としての日々 敵拠点での戦い（前編） 極東の侍との共闘（後書き）

書いてるうちに長くなりそうなので、とりあえず前編と書きました。
これで三人目が登場した訳ですが、この後どうなる事やら（あまり
考えてませんという意味で）……。

この後の構想は練ってはいるんですが、中身は空白のまま、どう書
こうかと考え中です。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

傭兵としての日々 敵拠点での戦い（後編）

まず、最初に仕掛けたのはヴァンだった。

「大砲！」

言いながら、殴る動作をし、怪物に向けて気の塊を放つ。

ドッ！

怪物にそれは当たったが、

「グウウウウウ……」

怪物は少しよろけただけで、それ以上の衝撃はなかったようだった。

そしてその攻撃により、怪物の攻撃対象にヴァンが移った。

「グアアアアアッ！」

唸りながら、ヴァンに迫る怪物。

「おっとっ！」

繰り出されたパンチを避けるヴァン。

同時に、片足を思いきり振り上げ、

「落ちろっ……斧！」

その腕にかかと落としを決める。

「グルアアアアッ！」

それは効いたのか、攻撃された片腕を押さえる怪物。

だが。

再び怪物はパンチをヴァンに繰り出し、

「ふんっ」

それを再度避けるヴァン。

だが、その避けた軌道の先にもう片方の腕から繰り出されたパンチが存在していた。

「チッ」

ヴァンには避ける暇がなく、それを受けながら後方に飛び、衝撃を受け流そうとする。

その時。

「ヴァン殿っ！」

声と共に、怪物の片腕に一閃が走る。

「グアアアアアッ!？」

怪物の腕に一筋の傷がつき、怪物は一旦後方に下がる。

「ヴァン殿、ご無事か!？」

そう言い、ヴァンの前に立ったのは、先ほど分かれた時雨だった。時雨か。とりあえず助かったと言っておこう」

「それは何より。だが、何なのだこいつは」

「この基地で生成された化け物だ。もう自我がないらしく、放っておけば敵味方共に被害が出る可能性がある。よってここで潰す」

「なら、私も助太刀いたす！」

そう言い、刀を構える時雨。

「急いで来たようですが、先に来られていたようですね、ヴァンさん」

その場にいないはずの第三者の声。

その声のした方を振り向くと、そこにいたのは、

「シエル!？」

「教会所属、シエル・バーナントの名において命ずる。穢れた負の異形よ、朽ちなさい」

そう言い放ち、両手に持った八本の柄から、白い剣を出現させる。

「シエル、何故ここに？」

「ここで負の気を利用した実験が行われているという情報を教会側で手に入れ、私が派遣されたという訳です」

「しかし……。ヴァンさん、こんなところで出会うとは、奇遇というか何というか。……ところで、隣の方は？」

「私は真田時雨。傭兵だ。今はヴァン殿に背中を預ける立場です」

「成る程、味方ですか。まあ、三人もいればこの怪物も何とかなる

でしょう」

「四人よ」

更に声がし、その声の主が出てくる。

「久しぶりね。……一番会いたかった人と、一番会いたくなかった人と、初めて見る人と、色々いるみたいだけど」

「アリエルもか」

「ヴァンの顔が見たくてね。ここにいて聞いてたから来たんだけど、とんでもない存在がいたようね」

言々とアリエルは怪物を一瞥し、

「こんなできそこない、誇りある吸血鬼である私にとっても汚らしい存在だわ。私もアレを抹消するのを手伝うわよ、ヴァン」

「今日は知人によく会った……まあ、助かる」

こうして、四人は怪物に向かっていった。

最初に動いたのはシエルだった。

「ハアッ！」

八本ある剣を全て怪物に投擲する。

その剣は白い閃光を残しながら怪物に迫り、

「グアアアアッ！」

その全てが怪物に突き刺さる。

続いて時雨も、

「真田流、雷光閃！」

時雨の放った雷属性の閃光が刀より発され、怪物に直撃する。

怪物は苦し紛れに両腕を振り回すが、

「そんなの、当たらないわよっ！」

言いながら振り回される両腕を避け、接近し逆に爪でその腕を切り裂くアリエル。

怪物はよろけ、体勢が崩れる。

更に、その隙に怪物の懷にヴァンが走りこみ、

「烈華崩拳！」

気を溜めた拳による攻撃を、怪物に決める。

それをまともにくらい、怪物は吹っ飛び、壁にぶち当たった。

「グウウウウウ……」

怪物はまだ動こうとしているが、随分弱っているようだった。

「さて、そろそろか」

言いながらヴァンが近寄る。

そして左腕に風属性の気を纏わせ、怪物に更なる攻撃を加えようとした、その時。

「グルアアアアアッ！」

怪物が大声で喚き、その全体が黒い気で覆われていく。

そして、

「ガアアアアッ！」

怪物の大声と共に、衝撃がその部屋中に広がった。

全方向への気による、怪物の攻撃。

それを受けた部屋中は破壊しつくされ、廃墟と化した。

そしてヴァンは……

「ヴァンさん、大丈夫ですか!？」

「ヴァン!？」

「ヴァン殿っ！」

ヴァンを心配する三人だったが、

「心配無用だ」

そこには、言いながら怪物の胸に腕を刺したヴァンの姿があった。怪物はしばし痙攣していたが、胸から腕を抜き取ってしばらくすると動かなくなった。

「三人は俺の後方にいたからか、今を受けなかったようだな。よかった」

普段と変わらない調子で喋るヴァン。

「……ヴァン殿、今の攻撃を耐えたと……?」

「通常兵器なら問題だったがな」

そう言いながら、血まみれになった腕から血を飛ばし、拭うヴァン。

「気による攻撃は、今の俺には一切通用しない。だから心配無用だ」
そしてヴァンは三人に笑顔で。

「用は済んだ。この基地ももはや俺達の勝ちだろう、時雨。帰るぞ」

「にしても、教会所属であるシエル殿と吸血鬼のアリエル殿が組むとは、心外というか予想外というか……」

「私も心情的には屈辱ですが、それ以上にあのような怪物を野放しにはできませんので。今回はしぶしぶ、です」

「それはこっちのセリフよ。ああ、そうだ。ヴァン、また後でお願いね」

「またか。まあ、別に構わんが」

「何の事ですか？ヴァンさん」

「私達だけの秘密よ？フッフ……」

そんな会話をしながら、基地に帰る四人。

それぞれ立場も人種も違う四人。

だが、縁があれば、こうして寄り添う事もある。

他にも敵になったり味方になったりするエピソードがあったりするのかもしれないが、それはまた別の話。

「そんな事があつたんですか……」
しみじみと話すフラン。

「まあ、あの頃は色々ありましたからね。運よくお互いに生き延びる事ができましたから、今のボク達があるんですが」

「それより、ヴァンさん。この学校に関する事ですけどね」

「何ですか？シエルさん」

「……やっぱり黙ってましよう。その方が後で驚くでしょうし」
言いながら、クスクスと笑うシエル。

「そう言えば、まだ私もこの学校に関して提案があったのだ」

「あら、私もよ？」

「二人もですか。一体何なんですか？」

「秘密です」

「秘密よ」

「秘密だ」

三人、同じ言葉を返す。

「一体何なんですか、まったく……」

「それでは、私は手続きがあるので。また後ほど」

「私もこれにて。ではまた」

「じゃあね、ヴァン」

そう言い残して、三人はその場を去っていった。

「やれやれ、まるで嵐か何かのようでしたね」

そうヴァンが言った後、タイミングを読んだかのように予鈴のチ

ヤムが鳴った。

「おっと。もう昼休みが過ぎてしまいましたか。二人共、もう教室に戻りなさい」

「はい」

「分かりました」

そう言って、二人はその場を後にした。

「まあ、あの三人との出会いはあの戦場では衝撃的なものでしたが……」

ヴァンの語りは、誰に向けられるでもなく。

「ボクにとって一番の衝撃は、あの戦争の終結と、その後だったんですよね……」

ヴァンは、空に顔を向け、あの頃の事を思い出していた、

傭兵としての日々 敵拠点での戦い（後編）（後書き）

終わったあゝ。

物語そのものはまだ終わりではないんですがね。

続き、どうしましょうか。

……まあ、何とかなるでしょう。

お約束みたいに四人が集結する場面になっちまりましたが、そこはそれ、文字通りお約束という事で。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

傭兵としての日々 急転（前編）

ヴァンが傭兵として戦争に参加してから数年。

少年だったヴァンは青年に成長していた。

だが、その能力により、基本、能力者重視の拠点に送られていた事が多かったため、目に見えるような傷がつく事はなかったが。

そして、数年続いた戦争。

どちらにも優勢、劣勢にも傾かず、もはやそれは泥沼と化していた。

そして……それは起こった。

「なんだ？」

兵舎で暇を弄んでいたヴァンは、ふと外が騒がしくなったのに気づいた。

ガヤガヤと、大勢の人が騒ぐ声がする。

「敵でも攻めてきたのか？」

そう独り言を言いながら、声のする元へ向かっていた。

同時に、こんなドロドロとした戦争に自然と慣れている自分に嫌気がさした。

「どうしたんだ？」

ヴァンは、司令室で騒いでいる兵士の一人に声をかけた。

「ん？ああ、ヴァンか」

その兵士はヴァンを一目見ると憂鬱そうになため息をつき、

「どうも、よくない噂が出始めていてな」

「よくない噂？」

「ああ」

兵士は頷くと、壁に貼り付けているトルバ王国とハルバード共和国一帯の地図を見ながら、

「相手、ハルバード共和国だな。ヤツらが核を使うという噂が聞こえてきている」

「カク？」

ヴァンは、初めて聞く単語に首を傾げる。

「何なんだ、そのカクというのは」

「恐ろしい、兵器だよ」

「兵器？武器なのか？」

「ああ」

「武器というからには実弾だと思うが、それはどれ程の威力なんだ？Aクラスよりも強いのか？」

「それで済めば問題はない」

兵士はかぶりを振ると、

「核兵器つてのは、恐ろしい兵器だな。それ一つで町一つ二つを破壊する事ができる」

「町……っ!？」

それを聞いたヴァンは目を見張り、同時に驚いた。
今までもAクラス的能力による攻撃や、町を破壊する武器兵器は多く見てきた。

だが、町そのものを破壊するとなると、それは想像すらできない。

「……そんなものが出てくるのか」

ヴァンもその存在には驚いたが、一つ疑問が出てきた。

「一つ聞くが、何故そんな物を相手は今まで使わなかったんだ？それを多用すれば、戦争なんて楽勝だろう」

「……威力と後遺症が恐ろしすぎたんだ」

「と言つと？」

「核は、一つ間違えば全てを破壊する。文字通り廃墟にできる。人も簡単に大勢殺せる。そんな兵器を多用したら、それはもはや戦争ではなくなる」

「それと、核は使用されると放射線を出す効果があつてな」
「ホウシャセン？」

「ああ。それを浴びると、人体に酷い影響が残る。その残酷さもあつて、過去の大戦で使われた核も、暗黙の協定で使われない事になつていたんだが……」

「それを相手が使うと？」

「あくまで噂だがな」

そう言う兵士も、顔に暗い影を残していた。

司令室から出たヴァンは、核という存在、戦争という存在について考えていた。

過去にガラムから言われた、人と人との抗争、そして戦争。

戦争というのは、どれ程過酷なものか、皆分かつているはずだ。

なのに、何故皆戦争を行うんだ……。

そんな事を考えていると、

「殿……ヴァン殿！」

「？……時雨か」

「どうされた。深く考えていたようだが」

「ああ、少しな」

「今噂になつている核についてか」

「それもそうだが、この戦争、皆はどう思っているのかと、ふとそう思つてな」

「この戦争か」

「時雨はどう考える？」

「私は……利が絡むから、戦争は行われると考えている」
「利？」

「ああ。戦争に勝てば、負けた国から色々な物を得る事ができる。領地であつたり、金銭であつたり、権利であつたりとな」

「それで人は人と争うと？」

「私はそう思っている」

「だが、それでは核という武器を使う理由にはならん。核を使えば、全てが無に帰すんだろう？」

「……噂に過ぎんとはいえ、それを使うという事は、この泥沼と化している戦争を早く終らせたいと思っている者がいるのだろうな」

「相手の国を潰してでもか？人を多く殺してでもか？町を廃墟にしてでもか？」

「……」

時雨は、困ったように俯く。

「すまん、お前に聞くような内容ではなかったな」

「いや、ヴァン殿も多くの事を考えているという事がよく分かった。私もそれなりに考えてはいるが……何の理由があって核を使うか、か」

「……」

しばらく二人は無言で自らの思考にふける。

そんな時、

「皆、司令室に集まってくれ。今度攻める拠点が決まった」

そんな兵士の声が聞こえた。

「どうやら、またどこかを攻めるようだな」

「ああ」

二人は同時に頷くと、

「お互い、最後まで生き残れる事を祈るか」

「ですな。では、ヴァン殿」

ヴァンは、時雨と別れの挨拶を済ませ、互いの目的に向かって歩き出した。

ヴァンはこの戦争を止めるために。

だが、このまま戦争が続けていれば戦争は終わるのか。

その疑問を抱きつつ、ヴァンは戦い続ける事しかできなかった。自分の信念の元に。

そんな思いを再度決めた後の事だった。

自分の所属するトルバ王国も、核を使うかもしれないという噂が
出始めたのは。

「一体、どうなるんだ、この戦争は……」

両国による核の撃ち合い。

それは、両国の滅亡に他ならない。

それなのに。

「どうして、皆争いをやめようとしなんだ……」

ヴァンは、目に見えない戦争に、苦悩し始めていた。

傭兵としての日々 急転（前編）（後書き）

お疲れ様です（と自分に言いたいです）。

戦争物に関しては、自分は経験がないのであくまで想像で書くしかないのですが、登場人物各々が抱く心象に関してはうまく書けませんでしたが。

何だか話が暗くなってきましたが、これも戦争物の一つとして考えてますが、書いていく度に「うああああ」となる自分がorz
意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

傭兵としての日々 急転（後編）

両国共に噂が立ち、小競り合いのような紛争が続く日々の中。
ヴァン達傭兵や兵士達は、いつものように戦いの中に身を投じていた。

そんな時。

「皆、集まって欲しい」

そんな声が聞こえ、その場にいた兵士や傭兵、ヴァンもその声の主の近くに行く。

そこには、軍人の服を着た、初老の男性が立っていた。

「皆、忙しい中すまないな。私はシルバ・グランという。トルバ王国の中で、参謀の職についている」

「その参謀が、一体この兵舎に何の用なんだ？」

ヴァンの問いかけに、シルバは頷くと、

「実は、この戦争の事に関してでな……」

シルバはそこで一息置くと、

「皆も噂で聞いていると思うが、両国で核が使用されるかもしれないと」

その言葉に、集まった皆がざわつく。

「その噂だが……真実だ。実際、タカ派の者達はそれを使って戦争を早く終らせようとした」

「だが、それを両国で使おうとなると話は別だ。互いに多くの犠牲を出すのは必死だ」

「そして皮肉にも、その結果、この戦争は終結に向かっている。核を使って共倒れになるくらいなら、停戦にしよう、という方向でな」
その言葉に、再び再び皆がざわつく。

「停戦の日はいずれ提示されると思う。皆、それまで体を休めてく

れ。今までご苦労だった」

そう言つと、シルバは兵舎の中に入つていった。

「この戦争が終わる……？じゃあ……俺のした事は……今までしてきた事は……価値があつたのか？俺達のやってきた事は、正しかったのか？」

それだけを確かめたい。

その思いも持つて、ヴァンはシルバの後を追つていった。

「シルバ・グラン！」

「……なんじゃ、お主は」

「俺は雇われた傭兵で、ヴァン・ガルドという」

「お前が……。それで、そのヴァン・ガルドが一体何の用じゃ？」

「さっきの話じゃ、その核とやらが動いた結果で戦争が停戦まで持ち込まれたという。じゃあ、俺達のやってきた事は正しかったのか？無駄じゃなかったのか？」

「お主達のやってきた事、か」

シルバは深くため息をつくと、

「正直、前線で戦つてきたお主達には感謝しとる。じゃが、酷な話になるようじゃが、今回の停戦とお主達の働きには、あまり関係がない」

「そんな……」

ヴァンは、そんなシルバの言葉に絶望する。

そのヴァンの表情を見て、

「そんな顔をするな。まったくの無駄という訳ではない。お主達のおかげで、我らの国は負ける事がなかったのじゃからな。白髪鬼のお主は特にな」

「白髪鬼？」

「その白い髪と青い目、こっちでも噂になつたわ。戦場の白髪鬼が出れば、勝てない戦はない、とな」

「そんな噂が……」

「じゃが、正直ワシらの動きが遅かったせいで、ここまで戦争を長引かせてしまった。それは謝罪せねばなるまい」

「だが、この戦争は終わるんだな？」

「一応、停戦という形だな」

「じゃあ、この国から戦はもうなくなるんだな？もう争う日々は無くなるんだな？」

「ああ」

「それだけが聞けて、もう十分だ。感謝する」

「そう言つて、ヴァンはその場を後にする。」

「そうそう、ヴァンよ」

そんなヴァンの背中に、シルバは言葉を投げかける。

「もし困った事があれば、遠慮なく言うがいい。できる範囲でなら力になってやるわい」

「ああ、分かった」

背中ごしにだが、ヴァンはそう言い返した。

停戦の知らせを受け、各兵士や傭兵達は拠点を後にする準備をしていた。

ヴァンも荷物を整えていると、

「ヴァン殿」

「時雨か」

「今までお互い、ご苦労だったな」

「時雨は……今回の停戦、どう思う？」

「……どんな形であれ、戦が終わったのはいい事だと、私は思う」
「そうか」

「ヴァン殿は、納得してないのか？」

「いや、戦争が終わった事自体は嬉しく思う」

「なら……何故そのような顔をしている？今のヴァン殿は、煮え切

らない顔をしているが」

「時雨。今回の俺達の戦いは、無駄じゃなかったよな？」

「それは私には分からぬ。ただ、どちらも死人が出て、大勢の被害が出たうえでの結果だからな」

「そうか……」

「ヴァン殿は、これからどうするつもりだ？」

「俺か？俺は……正直分からん。今まで戦争を終わらせる事だけを考えていたからな。そういう時雨はどうするつもりだ？」

「私か。故郷に帰るか、私の技量を役立てるところに就くか……」
そう言って一息置いて、

「もしよければ、ヴァン殿と一緒に行動してもいいんだ」

「俺と？」

「それくらいならしてもいいと、ヴァン殿に好意を抱いている。それだけの事だ」

そう言う時雨の顔には、僅かにだが朱がはしっていた。

「そうか」

ヴァンは一息いれると、

「俺は、しばらく一人旅をしたいと思っている」

「そうですか。それは残念だ。まあ、心が変わったらいつでも言うてくだされ」

「ああ、分かった。それじゃあ、時雨。また機会があれば、いつか会おう」

「分かりました」

そう言って二人は別れた。

「俺のしてきた事は、この戦争に意味はあったのか、各地を見て回るのも悪くはないな」

そう独り言を言つと、ヴァンは兵舎をあとにした。

その行動になんの意味があるのか、ヴァン自身にも分からなかつ

た。

ただ、そうしたかったから。

自分のしてきた事に意味があつたのか。

ただ、それだけを知りたかつたから。

ヴァンは旅に出た。

傭兵としての日々 急転（後編）（後書き）

自分で言うのもなんですが、ご苦勞様でした。

今回は前半にこういう流れを、後半一部に時雨との会話を混ぜてみたんで、次は他のヒロイン役との話を入れるのも悪くないかな〜とフラグあっても今回みたいにバキバキにへし折っちまいそうな主人公ですが（笑）

そろそろこの過去編も終わりに近い、と思えるのですが、一体どこまで続くんだろ。

書いてる自分にもどこまで続かせるのか、あまり分かりませんが。意見や感想、評価等いただければ幸いです。

傭兵としての日々 停戦後

停戦になってから数日。

ヴァンは各地を渡り、旅を続けていた。

だが、どの町に着いても、そこでは戦争の跡が見られていた。

復興作業が続いている町、荒れたままの町、廃墟となった人の住んでいない、町だった場所。

しかし、どの町に着いても、パン一枚ですら取り合いになる日常が繰り返られていた。

そんな光景をヴァンは落胆に染まりつつある目で見ながら、

「この戦争に勝てば、この戦争が終われば、俺の周りは平和になる、俺の周りは日常に戻ると信じて戦った」

「けど、いつも通りだ。人はまだ争い、戦い続ける」

「俺は、一体、何のために、人を殺し、戦ってきたんだ？今までやってきた事は、一体なんだったんだ？」

そう呟く事もある程、ヴァンは絶望に染まりつつあった。

そんな中、とある町に着いて。

「この町は、他の町より賑わっているな……」

その町は、今まで見た町よりもある程度は豊かになっていた。

無論、ある程度、ではあって、あまり変わらない様子だったが。

それでも、食料を奪い合うような様子は見られず、皆懸命に生きようとする姿がそこにはあった。

「少し、歩いてみるか……」

ヴァンは町の中を散歩していると、

「はい、次の方、来てください」

そんな声が耳に届く。

それも聞きなれた声が。

ヴァンの足は、自然とそちらの方へ向かっていった。

「はい、次の方、来てください」

そう言っつてはパンとスープを避難者に渡し、配給を続けている教会の面々。

そして、順番に並び、それを受け取る人々。

それがしばらく続き、行列を作っていた避難者がいなくなると。

「ふう。今回もご苦労様でした、シスター・パルラ」

「いえ、いつもの事ですから」

額から汗を拭い、答えるパルラと呼ばれるシスター。

彼女達はいつものように町で避難者に食料を配給し、少しでも町に潤いを持たせようと努力していた。

「それにしても、いつまで続くんでしょうね、このような日々が」

「泣き言を言うんじゃないやありませんよ、シスター・パルラ。私達の仕事は奉仕なんですから、こんな事は当たり前なんですよ」

そんな会話をしていた時、

「シエルか？」

一人のマントとフードを被った男が立ち寄った。

着ているものは薄汚れ、顔も埃にまみれていた。

そんな男を見て、

「まさか……ヴァンさんですか？」

反応したのは、パルラと会話をしていたシエルだった。

「随分と……変わられましたね」

「……そうか？」

「とりあえず、顔を拭いて、それでも食べてください」

「……ああ」

言われるままに顔を拭き、パンを頬張るヴァン。

「一体、どうしたんですか？随分と覇気が感じられませんが」

「……俺が今までやってきた事、それに意味はあったのかと思っ
てな」

「よければ話してもらってもいいですか？私達は懺悔を聞くと同時
に、相談を聞く事もできるのですから」

「相談……か」

そう言つて、ヴァンは旅の中で見てきた町の事をシエルに話す。

戦争は終わったのに、今日一日をしのぐ食べ物すら取り合う毎日。
そんな町ばかりを見てきて、ヴァンは自分のしてきた事に価値は
あったのか、と。

「そうですね……」

そんな話を聞いて、シエルはふと考える素振りを見せ、

「自分のしてきた事に価値があるかどうか分からないなら、これ
から価値のある事をしたらいいんじゃないですか？」

「これから、価値のある事？」

それは、ヴァンにとって思いもなかった考えだった。

今まで戦う事しか考えてなかったから。

これからの事なんて、考えてなかったから。

「とにかく何でもいいから、人の役に立てる事をしたらいいじゃ
ないですか。もし今までの事に価値としての疑問があるなら、これか
ら作ればいいじゃないですか？」

「そうか……これからか……」

ヴァンは少し考え、

「ありがとう。参考になったかどうかは分からんが、助かった」

「いえいえ、迷える人々を救うのが私達教会の役目なんですから」

「それだけですか？シスター・シエルさん」

と、途中で割り込んでくるパルラ。

「教会にいる時は、いかにヴァンさんが凄いかって話をあれだけし
ていたのに」

「シスター・パルラ！余計な事は言わないでいいのですっ！」

シエルはコホンと咳をして、

「ヴァンさん、迷った時はいつでも教会に来てくださいね。私達は、いつでもあなたの助けになりますから」

「ああ、分かっ……」

言い終わるより早く、

「ヴァンッ」

後ろから誰かがヴァンに抱き着いてきた。

「久しぶりね。マントとフードを被ってたから、最初は誰か分からなかったわよ」

「その声は……アリエルか？」

そう言っただけで振り向くと、満面笑みのアリエルの顔がそこにあった。

「……何故アリエルが教会と一緒に？」

「それは話すと長くなるんだけどね……」

「彼女は人に害を与えないと教会側が判断しました。ですが、種族上野放しにはできないので私達で面倒を見ている、という訳です」

「一行で終わったな」

「酷いわね、シエル。もっと長く切ないエピソードで言おうとしてたのに」

「アリエルにはそんな扱いで十分です」

「酷いと思わない？ヴァン」

「ちよつと！いつまで抱きついてるんですか！離れなさい！」

「別にいいじゃない。あれ？もしかして嫉妬してるのかしら？」

「なっ！？アリエル！今日という今日は許しませんよ！」

互いに喚きながらも、ヴァンから離れない二人。

そんな二人にヴァンは苦笑し、

「さて、俺はそろそろここを出させてもらっ」

「あら？来たばかりなのに。もっといいじゃない」

「そうですよ。私達教会も、あなたなら歓迎しますよ？」

「そうしたいのも山々なんだが、今も旅の途中でな。もっと色々見回りたいんだ」

「そうですか……残念ですね」

「じゃあ、また縁があつたら会える事を願いましょうか」

「そうだな。じゃあ、二人共、またな」

そう言つて、ヴァンはその場をあとにした。

二人と離れた後も旅をしていたヴァンだったが、数日、数ヶ月と旅を続けるうちに。

今までに価値がなかったと思えても、それならこれから価値のある事をしたらいい、そんな助言を思い出し。

そろそろ腰を落着けてもいいかと思い始めていた。

そんなヴァンの脳裏に浮かんだ人物は……。

傭兵としての日々 停戦後（後書き）

戦争も終わり、そろそろ終盤頃？

これからヴァンがどうするのかは大体決めています、中身はこれからって所です。

感想や意見、評価等いただければ幸いです。

……タイトル変えようかな。

傭兵から先生へ

トルバ王国の中心より少し離れた程度、戦争の影響も無く平和な町に存在する、とある屋敷の中の執務室。

その部屋の中で。

「まったく、忙しいもんじゃわい……」

戦争が終わった後も、シルバは参謀として忙しく働いていた。

戦後もハルバード共和国との折り合いや他の国への牽制等、こなす仕事は多かった。

そんな中、

「シルバ殿。あなたに会いたいという方がいるのですが」

「ん？ワシにか？相手は誰じゃ？」

「それがその、フードとマントをしていて風貌は分からなかったのですが、白い鬼と言えば分かる、と」

「白い鬼？……そうか、あいつか。分かった。すぐ向かうから、通してやってくれ」

そう言い、シルバは執務室から出て、彼のいるであろう部屋に向かった。

「よう、白髪の。息災か？」

「まあまあって所だな」

互いに挨拶を交わすヴァンとシルバ。

「それで？ここに来てワシを呼んだという事は、何か困った事でも起きたのか？」

「ああ、少し相談があるんだが……何かできる事はないか？」

「……訳が分からん。とりあえず説明せい」

「そつだな。ある人に、今までやってきた事に価値があるかどうか分からなくなったなら、これから価値のある事をしてほしいと言わ

れてな。方針は決まったんだが、實際何をしたらいいのかが分からなくて、あんたの所に相談に来た」

「そういう事か。しかしそうじゃの……今はハルバード共和国とも停戦、他の国とも戦らしい戦は起きとらん。傭兵としての戦力は今は必要ないからの。どうしたものか……」

そう言ってしばしシルバは考えていると、

「そうじゃ、あの二人に紹介するか」

「あの二人？」

「ふむ。そうじゃな。それも一つの道か」

「おい、一体どういう事が説明しろ」

「まあ、慌てるな。とりあえず連絡を取るから、少し待つとれ」

言つと、シルバは机の上の電話を取り、どこかへ連絡し始めた。

「……おう、ワシじゃ、シルバじゃ。長い前置きは無しにしての、お主達に紹介したい奴がある」

それからシルバは話を進めていき、

「おお、そうか。引き受けてくれるか。なら、こちらも話を進めておく。じゃあの」

そしてシルバは電話を切り、

「ヴァン。お前の処遇は決まったぞ」

「まず、内容が分からん。分かりやすいように言え」

「ふむ。それもそうじゃ、と言いたいところじゃが、ワシも多忙での。少し待つとれ」

言つとシルバはメモ用紙に何かを書き、

「この住所の場所に行つて、二人を訪ねろ。「カルマとクラインに、ここに来るように言われた」と言えば通じるじやろう」

「……分かった」

住所の書かれたメモ用紙を片手に、ヴァンは部屋をあとにした。

屋敷から少し歩き続け、ヴァンは書かれた住所を目指していた。

「えっと、この紙の住所によればこの辺のはずだが……」
時間は夕方。

町は赤く染まり、学校が近いのか、下校している生徒が多数見られる。

そんな中、ヴァンは一人歩いていた。

そして。

「ここか……って……」

紙に書かれた住所の位置に来てみると。

その場所は、どう見ても学校だった。

「俺を学校に行かせて、一体何をしろと言っただ？」

ヴァンは困り果てたが、その場にずっと立っている訳にもいかず、仕方なくヴァンは中に入ってしまった。

「すまないが」

学校に入っすぐ、事務の人に話しかける。

「えっと、どなたかの親ですか？もしそうでしたら、来場者のバッジを着けてもらってくださいか？」

言われて、事務の人はヴァンに来場者のバッジをヴァンに手渡す。

「いや、親とかじゃないんだが。カルマとクラインに、ここに来るように言われたんだが」

「ああ、理事と知り合いましたか。少しお待ちください」

そう言って事務の人は少しその場を離れ、

…

待つ事数分。

「お待たせしました。カルマさんとクラインさんが応接室でお待ちなので、お連れ致します。ついてきてください」

「あ、ああ」

言われ、事務の人に連れられ、廊下を歩いていき、しばらくすると応接室と書かれたプレートが張られた扉の前まで来た。

事務の人はノックを鳴らすと、

「失礼します」

そう言い、部屋の中に入っていき、ヴァンも部屋の中に入っていった。

中には、ソファーに座った二人の男性がいた。

「ヴァン・ガルドさんを連れてきました。では、私は事務室に戻りますので」

言っと、事務の人は部屋を出ていった。

取り残されたヴァンに、

「まあ、ずっと立っているのもなんだ、座りなさい」

そう言われ、ソファーに座るヴァン。

「さてと、何から話せばいいものか。私達もシルバ殿からヴァン殿の事は聞いてはいるのだがね」

そう言いながら、片方の男が何枚かに纏められている書類をペラペラとめくりながら話を続ける。

「ふむ。ファルガ地域で傭兵を……ねえ。どう思う、クライン」

「種になる危険性とはかく、シルバ殿の押しとあっては無視はできませんね。とりあえずは様子を見ながらでいいのではないのです

か？」

「すまないが、俺にも分かるように説明してくれないか？俺もシルバから、ここに来るようにしか言われてないんだ。それに」

ヴァンは周囲を見渡し、

「念のため聞くが、ここは……学校だよな」

「ああ、その通りだ」

ヴァンの問いに、カルマは答える。

「その書類はおそらく俺のプロフィールを書いているものだと思うが、それを読んで、俺を傭兵だと分かっていると」

「ファルガ地域で活躍していたというのは今知ったが、腕に覚えのある人物だというのはシルバ殿から聞いている」

「その傭兵と、この学校が、一体何の関係があるんだ？」

「ふむ……簡単に言うのだがね。君に教師をしてもらいたい」

「……………」

「聞こえなかったのかな？簡単に言うのだがね。君に教師をしてもらいたい」

「いや、少し待てちよつと待てとりあえず待て」

「分かった。少し待とう」

「……質問がある。何で俺が教師をしなければいけないんだ？」

「言い方が悪かったな。正確には、ここで働くには立場が必要だね。それで君には教師をしてもらうという事にした」

「質問の答えになってないと思うが」

「先ほど腕に覚えのある人物をいうのは聞いたが、本職はそれと関係があるのだよ。教師というのは言わば、学校での立場上の問題に過ぎないのだ」

「つまり、普段は学校で教師をさせるが、本当の目的は他にあると？」

「理解が早くて助かる」

そこで一息の間を置いて、

「まあ、百聞は一見にしかずです。少し私に着いて来てもらえます

か？」

クラインはそう言うのと立ち上がり、ヴァンに着いて来るようにという仕草をし、そのまま部屋の外に出た。

「……」

ヴァンもどうしたらいいか迷ったが、結局クラインの後を着いて行く事にした。

二人はそのまま校舎を出て、敷地内に存在したプレハブ小屋の中に入ってしまった。

小屋の中は電気もなく、夕方という事もあって薄暗い。

そして、何故かまったく使われている形跡がなかった。

「ここに、一体何があるんだ？」

「少し待ってください」

そう言ったクラインは少しの間床を探り、

「おっと、ここでしたか」

言った後に床を操作すると、床の一部が割れ、何かの操作パネルのような物が出てきた。

「これは……？」

「これはこの学校でも一部の者しか知らない事でしてね」

言いながらクラインはパネルを操作すると、床の一部が横にずれ、その下に奥へと続く下り階段が出現した。

「着いて来てください」

言いながら階段を下りるクラインに、ヴァンは着いて行くしかなかった。

「これは……？」

階段を降りて十数分。

階段は終わり、広い広間に出た。

そこは広く、無機質な鉄製の壁で覆われていた。
そして、その中央にあったモノ。

「私達の本職は、これを守る事なんですよ」

「これは一体、なんなんだ？」

一見、ミサイルのような形。

だが、それにしても一般的なミサイルより大きかった。

それが一基、広場の中央に横たわっていた。

そして何より目に止まったのは、

「あのミサイルの横についているマークは、何なんだ？」
そう。

ミサイルには、横に、赤い色の、何かを表すマークが刻まれている。
た。

「あれは、放射能、核をあらわすマークですね」

「なっ……！？」

「驚くのも無理はありませんね」

苦笑しながら、クラインは呟く。

「軍や国の施設内に置いておくという手もあったのですが、灯台下暗しというか意表を付くというか、誰もこんな町中にこんな物を保管しているとは思わないだろうという意見から、ここに保管する事が決定しましてね」

「意表を付く、という事は、誰かを騙しているんだろう？ 相手は誰だ？ もしくは組織か？」

「他の国のスパイや軍事秘密を持ち出そうとする輩、後は軍内部のタカ派からですね。 あの方達はこれを使う事に対して躊躇はしませんから」

「あの方達、という事は…… あんた達は……」

「ええ。私とさっきのカルマ、そして一部の教師達は軍や国に籍を置いている者です。そして我々の目的は」

クラインは一息おいてから、

「これ無駄に戦争等の争いで使わせない事です。こんな物、最低

でも抑止力にはなるかもしれませんが、実際に使われるのは御免ですからね」

「それで、俺をここに派遣した訳か」

「ええ。使える戦力は多い方がいいですからね」

「……理由は分かった。俺も協力しよう」

それが日常を守る事になるのなら。

ヴァンはそれを硬く決意した。

「分かってくれましたか。では、長居は無用なので、戻るとしまし
ようか」

「ああ」

そして応接室に二人は戻り。

「クライン、彼に例の物は見せたのか？」

「ええ。彼も協力してくれる事を約束してくれましたよ」

「俺も日常を守る事は好きだからな」

応接室に戻った二人は、改めてヴァンが協力する事を確認した。

そして。

「さて、後の仕上げですが」

「後の仕上げ？」

「おや？もう忘れましたか？あなたには教師をしてもらう事になる
んですよ？」

「……………」

ヴァンは珍しく、頭を抱える事になった。

「私がしっかり教えますから、覚悟しておいてくださいね」

「分かった。だが、教員免許の方はどうする？すぐに取れるという
訳でもないだろう」

「その辺はこちらで何とかします。あなたは学校で教える事の何た
るかを最低限学んでくださればそれで結構です」

「……最大限、努力する」

「それとです」

「まだ何かあるのか？」

「その喋り方、ぶっきらぼうすぎますね。その辺も私がきっちり教えてあげますから」

「簡便してくれ……」

再び頭を抱えるヴァンに、カルマは「またいつものクラインのクセが出たな」と苦笑していた。

それから、違う意味でヴァンの苦勞が始まった。

傭兵から先生へ（後書き）

書き終わりました。

教師になるきつかけの部分を書いた訳ですが、いつもより少しだけ多めになっちまいました。

さて、次はどう書こうかなーと思考中。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

先生としての始まり、プラス旧友との合流

ヴァンが教師になる事が決定してから、数ヶ月後……。

四月に入り、クラスごとに新入生が組分けされ、そのうちのクラスがヴァンに任される事になった。

「一応一通りの事は教えられましたが、大丈夫でしょうか？」

ヴァンの口調はクラインの影響もあり、前とは似ても似つかないような口調になっていた。

「問題ありませんよ。私が教えられる事はある程度教えました。後はあなた次第ですね」

「はあ……分かりました」

ヴァンの肩を軽く叩くクラインに、しぶしぶ納得するヴァン。そして、彼は自らが担当するクラスの教室に向かっていった。

そして、彼の待つ教室では。

「ねえ、サラ。どんな先生かな？」

「体育館で見た時は、割と優しそうな先生だったけどね」

そこでも、新しく自分達の担任となる教師の話題でいくつかのグループはもちきりであり、フランとサラもそのうちの一つだった。

そんなこんなで騒いでいる教室の扉の前に、一人の人影が立っている。

「あ、もう来てるよ」

彼ら彼女ら生徒達は、その影の主がどんな先生かを期待や興味本位の目で見っていた。

「本当に、大丈夫でしょうか……」

ヴァンにとって、教師がうまく務まるかは問題だったが、それより何かの拍子に地の喋り方が出て生徒を怖がらせないかも心配だった。

そのくらいの心がけができる程度まで、ヴァンは成長？していた。「まあ、何とかなるでしょうか……」

そう言っ、彼は目の前の扉を開け、中に入っ、いった。

そして教壇に立ち、目の前の生徒達を見据える。

数年前まで自分と同じ年齢だった彼ら、彼女ら。

この生徒達の日常を守るためなら、例えどんな困難が待ち受けていようと、それを乗り越えてみせる。

そう決意したヴァンは、生徒達に向かい、

「体育館で自己紹介はしましたが、改めて。ボクがこのクラスの担任の、ヴァン・ガルドです。よろしく願いします」

それが、ヴァンの教師としての人生の始まりだった。

「……それで、今にいたる訳ですね……」

傭兵に拾われた事。

そして傭兵になった事。

戦争に参加して、戦友とも呼べる知り合いができた事。

その戦争が終わり、色々あった末に教師となった事。

今まで色々あったが、人生の半分も生きていないとはいえ、これまで非常に多くの事があった。

そんな事を考えていると、自分の姿が夕焼けで赤く染まっている事に気がついた。

「もうこんな時間ですか。少し昔の思い出に浸りすぎましたね」

一人苦笑し、校舎に戻っ、いくヴァン。

そして廊下を歩き、職員室に入ると、

「おお、ヴァン殿。今までどこにいたのだ？」

「あら、ヴァンさん。随分と見かけませんでしたね」

「ヴァン、私達もここで働く事になったから、よろしくね」

昼休みに分かれた三人がそこにいた。

「って、ちよつと待ってください。アリエルさん、今何か聞き逃してはならないような言葉が聞こえたような……？」

「フフフ、聞こえなかったかしら。私達、今日からこの学校で雇われる事になったのよ」

「……少し頭痛が……」

ヴァンは少し額に人差し指を押し付けていた後、

「ちよつと理事に会ってきます」

そう言つて、ヴァンはあの人がいるであろう理事室に向かった。

「クラインさん、一体どういう事なんですか？」

理事室に入ったヴァンの第一声がこれだった。

「どういう事、とは？」

「時雨さん、シエルさん、アリエルさんの事です」

「ああ、彼女らですか」

「どういう経緯で彼女らがここで働くという結果になったのか、ものすごく聞きたい衝動に駆られるのですがっ！？」

「時雨さんは体育の先生、兼剣道部の顧問として、シエルさんは教会から派遣された、宗教的な物事を教える先生として、アリエルさんは負の系統の気の扱い方を教える先生として向かえる事になりました」

「そういう事ではなくっ……もしかしてまた、表向きは、ですか？」

「はい、その通りです。特にシエルさんは教会側すでに教師としての資格を得ていたようなので、手続きが楽でしたねえ」

と言いながら笑うクライン。

「まったく、そういう事なら一言くらい言ってくれてもよかったのに……」

呟くヴァンに対して、

「まあまあ。三人とも、ヴァン先生を驚かしたかったみたいですから」

「驚くにも程がありましたよ。それにしても、ボクから言わせてもらっても、あの三人はかなりの使い手ですよ。それ程あの地下のアレが危ない、という事ですか？」

「あなたが来た時にも言いましたよね。戦力が多い方がいいと。念のためです。それに、あの三人もヴァン先生と同じ職場で働ける事を非常に喜んでいましたし」

「何でボクなんかと一緒にいいんでしょうかね……」

「……自覚のないモテる人というのはこれですから……」

「何か言いましたか？」

「いいえ。朴念仁がタイプの人は、色々苦労しそうだかと、それだけの話です」

「???」

訳の分からないといった風のヴァンに対して苦笑するクライン。

「そういえば、大会に出るまでは無能力な先生で通っていたようですが、今でもその呼称は変わってませんね」

「ええ。あの大会で、能力を無に帰す能力を持っているという噂が立ちまして。そういう意味で無能力な先生と呼ばれてますね」

「あまり目立つような行動はやめてくださいよ？あなたは立場上はあくまで教師なんですから」

「ボクもそうでありたいんですけどね」

「それはそうと、話は彼女達の件だけですか？」

「ええ」

「なら、そろそろ退出していただいてもいいですか？私も仕事がありますので」

「はい、分かりました」

そう言って、ヴァンはその部屋をあとにした。

「ヴァンさん、理事と何を話してたんですか？」

「まあ、色々です」

「それより、この校舎を案内していただけないか？ヴァン殿。私達もまだあまり把握していないのでな」

「分かりました。着いて来てください」

「フフフ……じゃあ、案内よろしくね、ヴァン」

言いながら、アリエルはヴァンの腕を自分の腕に絡め取る。

「ああ！アリエル！何をそんなうらやま……じゃない、不謹慎な！ここは神聖な学び舎ですよ！」

「そうですよ、アリエル殿！早くその腕を放してください！」

「ボクもできれば離して欲しいのですが、歩きづらくて……」

そんな風にギャーギャーと喚く四人。

そんな風景を目の当たりにしながらも、ヴァンはこの光景がいつまでも続けばいい、そう思っていた。

先生としての始まり、プラス旧友との合流（後書き）

さて、書き終わりました。

この小説の中で、教員免許の資格に関してはあまり触れていませんが、「細けえ事は（ry」の精神でお願いしますorz
そしても一つ。

この後どんなストーリーにするか、ぶっちゃけ考えてません（笑）
いや、笑い事じゃないんですがね。

そんな訳でヘタをしたら打ち切りや次話まで期間が長くなるかもしれません
が、そこそこは長い目で見てください。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

予感、そして不審者

その日は普通に始まった。

生徒達は挨拶を交わしながら登校し、各教室に入った生徒は雑談を交わしながら授業の準備をしていた。

教師達は授業の準備を行い、各自それぞれの教室に向かっていた。そして、その日は始まった。

普段通りに行われる授業。

それはいつもの風景だった。

だが。

ヴァンは、何かの違和感を感じていた。

おいというべきか、雰囲気というべきか、それとも空気と呼べるものか。

それがいつもと違う事が起きるかもしれない、そんな感じがした。

「……ヴァン先生、どうしたんですか？」

そんなヴァンのいつもと違う、ピリピリとした雰囲気、生徒達が疑問の声をかける。

「いえ、何でもありません。さて、こここの公式ですが……」

気のせいであればいいのですが。

そんな考えを胸に秘めながら、ヴァンは授業を続けていた。

そして、特に何事もなく日常は平穏に過ぎ、夕方。

学校に残る生徒達も少なくなり、ヴァン達教員も職員室で机仕事をしていた。

そんな中、ヴァンは今日一日ずっと感じていた違和感をまだ感じ

ていた。

「……」

ヴァンは少し考えたあと、

「すいません、少し校内を見回ってきます」

そう言って、職員室をあとにした。

「気のせいであってくれればいいんですけどね……」

ヴァンの感じた違和感、空気。

それは、戦場で味わった、あの殺伐とした予感だった。

長年戦場にいたため、そういうものに敏感になっていったヴァンは人一倍そういうものを感じ取れるようになっていた。

「それを、こんな場所で感じ取れるとは……何もなければいいんですが……」

言いながら、廊下を歩いていくヴァン。

と、その時。

自分の向こう側から、警戒心と言ってもいい、そんな雰囲気のが感じ取れた。

しかも、

「……かなりの使い手ですね」

ヴァンは気を引き締め、ゆっくりとその方向へと歩いていく。

薄い闇の中、だんだんとその姿が浮かび上がってくる。

人数は三人。

いつでも戦闘体勢に入れるようにし、ヴァンは息を殺しながら、

その三人に近づいていく。

（しかし、何なんですかね、この既視感は……）

思った瞬間、夜の学校で迎撃した男の事を思い出した。

「相手が何にしる、油断はできませんね」

そう呟いてから、光を発動させ、三人の元に先手必勝のごとく走り駆け、

「……ヴァンさん？」

「シエルさん？」

影と影が交差した場所。

そこには、白い剣を無造作に驚掴みにしたヴァンと、手刀を喉元に突きつけられているシエルの姿があった。

そしてそれだけではなく、

「ヴァン殿」

「あら、ヴァンじゃない」

よく知る二人の姿もシエルの背後にあった。

「三人とも、どうしてこんな遅くに校舎にいるんですか？」

「ヴァンさんこそ、どうしてですか？」

「ボクは……」

ヴァンは三人に、朝からする違和感のようなものを話した。

「そうだったんですか。私達はアリエルの付き添いですね。この吸血鬼は夜行性ですから、夜の見回りに出される事が多いんですよ」

「私とシエル殿はそれほど遅くまでは付き合わないのですが、アリエル殿はほぼ一晩中つてところです」

「……寝ないで大丈夫なんですか？アリエルさん」

「んー、一週間に二、三度棺の中で寝れば問題ないわよ」

「そつえば、あなたは普通の人ではありませんでしたね」

苦笑するヴァンに、

「それで、違和感の正体は分かったんですか？」

「……いえ。なので今日はもうしばらく見回りをしようかと」

「なら、四人で一緒にしませんか？」

「分かりました」

という事で四人でしばらく見回っていたのだが、怪しい何かを見つける事もなく時間は過ぎ……

「やっぱり、思い過ごしじゃないですか？」

「だいいいんですが」
そんな時。

「ヴァン、その違和感の正体、見つかったわよ」

「!？」

「ほら、あそこ」

アリエルの指を指す先、廊下の先には、見慣れない人影がいた。

「多分あれじゃないかしら」

「……生徒か職員の可能性も否定できませんがね」

「どうします？ヴァンさん」

「アリエルさん、霧になったりとかは……できますか？」

「ええ」

「では、ボク達三人が正面から接触します。それでもし危険人物だった場合、霧になって背後から近づき、動けないようにしてください」

「ええ、分かったわ」

「では、行きますか」

人影の近くまで行ったヴァン達。

そして、

「その人、止まりなさい！」

「ああ？誰だ？」

人影が振り返った。

無精髭を生やした、どこにでもいそうな男。

だが。

「あなたは一体誰ですか？生徒には見えませんね。かといって、あなたのような教員は覚えがありませんよ」

「やれやれ。こんな夜中にも見回りとは、ご苦労なこった。まあ、見つかったとなれば……」

男は懷から何かを取り出そうとする。

その時。

ザシュツ

「え……？」

肉を刺すような音がして、男は自分の腹を見る。

そこには、腹から白い何かが出ていた。

「動かない方がいいわよ？今は重要な臓器や血管を避けてるし、痛みもあまりないようだけど……少しでも動くと……」

「わ、分かった」

自分が刺されていると分かったと同時に、男の顔は青ざめた。

「さてと。二度は言わん。お前は何者だ」

「いや、ただの浮浪者だって」

「その浮浪者が、ここに何の用だ」

「いや、何の用って言われても……」

「アリエルさん、もう少し痛める事はできますか？」

「分かった、分かったよ！話す話す！たく、こんな奴らがいるなんて聞いてないぞ……」

「それで、もう一度聞く。ここに何の用だ」

「こ、ここに宝があるって聞いたんだよ。世界を引っくり返せるようなモンがな」

「宝、だと？」

ヴァンはその言葉に目を丸くし、そして時雨やシエル、アリエルと目配せをする。

「それでそんな宝が手に入れば大儲けできるって考えてよ、それで……」

「忍び込んだ、という訳か」

「そうだよ」

「大体は分かった。アリエル、もう離してやれ」

ヴァンがそう言うと、アリエルは爪を男から引き抜いた。

「やれやれ、助かつ……」

言い終わるが前に、ヴァンは男の首に手刀を打ち、気絶させた。倒れた男を前に、

「三人とも、この学校の地下に眠るモノの存在を知ってますか？」

「ええ。何かは理事から聞いてますが、それが何かまでは。ただ、この世の中に出してはならないものだと言っています」

「おそらく、この男の狙いはそれでしょう。ただ、この男自体は問題ありません。問題は、そういう話がどこから出回ったのか、ですね」

翌日。

ヴァンはクラインに、昨日の夜の出来事を話した。

「そうですか……地下のアレの事は私達以外誰も知らないはずなんですがね……」

「とすると、内部に内通者が？」

「可能性は否定できません。ヴァン先生は引き続き、警戒を怠らないようにしてください」

「分かりました」

何事も無かった日々。

その日々はいつまで続くのか。

あるいは、すでに何かが起こっているのか。

予感、そして不審者（後書き）

さて、書き終わったという事で賽は投げられた訳ですが、この後どうしましょうか。

候補は何個あるんですが、どれにするか、どういう内容にするかで思考中。

しかし、相変わらず（構想は含めては無いですが）一日二日三日程度で書きたい時に気まぐれに書いてる為、内容が薄いな〜と。もう少しその辺どうにかできればいいんですけどね。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

茶番劇（前編）

深夜の学校。

その校舎の建物内にて、交差する影と影。

一方は倒れ、一方は腰に手を当てて。

「これで十六人目ですか……」

足元に倒れている不審者に対して、ヴァンは愚痴を零した。

先日の不審者の事件以降も、学校に侵入する人間は後を絶たなかった。

時間帯が夜に限られたのは、対象者が人目を気にしていたのか、それはヴァンにとっては不幸中の幸いだった。

真昼間に目撃されて、日常を壊されてはたまったものではない。

だがしかし。

こうも連続で現れては、ヴァンもどうにかして解決したいと思うものである。

そう思ったヴァンは、クラインに相談する事にした。

「なるほど。確かに、このままでは侵入者が増えるのみですね」

「ええ。ですから、どうにかしたいとは思ってるんですが」

「解決するにはどうしたらいいかを考えましょうか。まず、侵入者が何故この校舎に出没するか」

「噂、が原因ですね」

「そうですね。こちらでも調べてみましたが、おそらく軍のタカ派が流している物だと考えられます」

「どうして？」

「君に見せた地下のあの施設ですが。あの場所は、今は私と貴方と、
とある人物以外には知られていません」

「どうしてですか？守るのであれば、こちらの一派でも守る場所を
知らせた方がいいのでは？」

「確かにそれはそうです。ですが、守る物が物だけに、慎重にいか
なければいけないのですよ。この学校に、タカ派の連中がいないと
は限らないでしょう？もしそういう連中に場所を嗅ぎつけられたら
面倒ですからね」

「それに、誰がそうであるか分からないので、迂闊に場所を言う訳
にはいかないですよ」

「話を戻しますが、言った通り、あの場所は現在三人しか知りませ
ん。ですから、おそらくはタカ派の連中が、こちらが動くのを待っ
ているんでしょうね」

「では、一体どうしたら？」

「そうですね……こちらでわざと動いて、あちらを煽り出す、とい
う手段も取れますね……」

「詳しく教えてくれませんか？」

「そうして、ヴァンとクラインの計画は進んでいく……」。

そしてしばらくして。

「おい、聞いたか？数日以内にアレを学校から持ち出すって噂が流
れてるぞ」

「らしいな。行動を起こすなら、急がないとな」

「先に取りられてたまるか。何かは分からないが、俺が手に入れてみ
せる！」

ヴァン達が故意に流した噂によって、学校周辺ではその在り処を狙う人間達が息を撒いていた。

そして、とある人物達の間にて。

「……噂が流れているようだな」

「ああ。だが、今度は我々が流したものではない」

「だが、真実にしろ嘘にしろ、我々も動くしかないな」

事態は静かに、だが、確実に動いていた。

そして。

ヴァンとクラインは、地下の核ミサイルの前にいた。

「さて。竈は投げられましたね」

「ええ」

「後は、どう動くか、ですね」

「そうですね」

目の前に置かれた核を見上げ、呟くヴァン達。

今、核は、何かを運ぶ用途に使われるような大型の何かに積み重ねていた。

「クラインさん、準備の方はどうですか？」

「こちらの息のかかった基地で行っています。今のところは順調です」

「あとは、これを見つけれずに運送する事と、これを追ってこれないようにする事、そして噂の断絶ですね。一つ目と二つ目についてはこちらで何とかしますが、三つ目と運ぶ時間を稼ぐ分については、ヴァン先生にも協力してもらいますよ」

「分かりました。三つ目に関しては、わざと大げさに動いて、それがここには存在しないというアピールをする必要があるでしょう」

「頼みますよ」
「ええ」

そして深夜。

ヴァンはわざと意識的に目立つように行動し、例のプレハブ小屋の前まで移動していた。

そして。

（……気配が複数。どうやら、目論見どおり、ボクのあとをつけてきたようですね）

その考え通り、ヴァンの目の前には。
それを狙う人達が複数人集まっていた。

（さて、後は時間稼ぎですか）

（まったく、野次馬にも困ったものだな）

彼らのすぐ近くに、彼は隠れていた。

ヴァンが動く機会を待つ、そのために。

（まあいい。あの程度の連中にヴァンが負けるとは思えんが、じっくりと見物させてもらおうか）

茶番劇（前編）（後書き）

土台、つまり構成はある程度考えてましたが、どう建てるか、つまり中身をまったく考えてないのと諸事情により投稿遅れちゃいました（笑）

さて、この後どしよか。

んまあ、細けえ事は（ryの精神で、少しずつ書いてきます。

茶番劇（中編）

プレハブ小屋の前に立つヴァン。

その周囲には、浮浪者から傭兵くずれ等、その種類は様々。ヴァンは腰に手を当て、

「皆さん、どういう意図で集まったかはしれませんが、念のために言っておきます。ここは私有地です。立ち退きなさい」

と言つてはみたものの、集まった面々は引く気配はない。それどころか、

「うるせー！」

「お前は引っ込んでろ！」

等の野次が飛んでくるばかり。

「では、仕方がないですね。実力行使といきますか」
そして、戦闘が始まった。

ヴァンは、集団でかかってくる連中をいなしながら、巧みに一人ずつ潰していく。

例えば。

鉄パイプで殴りかかってきた男の攻撃をかわし、側頭部を蹴って昏倒させた。

例えば。

炎を纏った拳で攻撃してきた男の攻撃を、発動させていた光の掌で受け止め、腹部を膝で蹴り、昏倒させた。

例えば。

放たれた水の弾丸を無効化し、走りながら空中にて体を回転させ、

勢いに任せた回し蹴りを頭に当て、相手を昏倒させた。

そうして無数にいる人間を次々と倒していく中。
それは起こった。

ドッ……

まるで地面の下で何かが揺れたような、地震のような揺れ。
それが何度か続いていく中。

それに侵入者達は何事かと騒然となったが、

(……一応は計画通りですね)

ヴァンは内心ほくそ笑みながら、まだ残る侵入者達を倒していく。

そして、時は過ぎ。

完全に気絶し、地面に伏している者。

気絶はしてはいないが、満足に動けない者。

そんな彼らを目の前にし、ヴァンは息一つ乱さない形で悠然と立っていた。

「この学校を狙うのもいいですが、あなた達では力不足、役者不足もいいところです。修行して出直してきなさい」

くすつと笑いながらそう呟くと、

「さてと……」

言って振り返ると、小屋の中に入り、以前見たパネルを操作した。
そして、現れた地下への階段に入ろうとすると。

「待ちたまえ」

小屋の外から、聞き覚えのある男の声が聞こえた。

「まさか……」

ヴァンは、予想外の現実には少しばかり驚きながら、小屋の外に出て行った。

そして、小屋の中から出てきたヴァンと、その男は対峙する。

男は普段から見慣れている服を着ていたが、雰囲気はまるで違っていた。

普段の理事としての教師のような雰囲気ではなく、彼のそれはまるで……

「いや、まさか予想外と言いますか。あなたがタカ派、だったんですか？カルマさん」

「タカ派か…… そう呼ばれるのは好ましくないのだがな」

そう呟いた彼、カルマは、普段の厳格とした理事としての表情ではなく、軍人としてのカルマとしての表情を顔に創り出していた。

「私もクラインも、この国のために第一に考えて行動している。

その方針が彼と違うまでの事だよ」

「その方針のせいで、この国に被害が及ぶかもしれないとしても？」

「二度同じ事を言わせないでもらおうか。私もこの国を第一に考えていると言ったはずだ。この国に被害が及ぶような事になぞさせん」

言い終わると、その場に少しばかりの静寂が訪れ。

そして。

「…… 本題を言おう。私は君と思想の話をしにきたのではない。その奥にあるのだろうか？アレは」

「やはり、アレを捜しにこの学校に？」

「最初は見つけ出さだけの簡単な任務だと思っていた。だが、実際に来てみるとこの有様だ。隠しているのがクラインだとまでは分かっただが、そこから先は全く分からなかった」

「強引に聞き出そうという手段も取れたものではありませんか？」

「私を見くびるな。思想が違うとはいえ、彼も私と同じ軍の一部だ。同志相手にそういう手段は好まん」

「……」

「どうしたものかと思っていたが、お前達が動いてくれて非常に助かったよ。その小屋も捜査範囲に含まれていたのだが、その中の装置までは見つける事ができなくてな」

「それはご苦労様です」

「……ヴァン・ガルド。軍所属である私からの命令だ。アレがある場所に案内してもらおう」

「断れば？」

「その時は兵器を私的な目的で隠しているとし、軍法会議にかける準備をしている」

「それは困りましたね」

「ヴァンは苦笑すると、

「分かりました。では、案内しましょう」

「ほう？ 以外とあつけないな」

「小屋の中に、地下へ進む階段があります。その先にそれはあります」

「では、お前の言った通り案内してもらおう」

「その前に、一つやる事がありますので、先に進んでいてもらえますか？」

「……何を企んでいる？」

「ボク達の考えた作戦、とでも言いましょうか。その最終段階です。安心してください。罠なんてものはありません。一本道ですから」

「……分かった。先に入っておこう」

言い終わると、カルマはヴァンの横を通り、小屋の中へ入っていた。

そして。

「さて。最後の仕上げですね」

ヴァンは、二人のやり取りを見ていた者達に目をやり、

「さて、皆さん。今晚はお疲れ様でしたね」

「お前……何者だ？」

意識のある侵入者の一人が呟く。

それに対してヴァンは、

「この学校の教師ですよ」

と一言延べた。

そして。

「まあ、今の事を見て分かったと思いますが。もしこの学校に手を出そうものなら、ヘタをしたら軍を敵に回す事になるので、やめておいた方がいいですよ。もっとも……」

そこで一旦区切り、まるで子どもがいたずらに成功したような目つきになり。

「皆さんが捜していたアレ、とやはらは、もうこの学校にありませんけどね」

茶番劇（中編）（後書き）

諸事情により、ちとばかり遅れてしまいました。
連休中に少しは進めようとは思ってるんですが、そこは自身の気まぐれです。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

舞台裏

「どうやら、うまくいったようですね」

周囲は電気も無く、薄暗い大きな空間。

その中で、彼の声は遠く響き渡った。

「向こうは大丈夫なようですが……サラサさん、そちらはどうですか？」

言いながら、彼は歩いてきた通路の方に向かい、声を放つ。

「クラインさん、こっちは大丈夫です」

声の主は、気により生成された大岩を、今まで進んできた通路に敷き詰めていたところだった。

「これで最後の一つですよ……っと」

声と同時に、ズンッと周囲に重い揺れのようなものが響き渡る。

「よし。これで終わりです」

「ご苦労様です」

「いえいえ、これも仕事ですから」

言うつも、彼女の額には少量の汗が流れていた。

「それで、これからどうすんですか？」

「そうですね。この施設にこれ運ぶ作業は完了しましたし……後は頃合を見計らってこの大岩を消す作業ですかね。その時はまた頼みますよ」

「はい、分かりました」

話が終わると、サラサはクラインの横に立ち、通路を通って運んできた核を見上げる。

「にしても、こんな回りくどい真似をせずに、これを破棄するって手段は無かったんですか？」

「それは私達の間でも論議されたんですが……切り札は一つでも多く持っていた方がいいんですよ」

各国との接触のためにね、とクラインは付け加える。

「その件は軍内部で決まったようなものでしてね。私達の派閥でどうこうできる問題でもないんですよ」

「ふん……なかなか面倒ですね」

「それが軍、及び国家というものなんですよ」

そして一息つくと、

「さて。それでは、あなたには私から指示するルートから外に出てもらいます。一応、この件は私に任されていますので。これの情報を複数の人間が持つ事は許されていないのでね」

「いえいえ、気遣いありがとうございます。これも安易にこれの情報を外に漏らさないため、ですよね」

では、と言い残し、彼女はその後を後にした。

「これで一応は一段落、といったところですか」

国家が核という力を持つ。

それ自体は問題ない。

そうクラインは考える。

何故なら、力を持たない国家はいずれ他の国に力で押し潰されるのだから。

だがしかし、それを安易に使ってはならない。

何故なら、それ自体が諸刃の剣であり、ヘタをしたら自分達を傷つける事になりかねないのだから。

故に、この核という剣は、鞘として動く我々に抑えられた剣でなければいけない。

「……少し傲慢ですね。人を何万も殺傷する武器を保管する立場にある、とはいえ万人と同じ人である私達が、こんな考えをしなければいけないとは」

クラインは、自分の考えに自傷する。

だが。

それでも。

これは見えない剣として、管理する他ないのだ。

一度でも使用されれば、それは万人を殺傷する単なる殺戮兵器に
しかならないのだから。

「まあ、そうならないためにも我々が頑張らないといけないのです
けどね」

自分で放った独り言に、一人苦笑するクライン。

「さて、表舞台ではヴァンさんがこの騒ぎを収めているはずですし、
私もそろそろ学園に戻りますか」

言い残し、クラインはその場を後にした。

そこには、暗闇の中、物言わずに居座る、一つ間違えば殺戮の兵
器ともなる大きな剣のみが残った。

舞台裏（後書き）

しばらく書かなくてすいませんでした。

今回は第32部分の舞台裏的な話を書かせていただきました。

ただ、勢い的なものが削がれてしまい、短文になりましたが。

次の章は何を書こうか等は、特にまだ決めていません。

今までで色々立てていた？フラグを潰して完となるかもしれませんが、また気まぐれで書きたい衝動に駆られた時、また何か思いついた時に書くかもしれません。

そのために、この作品は完結ではなく、未完成作品として残しておくことをご容赦願います。

ただ、僕としては、一旦ここで一区切り、続きをまた書くか別の世界を書くかは心境、気まぐれ次第です。

感想や評価、意見等いただければ幸いです。

茶番劇（後編）

ヴァンが侵入者達に止めの一言を言った前後。

カルマは、そのある広い部屋にたどり着いていた。

いや、そのあつた部屋、だった。

何故過去形なのか。

「一体、これは…… どういう事だ？」

カルマの目の前に広がる光景。

それは、核の欠片も見当たらない、ただの空の空間だった。

周囲を見渡しても、壁、壁、壁。

捜そうとはするものの、何かを隠している場所も、影も形も無かった。

「核は一体どこにある！？まさかヴァンが嘘を……」

「いえ、それはないですよ」

「！？」

後ろから聞こえる声。

カルマが振り向くと、そこには階段を下りてきたヴァンの姿があった。

「核は確かにありましたよ。ついさっきまで、ね」

「どういう…… 事だ？」

「それは……」

ヴァンは壁の一部に向かい、壁に触った。

すると操作パネルのようなものが開き、ヴァンがそれを操作すると、何かが動くような音と振動が聞こえ……

「クラインさんは、以前からこれをここから運び出す事を視野に入れていたようです」

そして、壁の一部が音を立てながら割れ……

「そして、彼の派閥で極秘にこれが作られた……」

そこに現れたのは……

「核はこの先です。別に進んでいただいてもかまいませんよ？進めるものなら、ですが？」

核を運べる程の大きさの通路と、そこに敷き詰められた岩の塊だった。

「な……っ」

「別に岩を除去してから進んでもかまいませんが、この先はクラインさんの息のかかったいくつかの施設に繋がっています。除去作業が済んだ頃には、施設のいずれかに、目立たないように隠蔽されているでしょうね」

「……」

「さて、どうしましょうか？」

「……くそっ」

カルマはいまいましげに呟くと、封鎖されている岩の周囲を調べてみる。

だが、敷き詰められた岩はとてもではないが動かせる様子ではなく、また岩と岩の間を進もうとしても途中で崩れられてはたまったものではなかった。

気による攻撃にしても、この封鎖がどれだけ続くかを考えると、カルマには作業をする気にはなれなかった。

「……仕方ない。ここは我々の負けだな」

そう言い放つと、カルマはヴァンを一瞥し、その横を通り過ぎ、階段を上っていく。

そして外にて。

「にしても、カルマさんがそちら側とは思いませんでしたが、これからどうするんです？目的は達せられなかった訳ですが」

「私はこれを上層部に連絡する。そこから先は上層部の連絡次第だ」「そうですか」

「それにしても、さっきまでここにいた連中はどうしたんだ？もう

いなくなっているようだが」

「ああ、それはさつきですね……」

それはカルマが階段を下りている最中の事。

「皆さんが捜していたアレ、とやはら、もうこの学校にありませんからね」

「ど、どういう事だっ!？」

「ボクと皆さんが戦っている最中に、アレは他の場所に移しました。よって、この学校をいくら捜しても、もう金銀財宝は見当たらないという事です。という訳で、そろそろ帰ってもらえませんか？皆さんも捕まりたくはないでしょう?」

「……くそっ」

悪態をつきながら、蜘蛛の子を散らすように周囲から離れていく各々。

それを見届けて、

「やれやれ。まあ、とりあえず今回の件は何とかなったようですね。そう言つと、懷から携帯を出し、ボタンを押していく。

何回かコールの音が鳴った後、相手はそれに応じた。

「もしもし、クラインさん、聞こえますか?」

『ええ、聞こえますよ。ヴァン先生の方はどうですか?』

「うまくいきました。そちらはどうですか?」

『こっちも運び終わって、今隠蔽の作業に入っている最中です』

「お互いに良好のようですね」

『ええ。それでは、そろそろ切りますね』

プツツと音がして、電話が切れた。

「さて、ボクもカルマさんに追いつきませんとね」

「という事があつたんですよ」

「成る程……」

カルマは、周囲を見渡しながら呟いた。

「ところで、これから先はどうなるんでしょうね、ボク達は。目的の物が無くなった以上、ボク達には用は無いですね」

「いずれ上層部から、何らかの通達があるだろう」

「そうですか……」

「私も学校の仕事があるのでな。そろそろ失礼する」

そう言い残し、カルマはその場を後にした。

「件が終わった途端学校ですか。あの人も苦労してますねえ」

ヴァンは苦笑し、そして空を見上げた。

雲一つない、綺麗な夜の空。

（ボク達が住むこの世の中も、こんな風に綺麗だったらいいんですねけど……）

ふとそう思いつつ、ヴァンもその場を後にし、去っていった。

こうして、核に関する事件は、茶番劇として幕を下ろした。

後日談。

その後ヴァンや軍から要請された教師達面々はどうなったかと言うと……

「ヴァン先生、そこはどういう公式で解けばいいんですか？」

「えっと、ここはですね……」

想像以上に学校に潜伏している軍出身の教師達は多く、一気に教師達が抜けると、学校そのものが成り立たなくなるため、少しずつ本来の教師と交替していく事になった。

ヴァンもその一人で、上からの通達があるまでは教師を続けていく事になった。

もともと、

（こういう事も悪くないんですがね）
そう思いつつも、ヴァンはこの日も教師としての職業を続けていた。

……教師としての自分に慣れ、また生徒達との触れあいが好きになり、このまま軍人兼教師を続けていたいという軍人もいるらしい。そういう軍人の意見もあり、町中で有事が起こった際にすぐに出動できる教師兼軍人タイプの部隊を作ってもいいのではないかと、という話もあったりなかったりしていた。

「ボクも、できるならそうしていたいですねえ……」

黒板に文字を書きながら、ヴァンはそう呟いた。

「ヴァン先生、何か言いましたか？」

「いえ、何でもありません。さて、それでは……」

ヴァンは取り繕いながら、授業を続けていく。

ちなみに、学校にまつわる宝の噂については、先日のヴァンの立ち回りが功をなして、綺麗さっぱり消えていた。

おかげで、学校には不審者が入る事もなくなった。

今日も、学校は平和です。

茶番劇（後編）（後書き）

とりあえず、終わりました。

なんとなく急ぎの文章で、（いつもだろと言われればorzですが）中身があまりないように思えますが、そこは簡便を。

次の章については、……構想は練ってますが、いつ、どんな風に書くかはまだ未確定です。

いつ次作を投稿できるかは分かりませんが、長い目で見てもらえるとう助かります。

意見や感想、評価等、いただけたら幸いです。

混沌気味で無駄に書いた的な番外編？

フラン「という訳で〜！」

サラ「番外編、始めますね。進行は、私とフランで進めさせていただきます」

ヴァン「というか、何が、という訳で、この番外編というのは何なんでしょうか？」

フラン「えーと、……ちょっと待ってくださいね〜。カンペカンペ……」

フラン「作者さんより、『この作品、最初は勢いで書いた。中身が薄い等の悔いはあるけど後悔はしてない。だけど、最近勢いつてかスランプ？物語は浮かんでも文章に書く段階になるとうまくできないから小休止中』だそうです」

ヴァン「それとこの番外編と、どう関係あるんですか？」

フラン「えっと、気分直しで試しに書いてみた、だそうです」

サラ「ここでは、普段の世界では言えないメタな事や、あればの話ですけど物語の裏話な事も話してOKだそうです」

ヴァン「ふむ……でも、三人で行うんですか？人数が少ない気がしますし、サラさんとフランさんも知らない事も多々あるんじゃないですか？」

サラ「その点に関しては心配無用です！皆さん、出てきていいですよっ」

時雨「ふむ。やっと私の出番か」

シエル「私も忘れないくださいね」

アリエル「ふう……やっと出てこられたわね」

フラン「という訳で、ヒロイン？の三人娘の登場です」

シエル「フランさん、ヒロインの後ろに？を付けなくてももらえますか？」

フラン「だって、この物語の作者さん、『恋とかした事ないからそ

ういうシーンは書き辛いんで簡便してください』って土下座してましたし。今後も多分そういうのはないんじゃないですか？」

アリエル「あら、残念ね」

ヴァン「そう言いながら、何故僕を見るんですか？」

ヴァン以外の一同「……」

時雨「……まあ、それは放っておけないにしても一旦は置いておくとして。これから何を話すのか？」

フラン「例えば、この作品が何故作られたとか？」

サラ「何故、と言っても、作者さんは『何でだったっけ。夢で見たから？何となく思いつきで？ごめん、忘れちゃった、ハハハ』って笑いながら言っていましたけど」

ヴァン「……実も蓋もないですね」

サラ「現時点で三十四話まで書いてますけど、思いつきならどういう方向性で進んでどんな終わり方をするんでしょうか」

フラン「作者もあまり考えてないかも……」

ヴァン「先の見えないフルマラソンみたいで笑えませんか」

フラン「作者は『熱のある間は次に何を書こうか妄想……いや想像するのを楽しんだ』って言ってたけどね」

ヴァン「まあ、作者さんの熱とやらがまた復活する事を期待するとしましょうか。でないと僕達も停滞したままですしね」

サラ「ですね。さて、次の話題ですが」

時雨「ちよつと、私達の事を忘れてないか？」

フラン「いえいえ、そんな事はないですよ。そういえば、時雨さん達で思った事があるんですけど」

時雨「ん？何だ？」

フラン「私達の名前の由来って、どうやって決められたんでしょうか」

サラ「ああ、それは楽屋で一人一人に言われたような」

フラン「ではまず私から。……と言っても本人曰く『思いついた』だけらしいけどorz」

サラ「私なんて、『どこにでもありそうな名前だから、考えるのが楽だった』なんて言われたんですよorz」

ヴァン「僕もフランさんと同じですね。まあ、蛭という日本名はある奪還屋のアニメから取ったそうですが。案外、ヴァンという名前もそこから取ったのかもしれないですね」

サラ「その漫画のキャラとヴァン先生のキャラって似てるんですか？」

ヴァン「いえ全く（即答）。時雨さん達はどうなんですか？」

時雨「私もなんとなくさそうだ。ただ、侍風の名前にしたかったとか何とか」

シエル「私はヴァンさんと同じで、とあるアニメのキャラから名前を頂戴したそうです。被るのはアレだから、名前の一部を改変したそうです」

アリエル「私もシエルと同じね。もともと、私はアの文字しか合っていないのだけ。まあ、私の種族が吸血鬼、シエルがシスターというのもあるんだから、そのアニメを知ってる人なら分かるんじゃないかしら」

サラ「アリエルさんの場合、性格もそのキャラと全く違うそうですね」

アリエル「ええ。オリジナルはもっと自由奔放な喋り方らしいわね」
ヴァン「作者さんも、もっとオリジナリティな頭を持った方がいいと思うんですけどね」

ガルム「俺もそう思うがなあ」

ヴァン「ガルム!？」

ガルム「そう構えるなって。ここではそういうのはご法度だって聞いているぜ？」

ヴァン「……」

フラン「そういえば、ガルムの場合はどうなの？」

ガルム「呼び捨てかよ……。まあいいか。俺は蛭達と同じだな、とあるアニメの敵役からヒントを頂戴したらしいぜ？確かフルメタル

……」

フラン「それ以上はNGです」

ガラム「まあいいか。性格もそいつと同じように仕上げようとしたらしかったがな」

サラ「でも、『自分で言うのもなんだけど、あまり残虐性がないなあ』って作者さんがボヤいてましたよ」

ガラム「そりゃ、作者のヤツがそういう風にこの作品を仕上げたいんだろ。名前のあるヤツは味方にしても敵にしても、悪い書き方はしたくないって言ってたぜ」

フラン「その辺は、作者の書き方っていうか考え方ってものだよね」
ガラム「おっと、そろそろ次の仕事だ。そういう訳で、俺は一足先に抜けさせてもらっぜ」

サラ「……行っちゃいましたね」

フラン「まあ、気を取り直してと。他に出てない人はと……」

シヴァ「すいません、遅刻してしまいました」

グレイ「ったく、そんなに急がなくても舞台は逃げないっての」

シヴァ「でも、でも！私達、一編でしか名前出てないんですよ！
？こんな機会でないと名前すらもう出ないかもしれないじゃないですか！（泣）」

グレイ「わあーったから泣くなって、な？」

パルラ「過去回想でしか出てない人もいるんですけどね……（暗）」
ヴァン「……人が増えて、随分と混沌と化してきてますねえ」

サラ「ところで、シヴァさんとグレイさんは名前の由来とかはどうなんですか？」

シヴァ&グレイ「「作者の思いつき」らしい」「「だそうです」」
サラ「二人共ですか」

グレイ「ああ、頭にパッと浮かんで、それを名前にしたらしいぜ」

フラン「作者、本当に行き当たりばったりですね」

校長先生&軍人風の男&まだ出てない理事達etc（自分達は、まだ名前すら出てないんですが……）

サラ「……数人が部屋の片隅で背景薄暗いままで体育座りして落ち込んでますが、この先でるかもしれないので、そう気を落とさないでください」

クライン「すいません、遅れました。場所はここで合っているようですね」

カルマ「仕事が残っているのですね。手短に済ませたいのだが」

ヴァン「ああ、クラインさんにカルマさん。ご無沙汰してます。十数日ぶりですか」

クライン「ヴァン先生、その節はどうも世話になりましたね」

ヴァン「いえいえ」

フラン「ところで、出てきて早々すみませんが、お二人の名前の由来は分かりますか？」

クライン「私もカルマも、思いつきで、だそうですね」

カルマ「まったく、少しは由緒ある名前にしてもらいたかったのだがね」

ヴァン「まあまあ、そう言わず。ほら、お茶でもどうですか？」

クライン「ありがとうございます」

フラン「さて、あと名前付で出てない人はと……」

ノア「呼んだか？」

一同「殿下!？」

ノア「何、私も大会以降出ていないのでな。久々に顔を出すのも悪くない。」

サラ「ところで、ここに出てきたという事は、名前の由来等は……っていうか、変わってないですか？」

ノア「……ついさっきというか、現在進行形で変え終わったと言っていた」

サラ「……へ？」

ノア「自作小説を見直していたところ、他の者と名前が間違えて被っていたりしていた部分があったらしくてな。今直したところらしい。まったく、その辺の管理もしっかりしてほしい所だな」

サラ「ご愁傷さまです……」

フラン「さて、皆の名前の由来も終わったところだし、次何話す？
ってヘタするとなつていうかしなくても、このままいくと本作品の一
部よりも長くない！？」

ヴァン「それは、これだけ人数がいたら仕方ありませんよ」

サラ「本作も、これくらい長くなればいいんですけどね」

フラン「まあ、そこは作者の頭の引き出しに期待するとして、次は
何を話そうか？」

サラ「次以降をどうするかじゃないかしら？」

フラン「確かに。このまま打ち切りになるかもね」

作者「確かに心配やね」

サラ「そうね。どうなるのかしら……って、作者！？」

作者「どうも」

ヴァン「それで、その作者さんがどうしてこんな場所に？」

作者「いやあ、番外編なんやから、別に自分が出てもいいと思うん
やけどね。とりあえず作者権限で」

フラン「……何故関西弁？」

作者「いや、自分関西出身やし。ここ番外編やから、あとがきとは
違って普段のノリで話してもいいかな思つて」

サラ「それよりも、この後どうするのですか？作者さん」

作者「ええ。それが問題なんやな。他の作品のネタはあるけど中途
半端なままで終わらせたくないし、いくつかフラグっぽいものを立
てるから、それを消化して、うまい事終わらせたいな」と

ヴァン「終わらせたい、という事は、話自体は終盤に向かつてるん
ですか？」

作者「その前提が違うんやなこれが。確かにフラグを終わらせて一
段落はさせたいけど、作品のネタはいつ思いつくか分からない。故
に、いくら章の話が終わっても、作品自体は未完のままにしておく
など。あとは、意欲が沸いたら中身の薄い部分にも追加して形で手
を加えていきたいなと」

サラ「成る程。ところで、話のネタは何か思いついたんですか？」
作者「とりあえず一つは。けど、内容をどうするかがまだ決まっとらんし、読者の皆さんにはなっがい目で見守って欲しいなと」
フラン「分かりました。という訳で、いつになるか分からないけど、とりあえず待っておいってくださいね」
作者「自分のセリフを……まあいつか。そんじゃ、次の作品を書き上げる熱ができるまで、もちっと時間かかるかもしれんけど、その辺簡便したってな」
一同「では、また会う日まで！」

混沌気味で無駄に書いた的な番外編？（後書き）

長い事待たせて非常に申し訳ないっす。

作中でも述べている通り、熱が引いて書く意欲が失せたというか。

r z

まあ、いつかは完結ではない完成をしたいとは思ってますので、見守ってやってください。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

種の襲撃

学校の近くにある、過去の遺物を置いてある博物館。

その中で、今王国と共和国の関係者達が集まっていた。

停戦となった両国の、親善を含めた集いとなっている。

各々が和気藹々とした会話を繰り広げる中、二人の男女が過去の遺産を前にして語っていた。

「ノア殿。戦もなくなり、我々の住む世界の平和になったものです
ね」

「ああ。願うなら、この平穏がずっと続けばいいのだがな」

「私もそれを切に願います」

二人は、ガラスの向こう側にある過去の遺産を、歩きながら鑑賞
していく。

そんな中、

「レン様、ここにいらっしゃったのですか」

言いながら、二人のもとへと駆け寄ってくる一人の男がいた。

彼は二人の近くに寄ると、顔をしかめて、

「まったく、公共の場でも私達から離れないでくださいと言ったで
はありませんか」

「まったくとは私の台詞です。少しは私も自由に動き回りたいので
すよ」

「それは別に構いません。護衛も無しに一人で動き回られる事が問
題だと言っているのです」

「分かりました分かりました。貴方も共に歩けばいいだけの話でし
よう。それと」

レンと呼ばれた少女は、ノアの方に顔を向け、

「王国の長の前で、はしたないですよ、ヘルク」

ヘルクと呼ばれた男は、ノアを一瞥すると、

「これは、失礼を」

「いや、構わぬ。むしろ、このような場においてもその変わらぬ忠誠心、見事であるぞ」

「はっ」

「これは忠誠というより、むしろ過保護と言った方が……」

ボソツと呟いたレンの呟きに、

「今何か言いましたか？レン様」

「いえ、何でもありません。ノア殿、続きを見ましようか」

「うむ」

二人は一緒になり、遺産の見学を再開した。

その光景を見て、ヘルクは、

「まったく、レン様にも困ったものだ」

一言愚痴を零しながら、二人の後を追っていった。

しばらく博物館で各自が時間を潰した後、ノアとレンは集まった人々を前にして演説を行っていた。

「皆の者。今まで我らトルバ王国とハルバード共和国は長く戦争を行っていた。だが」

「それも過去の事。今はお互いに手を取り合い、共存の道を取るべきだと、私達はそう思うのです」

その言葉を、集まった人々清聴していた。

「お互いに禍根を残す者も中にはいるだろう。だが、それは私達のこれからの国家の成長に免じて目を瞑ってもらいたい」

「私達が、互いに手を取り合えば、きっと両国ともいい国になるはずなのです」

その言葉を最後に、二人は口を閉じる。

しばらく続く沈黙。

だが。

パチパチパチパチ……

誰かの拍手が始まりとなり、それは小波のように広がり、やがて

広場全体に広がっていった。

それを見届けた二人は、互いに顔を合わせ、頷く。

「トルバ王国の王である私が来たのも、ハルバード共和国の代表者であるレン殿に参上してもらったのも、そして各々に来てもらったのも、この共存をより確かなものとするためである。忙しい中、感謝する」

「そして、トルバ王国と、ハルバード共和国の繁栄に、乾杯！」

「……レン様。乾杯と言いますが、皆飲み物を持っておりませぬ」と突っ込むヘルク。

そんな掛け合いにどつと笑う観衆。

「はは、そうでしたわね」

ノアも、レンも、その場にいた観衆も、皆顔に笑みを浮かべていた。

それは、お互いに平和を望む顔であり、それを皆信じて疑わなかった。

そんな時。

「ちよつといいですか？」

突然、観衆の中から一人の男性が二人の前に進み出た。

博物館の作業員だろうか、その男は片手に鞆を持ち、作業用の服を着ていた。

「ノア様、一ついいですか？」

「何だ？申してみよ」

「ノア様とレン様は、両国の共存とやらを望んでいるんですよね？」

「うむ」

「それには、一つ問題がありましたねえ」

「問題とな？何だ、言ってみるがいい」

「今この博物館に、それを望まない連中がいるのはご存知ですか？」

「と言うと？」

「あの戦争の生き残りで、最も危険な地域にいた者達。ファルガの種、と呼ばれている者達です」

「ふむ……」

「彼らは望んでいるのですよ。あの戦争を。あの生と死の狭間の生きた心地を。戦いの中の、あの興奮を」

「なるほど。よく分かった。私の知る者にもそう呼ばれる者はいる。その者にも詳しく調査をさせよう」

「調査もいいんですがね。一番知らせないといけない情報があるんですよ」

「何だ？」

「彼ら、ファルガの種と呼ばれる者達の残党が、すぐ近くに潜んでいるって情報ですよ」

「何っ！？」

男の言葉に反応したのは、ヘルクだった。

「レン様、お気をつけください。そやつらがどこに潜んでいるかも分かりません」

そう言ってヘルクはレンの前に出ると、男の近くに寄り、
「情報提供、感謝する。して、その者達がどこにいるかは知っているのか？」

「ええ、もちろんです」

「なら、すぐに案内してくれ」

「その必要はありませんよ」

「何？どうしてだ？」

「それはですね……」

男は、言いながら鞆を開け、中から黒い銃を取り出した。

そして銃口を上に向け、引き金を引く。

パラララッ！

硬い音を立て、弾が銃から発射される。

そして。

「俺達は、テロリスト。名をシード。今よりこの場合は、我々シードが占拠した！」

その言葉と同時に、周囲にいた人々の何人かが懐から銃を出し、

構える。

「そういう事だ。観衆の中にも、少々同志を含ませておいた。怪我人を出したくなければ、動かない方がいいぞ。その男もだ」

言われ、動こうとしたヘルクはその動きを止める。

「別に玉碎覚悟でもいいぜ？ その姫様と王様が傷物になってもいいならな」

「くっ……」

「まあ、そういう訳だ。あんた達はしばらく人質になってもらおう」

広場でそんな光景が広がる中、手洗い場から出てくる一人の影がいた。

「うわ。これは大変ですね。急いで誰かに伝えないと……」

その影は、懷から通信機を出すと、唯一繋がる相手にかけた。

「クラインさん。私です、サラサです。今博物館がとんでもない事になってます……」

通信機を片手に、サラサは見つからないように隠れながら話し続ける。

「見た感じ、王様とハルバード共和国の代表の人と、その他大勢の人が人質になつてゐたいですね」

「ええ！？ 無理です！ 相手が何人いるかも分からないのに、制圧なんて無理ですよ。とにかく、私は見つからないように偵察しますので、そちらからも誰か増援を送ってください」

それを最後にサラサは通信機を切ると、

「まったく、大会では赤い髪の男に襲撃されますし、ここに配属されて来てみればこんな事になりますし、本当に不運ですねえ」

一人愚痴りながら、その場を後にした。

種の襲撃（後書き）

久々に書く気になり、きまぐれに書いてみました。

と言っても、まだまだ拙い文章ですが。

この後どうするのかあまり考えてはいませんが（待て）、構成を思いつき次第書いていこうと思います。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

奇襲（前編）

空には雲一つなく、夏の近づいた爽やかな晴れの日。

ヴァンは今日もいつものように授業を行っていた。

「……という事で、トルバ戦争とハルバード王国は停戦へと落ち着いた訳なんですね」

ヴァンは今日歴史を教えていた。

彼の得意科目、というより教える専用科目は無い。

どの分野も分らない事は無く、平均的に幅広く教えられるという事で、特定の科の先生が休んだり出て来られなかったりする時にこうして臨時で教える事もある。

「その時に、王は先代から今の国王に変わったのですが……」

と、何も問題なく授業を進めている時、

『えー、こちら放送室より。ヴァン先生、クライン理事のところまでお願いします』

「……何やら呼ばれたようですね」

ヴァンは教室と、今自分が手に持っていたチョークと、書きかけの黒板に次々と視線を移し、

「仕方が無いですね。皆さん、一時自習とします。もし授業までに戻らない時は、各自丁度いいところまで進めておいてください」

そう言い残し、ヴァンはクラインのいる理事室へと向かった。

しばらくして、理事の部屋に入ったヴァン。

そこには、クラインが椅子に座って待っていた。

「クラインさん、今日はどういった用件ですか？」

二人に話を聞こうとすると、まずクラインが口を開けた。

「まず起こっている事を話しましょう。近くにある博物館がテロ組織に占拠されました」

「テロ組織？」

「ええ」

「それがボクと、どういった関係が？」

「そこには偶然か狙ったものなのか、我が国の王とハルバード共和国の代表の方も来ていたようなのです」

「それは…… なんといいか。ですが、それは軍に任せた方がいいのでは？」

「私としてもそうしたいのですが。入り口は組織の人間に固められていて、簡単には突破できず、難航しています。更に言うなら、彼らはある物を人質と引き換えに要求しています」

「ある物？」

「彼らは、一つの都市を破壊できる兵器、と言っているようです。その言葉を聞いた途端、ヴァンの脳裏にあるものが浮かんた。

少し前に、彼が協力してこの学園から運び出した核兵器。

「…… おそらくヴァン先生もその考えに至っていると思いますが、彼らの狙いは核です。そして運がいいのか悪いのか……」

クラインはそこで一旦口を閉じると、

「彼らの足元に、それは眠っています」

「…… ひょっとして、核を運び出した先というのは……」

「ええ、今事件の起こっている博物館です。まったく、私達軍の関係者がいながらぶがない事です」

「それで、ボクに一体どうしろと？」

「中に潜んでいる知り合いに情報を渡してもらっています。現在人質とテロ組織の人員は、広場にいます。そこを奇襲してもらいたいのです。なるべく被害を出さずという条件付きで。できますか？」

「…… 無理ですね」

「理由は？」

「まず奇襲の件ですが、先程クラインさんが入り口は固められていると言いましたよね？ 秘密の通路でもない限り、それはほぼ不可能

に近いです」

「また、被害を出さずという事ですが、ボク能力は各種属性を平均的に扱えるという事と、無効化能力です。何かから誰かを守るという能力ではありません」

「では、その二つの件を解決できる方法がある、と言ったら？」

「それは？」

「奇襲に関しては、前に核を運び出した通路を使います。これなら学園側から博物館内部への戦力の秘密裏な移動が可能になります」

「また、博物館にいる軍関係者は、守りに適した者です。彼女を人質を守るディフェンス、君をオフENSとして行動させましょう。それなら問題ないでしょう」

「その関係者は、自分だけでなく、周りを守る事もできるのですか？」

「守りに関しては、トップクラスです。ただ、攻守共には動く事ができないので、彼女から増援要請を指定されたんですがね」

「分かりました。引き受けましょう。ただし、相手は実弾武器を所持している可能性があります。できればオフENS側の人数を増やしたいのですが」

「分かりました。ヴァン先生の言われる人を呼び出しましょう。誰です？」

「ボクと面識のある人達で、ボクが知る限りボクと同等に強いと思える方々です。名前は……」

「なるほど。分かりました。では早速放送で流してもらいましょう」

その言葉を最後に、クラインは部屋の外へ出ようとした。

その背中に、ヴァンは一つ疑問に思った事を口にした。

「最後に一つ。ボクにその通路を教えてもいいのですか？核の事は秘密なんでしょう？」

「問題ありません。この事を話した時点であの施設は用済みです。別の場所に移すだけですから」

そうして、二度目の放送が校内に流れ。

「ふむ。学校の敷地内部にこのような場所があったとは」

「フフフ。久々の出番ね。わくわくするわ」

「わくわくするものではないですよ、アリエル。今から行うのはテロ組織に対する奇襲なんですから」

校舎の片隅にある廃屋の中の階段を下った先の部屋。

そこには、ヴァン、時雨、アリエル、シエルの四人がいた。

「にしてもすいませんね、三人共。授業中だというのに呼び出した
りして」

「いえ。国家の一大事ともなれば、急いで解決しなければいけない。
それで、……」

時雨は一旦口を閉ざすと、目の前にある大岩の群れを見上げた。
通路には以前敷き詰められた岩の数々。

「これはどうしたらいいのか？ヴァン殿」

「……何とかするとクラインさんは言っていたのですがねえ」
苦笑いを浮かべるヴァン。

「すいません、その大岩を消去するのを忘れていました」

とクラインが述べていたのは、ヴァンはあえて言わない事にした。
大岩の前で途方に暮れていると、何やら通路の向こう側から音が
聞こえ始めた。

それは岩と岩の擦れるような音で、それは次第にヴァン達の方へ
向かってくる。

そして、音がよく聞こえるようになった時、目の前の岩が砂と化
して崩れ去り、

「すいません、少し時間がかかってしまいました。あなた達が増援
さんですか？」

岩の向こうから、一人の女性が現れた。

「あなたが、軍の関係者ですか？」

「はいっ。つい最近あの博物館に警備員として配属されていた者です。サラサ・バナーと言います。サラサとお呼びください」

「自己紹介もいいですが、事態は急ぎます。向かいながら話しましょう」

「そうですね。分かりました」

こうして、合流した五人は博物館に向かって走り出した。

「それにしても、驚きましたよ。博物館の警備に配属された時は何事かと思いましたが、まさかあの場所に核が隠されていたなんて。クラインさんも、私に教えてくれてもいいのに……」

「色々事情があると思いますよ。あまり知られると困る代物ですし」
「ははっ、そうですね」

「それより、さっきの岩を消した事です、あれはサラサさんの能力ですか？」

「はいっ。私の能力は土と鉄属性に長けていて、何も無いところから土や砂鉄を作り出したり、消去する事ができるんです」

「という事は、あの岩を置いたのもあなただったんですか？」

「そうです。どうやら、あの時はお互いに知らない間に協力していたみたいですね」

「二人共。話しているところ悪いのだが、そろそろのようだ」

時雨の声で前方を見ると、出口が見えてきた。

「そのようですね。では、ボクと時雨さんとアリエルさんとシエルさんで奇襲をかけますので、サラサさんは人質を守ってください」

「承知した」

「分かりました」

「分かったわ」

「了解です」

ヴァンの言葉に四人がそれぞれ反応し、五人は博物館内部へと侵

入
し
た。
。

奇襲（前編）（後書き）

人間熱が入るといっか一旦領域に入ると書けるものなんですね。
という訳で、続きをまた書きました。

一時といっか長期間連載を止めていたため、まだ見てくれている人がいるかどうか心配でしたが、ユニーク人数がどっと増えた事には驚きもし、また嬉しくも思いました。

見てくれる人がいるといっかは、作者にとって何よりの（書くうえでの）栄養剤だといっのを実感しました。

意見や感想、評価等、いただければ幸いです。

侵入

長い通路を抜けた先は、核の置かれている大きな空間だった。

その場所に置かれている核を見て、ヴァンはそれに改めて畏怖の思いを感じ、時雨とアリエルとシエルは興味津々といった感じで核を眺めた。

「これは何だ？ヴァン殿」

「話すと長くなるのでできませんが、都市一つ二つを破壊できる兵器、だとも言っておきましょうか」

「確かに、これだけ大きいと破壊力も相当なものになりそうですね」

「三人とも、今日はこれの見学に来たんじゃないんですから、先を急ぎますよ。サラサさん、道案内をお願いします」

「はい、分かりました」

そうして、五人は核の置かれている空間を抜け、隅にあった細い道へと進んでいった。

しばらく道を進むと、道が途切れ、行き止まりに出くわした。

「サラサさん、行き止まりのようですが？」

「ここはですね……少し待っててください」

そう言つと、サラサは壁の一部を押した。

すると、その壁が外れ、中から複数の操作パネルのようなものが出てきた。

それをサラサが順番に押していくと、目の前の壁が開き、どこかの廊下のような場所に出た。

「皆さん、ここが博物館の内部です。少し待ってくださいね」

五人が廊下に出た後、サラサが廊下の壁の一部に触ると、そこが外れ、さっきと同じように中から複数の操作パネルのようなものが出てきた。

壁が開いた時と同じようにパネルを操作すると、目の前の通路が横から出てきた壁に遮断され、数秒としないうちにその場所は壁の一部と見分けがつかないようになった。

「終わりました。一応、コレは極秘なので、内緒にしてくださいね」

「さて、博物館の内部には入り込みましたが、これからどうしましょうか」

「あら、ヴァン。どうするか考えてなかったのかしら？」

「ボクと時雨さんとアリエルさんとシエルさんでテロリストを抑えに、サラサさんが人質を守るという方針はあつたんですが、細かいところまではまだ決めてませんでしたね」

「一気にテロリスト達を襲うという選択肢はないのか？」

「それだと、彼らが人質を使う危険性も出てきます。人質を使われるとボク達も手出しが……」

「わ、ちよつと隠れてください！」

突然のサラサの声に、ヴァン達は通路の角に隠れた。

その後、通路の先から銃を持った男が歩いてきた。

ヴァン達が息を殺してじっとしていると、彼はその場を通り過ぎ去っていった。

「言つのを忘れてましたが、各通路には見張りがいて、こうして時々巡回に来るんです」

「それを先に言ってください」

「はは、すみません」

「それで、他に何か分かつている事は無いですか？」

「えっと、博物館の入り口に数人見張りがついてます。人質はトルバ王国の王様とハルバート共和国の代表の方と、その他にも大勢の方がいるようです。彼らを囲うように銃器を持ったテロリスト達が立っています」

「説明ありがとうございます。……さて、どうしたものでしょうか」
ヴァンはしばらく考えると、

「サラサさん、聞きたい事があるのですが」

「はい、なんですか？」

「先程見回りが来ましたが、人質がいるのに何故見回る必要があるんですか？もしかしてさっきの場所以外に窓からの潜入口があるのか」

「いえ。残念ながら、この館内は入り口以外からは入る事のできない、ほぼ密室のような状態です。なので、おそらくはまだいるかもしれない見物客を見つけるためだと思います」

「という事は、今この場でボク達は、見つかったも見物客としか見られない訳ですね」

「そうなりますね」

そこまでで問答を終えると、ヴァンは皆を見回し、

「皆さん。一つ方法があります。ただ、これは少し皆さんにとって危険な賭けになりますが、いいですか？」

「どんな方法なのだ？ヴァン殿」

時雨の声が代表とでもいうべきなのか、他の三人からも否定的な言葉はでなかった。

「……皆さんの態度を肯定と受け取ります。では、これからその方法を言います。それは……」

ヴァンは、それから四人に自分の考えた方法を話した。

場所は代わり、人質のいる広間。

そこには複数のテロリスト達と、人質となった人間達がいた。

「王国からの返事はまだか？」

リーダーと見られる男が、近くにいた部下の一人に声をかける。

「はい。向こうに連絡はしましたが、返答はまだ来ていません」

「そうか……」

彼は短く返事を返すと、その場にいる人質を見渡した。

「我々が本気だという証拠を見せる必要があるかもしれない」

男はそう呟くと、人質達に向かい、

「諸君。我々はお前達の国に要求を出した。だが、その返事は一向に返ってこない。故に、我々が本気であるという証拠を見せるべきだと俺は思った」

「ど、どうするつもりなんだ!？」

人質の一人が男の言葉に応じる。

「何、簡単な事だ。おい、誰でもいいから俺の目の前に人質を連れて来い」

男に命令された部下が、人質の一人を男の前に連れてきた。

「……おい、何をするつもりなんだ？」

「簡単な事だ」

男は表情を変えず、

「王国からの返事が無い場合、三十分おきに見せしめとして一人ずつ殺していく」

その言葉に捕らわれている一同はざわめき、

「待て、待てくれ!」

男の前に連れられた人質は叫び喚くも、

「これも俺達の目的の礎となる事だ。名誉に思え」

男は、平然とそう言っただけだ。

そして、

「待て!」

言いながら、人質の中から一人の男性が立ち上がった。

「誰だ?」

「トルバの現国王、ノアだ」

その言葉に、周囲はもちろん、テロリスト達も驚きの顔を隠せない。

もっとも、人質達は何故と、テロリスト達は国王の出現とに驚いた訳だが。

リーダーの男も驚きを隠せなかったが、他のテロリストより早く冷静になり、

「その国王様が一体何の用だ？代わりに死んでくれるのか？」

薄い笑いを浮かべながらそう言くと、ノアも笑いながら、

「できればそれは勘弁願いたいな」

と言った。

男は笑いを崩さず、

「じゃあ、何故出てきた？」

その言葉に、ノアは顔から笑みを消し、

「逆に聞こう。何故このような事をする？」

「このような事？」

「人質を取り、それを盾にし、国に私ですら場所の知らぬ兵器の在り処を聞こうとする。そのような無理難題を押し付け、あげくの果てに見せしめだと？それだけの事をする理由が、主らのやっている事にあるというのか！？」

「分からないな」

「分からない……？」

「狂気な奴、戦場で味わった興奮を味わいたい奴、生きた心地を味わいたい奴。俺達の集まった理由はてんでバラバラさ。俺はもっと複雑だが、その辺は省略させてもらう」

男はそこで一度言葉を区切り、

「だが、する事は皆一緒さ。世界を相手に暴れたい。世界をブツ壊したい。それだけさ。だから人を殺すのに理由はいらぬ。兵器を欲しいのは今言った事をやるのに必要だからって理由だがな」

「……狂っている」

「かもしれないな。だが、俺達にとっては普通なのさ」

言い終わると、男は銃を構え、連れてきた人質に向け、

「では、これより刑を執行する」

そして男の指先に力が籠り、

「リーダー、隠れていた観客達を捕まえてきました！」

あらぬ方向から声が聞こえ、男の指から力が抜けた。

「ん？まだ残ってたのか」

男は銃を構えたまま、部下の連れて来た人間達の方へと視線を向ける。

それはノアも同様で、

(……ヴァン!?)

心に生まれた驚きはあったが、それをノアは何とか制してみせた。

(あれは確か大会にいた者? 何故ここに?)

そんなノア的心情とは別に、舞台の時間は進んでいく。

侵入（後書き）

構成としてはうまく（？）書いたつもりですが、間違ってたらしいません。

テロ組織の目的理由はメチャクチャですが、そこは常人には分からないものがあるとして簡便してくださいませorz
感想や意見、評価などいただけたら幸いです。

奇襲（中編）

「スーツの男に東洋の女に金髪の女に修道女に……最後のはこの館の警備員か？どんな組み合わせだ？」

眩きながらも、銃を人質に向けていた男は部下に、新しくこの場に来たヴァン達を人質のいる場所に連れて行くように指示を出した。それに従い、ヴァン達は人質の集まっている場所に連れていかれた。

「ここに座れ。その王様もだ。これからじっとしている事だな」
言われ、その場に座るヴァン達とノア。

そして。

「お久しぶりです、ノア様」

ヴァンはテロリスト達に聞こえないように小声でノアに声をかけた。

「うむ。お前とは大会以降だな。息災か？」

「はい」

「しかし、お前はどのようにしてここにいる？私の方でも気になって独自に調べてみたが、お前は今は学校の先生をしているはずだが？」

「詳しい事は後で。ボク達はこれから行動を起こしますので、ノア様はなるべく姿勢を低くしていただきます。それと皆さん、できれば全員生きたまま倒してください」

そう言つて、ヴァンは銃を構えている男とその先にいる人質に視線を向けた。

「とんだ邪魔が入ったが、再開だ」

言つとリーダー格の男は、人質に向けている銃の引き金を押さええている指に力を入れる。

「そつえば、さっきの奴はこの国の王様だと言つたな。次はそいつにするか。その方が国も慌てて動くだろう」

言いながらも、少しずつ引き金が指の力に負けて押されていき、そして。

その場の全員の視線が狙われている人質に集中している、その時。「今です！」

人質の集団の中から、剣の柄のような物が投擲された。

それは銃に当たり、銃口から発射された弾は狙いを外れ、天井に向かって発射された。

同時に、人質の中から複数人の人間が、さっき連れてこられたヴァン達が人質の群れの中から弾かれるように動きだした。

「う、撃て！」

人質の近くにいたテロリストの一人が喚き、それに応じて人質を囲っていたテロリスト達が人質に向かって銃を撃つ。

しかし、

「無駄ですっ！」

人質の集団の中にいたサラサが声と同時に手を前に向けると、発射された銃弾は、全て人質に届く前に、空中に出現した砂の塊によって止められていく。

「目測ができていればいる程、私の能力は向上します！今の私の砂は、銃弾すら防ぎますよっ！」

サラサが得意げに、顔に笑みを浮かべながら叫ぶ。

その間にも、他の舞台は進む。

座っている人質だけでなく、テロリスト達に向かうヴァン達にも銃弾が走る。

しかし。

例えば時雨。

彼女は身に当たる弾丸のみを、隠し持っていた短刀で弾く。

そしてテロリストに近づくと、柄で、短刀の峰でと、殺傷能力の無い部分で彼らの体を打ち、昏倒させていく。

「刃物であれば刀でなくとも自身の技を損なう道理は無い！」

そして周囲のテロリスト達を倒していく中、倒れたテロリストに視線を向け、刹那の時。

「私には貴様らを裁く権利も義務もない。貴様らを裁くのは法廷だ」
呟いたあと、時雨は残るテロリスト達に短刀を構えて向かっていく。

例えばシエル。

「くそっ！」

テロリストが銃を構え、撃とうとするも、彼女は縦横無尽に走り、なかなか狙いが定まらない。

そして、

「はあっ！」

声と同時にシエルは手に構えた八本の剣を投げる。

白い光を残像に残し、それらはテロリスト達に刺さっていく。

呻き声を上げながら、倒れていくテロリスト達。

その光景を見ながら、

「私は神に仕える身、安易に殺生は求めません。故に急所は外しています。あなた達にそれを求めるのはその権力にある者か、あるいは神のみです」

そう言い残し、シエルは袖から新たな柄を両手に構えて、意識し、その先から白く光る剣を出現させ、まだ残るテロリスト達に目を向ける。

例えばアリエル。

「撃て！」

一人の声を待つまでもなく、複数のテロリスト達が銃を彼女に向けて銃弾を発射する。

それらは身動き一つしないアリエルの体に吸い込まれていき、彼女は膝と腰を曲げ、体をくの時に歪め、前方に揺れた。

だが、それは倒れる前の動作ではなく。

膝を曲げたアリエルは、膝を伸ばし、地面を蹴り、その勢いそのままにテロリスト達に向かって突進していく。

「なあっ!？」

常人なら死んでいて当たり前なのに、その常識が覆されている光景。

それを目の当たりにしながらもテロリスト達は撃ち続けるが、銃弾が当たったはずの彼女はそれに動じる事なくテロリスト達に接近し、伸ばした爪でテロリスト達を薙いでいく。

斬られたテロリスト達は訳が分からないままの表情で、意識を無くし、倒れていく。

「私は普通の人間とは違う、高貴なる吸血鬼なのよ。その程度じゃ痛い事はあっても死にはしないわ」

服が破れるのは嫌だけど、と呟くアリエル。

そして、倒れ、意識の無いテロリスト達を見下げながら、

「聞こえてないでしょうけど、心配無用よ？殺してないから。殺した方が楽だけど、後でヴァン達に怒られる方が面倒よ」

愚痴っぽく呟いて、アリエルは次の獲物に狙いを定め、銃弾をものともせずに向かっていく。

例えば。

ヴァン達が戦っている時でも、人質に向かう銃弾や流れ弾が存在する。

そういった物をサラサは砂を操作して処理していた。

そんな中、一発の銃弾がサラサの目を逃れて人質の方に飛んでいく。

「うわっ、ちょっと待って!」

気づいたサラサが能力を使おうとするも、銃弾が人質に向かう速

度の方が速く、人質の一人に銃弾が吸い込まれる。

彼女がそれを確信した時。

一人の影が人質と銃弾の間に割り込んだ。

銃弾はその者に吸い込まれたが、その者は倒れる事はなかった。

「我が体、鉄の城。動かざること山の如し！」

そう叫んだ影は砂と砂鉄を纏っているのか、全身が茶黒い塊に覆われていた。

「この程度、土塊と化した私には無駄だ」

そう言い放った者はサラサの方に顔の部分を向け、

「女よ。あなたの立場は分らないが、少なくとも敵ではない。ならば、レン様の護衛騎士の一人であるこのヘルク、助太刀しよう」

「あ、ありがとうございます」

お互いに言葉を交わし、サラサとヘルクは飛び交う銃弾から人質を守るため、防御という名の奮闘を続けていく。

そしてヴァン。

今彼は、リーダー格の男と対峙していた。

「お前達、何者だ？」

男の問い、ヴァンは、

「ボクは普段は教師をしています。現在は軍に籍を置いていますけどね。元の職業は皆バラバラです」

「教師だと……？ふざけるなっ！！」

「ふざけてなどいません。真実です」

「……で、その教師様が一体俺達に何の恨みがあつてこんな事をする？」

「恨みはありません。軍からあなた達を制圧するように言われたので来たまでです。もっとも、恨みの部分を強いて言うなら、平穏な日常を壊された恨み、でしょうか」

「ハハハ、そうかよ」

男は薄く笑いながらヴァンを見つめ、

「じゃあ死ね」

一言言って、銃を構え、ヴァンに向けて撃った。

その銃弾はそのまま一直線にヴァンに向かって飛んでいき……。

ヴァンはそれを少し体を動かすだけの動作でその銃弾をかわした。

「何っ!？」

「簡単な事です。貴方の目線と銃口の向きで撃たれる場所を把握する。後は引き金を引くタイミングでその場所から体を動かせば、弾が当たる道理はありません」

「なるほど、銃は効かないって事か。なら……」

男は言いながら、右手を構え、集中する。

そして、

「これならどうだよ!」

男は突進し、ヴァンに向かって指先を突き出し、刺すような仕草で右手を動かす。

そしてヴァンの体に右手が突き刺さる、その寸前。

その右手はヴァンの手によって押さえられていた。

「な……なんで? 硬質化された俺の手は、鉄でも貫くのに……?」

「残念ですね。ボクも、貴方が集中すると同時に、能力を発動させてもらいました」

そう言うヴァンの体からは、白い靄のような光が溢れ出ていた。

「ボクの能力は、能力者相手には絶対の力を発揮するんですよ」

「……分かってるよ。能力を無効化するんだろ? 本当に反則気味な力だぜ」

「何故知ってるんですか?」

「ファルガ地域にいた奴で、あんたの名前と二つ名とその能力を知らない奴はいない。だろ? 白髪鬼さんよ」

男は顔に薄笑いを浮かべながら呟いた。

「なるほど」

男はしばらく小さく笑っていたが、ふとその笑いを止め、

「……どうしてだ?」

「何がですか」

「どうしてあんたがここに立ってこうして俺の邪魔をする！」

男は怒鳴り声を上げた。

その顔は怒っているようで、だがどこか助けを求めるような雰囲気を出していた。

「あんただって、見たはずだ！戦争で友人が、仲間が、戦場で命を落とし、散っていく様を！それでも俺は信じ続けた！俺達が勝てば、散っていった連中も浮かばれるってな。だが、どうだ？国同士が勝手に戦争を止めて、その結果がこれだ！俺達の仲間は無駄に命を散らしていっただけになった。だから俺はこの世界に復讐を求めた。皆を、世界を俺と同じようにしてやろうってな。その心、同じ戦場にいたあんたなら理解できるはずだ！なのに、あんたは何で今ここに立ってる？何で俺の邪魔をする！？」

「……」

ヴァンは黙って男の言葉を聞いていた。

男の感情が、ヴァンにも理解できたから。

もしかしたら。

もし、自分を助けてくれる人間がいなければ、自分もこの男と同じようになっていたかもしれないと思ったから。

「どうなんだよ、ヴァン・ガルド！」

ヴァンはしばらく沈黙を貫いた後、男の首に手刀を打った。

その一撃に、男は倒れる。

「なん……でだよ……」

最後に言葉を放ちながら、男は意識を無くした。

「……ボクにも、理解できますよ。貴方の心情が。貴方の過去は確かにボクの過去と同じです。そして貴方の今の姿は、例えるなら運命の違った今のボクの姿です」

倒れた男に向かって、ヴァンは言葉を紡ぐ。

「あの人達と会っていなければ、もしかしたら貴方になっていたのはボクの方かもしれませんからね」

そう言っ て、ヴァンは残ったテロリスト達を殲滅しつつある彼女達に視線を向けた。

「だからこそ、ボクは貴方と同じ道に行く訳にはいかないんですよ。今のボクを見てくれているあの人達のためにもね」

奇襲（中編）（後書き）

休日暇だったので、この話も書き上げました。

いつもより長かったので分けようかなと思ったのですが、とりあえず現状はこのままで。

意見や感想、評価等、いただけたら幸いです。

奇襲（後編）　そして終幕

各自の戦闘も終わりを向かい、舞台も幕を下ろす。

「皆さん、大丈夫ですか？」

一人先に戦闘を終えたヴァンが、皆を見渡す。

時雨は、

「問題ない」

短刀を懷に戻し、簡素な返事で返し、

シエルは、

「こちらと同じく問題ありません」

両手に構えた柄を袖に戻し、一言で返し、

そしてアリエルは、

「体の方は修復するから大丈夫よ。服が使い物にならないけど」

爪を普段の大きさに戻し、血塗れであちこち穴の開いた服を見回した。

「サラサさんも大丈夫ですか？」

「私の方も大丈夫です。この人も手伝ってくれたので」

と、サラサは横にいる男を指す。

男はヴァンの方に歩み寄り、

「私はレン様の護衛騎士の一人、ヘルクと言います。以後、お見知りおきを」

「いえいえ、こちらこそ手伝ってくれてありがとうございます」

二人がお互いに返事を返していると、

「話中のところすまぬが」

別の方向から声が飛んできたので二人が振り向くと、そこにはノアとレンが立っていた。

「ヴァン。今回の件、助かったぞ」

「私からも礼を言わせてください。危ない所を助けていただき、あ

りがとうございました」

「いえ、これも仕事のうちなので」

ヴァンが頭を掻いて照れ臭そうに言うと、

「しかしヴァンよ、一つ問い詰めたい事があるのだが」

「何でしょうか」

「私の方でも調べていたのだが、先程のやりとりは聞こえていた。お前はやはり……」

ノアが顔を硬くしながら言った言葉に、ヴァンは、

「察しの通り、ボクは元ファルガ地域にいた傭兵です」

「となると、お前もファルガの種……」

言いかけて、ノアは頭を振り、

「いや、助けてもらった恩を仇で返す訳にはいかないな。つまらん事を聞いてしまった」

「おかまいなく。ボク自身がファルガの種になるかもしれない、そう見られていると過去に言われた事がありますので」

「そうか。では、単刀直入に言おう。ヴァンよ、お前も自身がそうなると思っているのか？」

「……」

ヴァンは、周囲を見渡した。

助言をしてもらった時雨、シエル、アリエル。

そして、平穏の中に生きるべき人達。

彼らを一瞥した後、

「ボクはなりません。いえ、ならせませんよ、絶対に」

それを聞くとノアは、

「うむ。ならお前のその言葉、信じよう」
力強く頷いた。

その後、軍が施設内に入り、テロリスト達を連れていった。

「詳しい事は分かりませんが、彼らは裁判にかけられるようです。」

もつとも、人を殺してはいないので、殺人罪が無い分軽い罪になりそうです。場合によっては精神鑑定を受ける場合もあるそうです」

「ヴァン殿、そこまで考えて生きたまま、と？」

「さあ、どうでしょうか」

時雨の質問に、ヴァンは笑いながら答えを返した。

「ですが……。彼らも、もしかしたら戦争の被害者なのかもしれないかもしれませんね」

博物館での見学は、ノアとレンの希望もあり、軍の警備と共にという条件で再開される事になった。

そんな中での、一時の日常。

「ヴァン殿、あの剣は古代にあったと言われる年代物だ！このようなものがまだ残っているとは！」

「本当に時雨さんは刃物関係に目がないですね……。ってあれは消失したはずの聖書じゃないですかっ!？」

「フフフ……。二人はいいわねえ、こういう年代物に興味が沸いて」

「アリエルさんは興味がないんですか？」

「私、こう見えても普通の人より長生きなのよ。だからああいう物にも見慣れてるわ」

「何歳なんですか？」

「……。聞きたいかしら？」

「いえ、遠慮しておきます」

アリエルの背後から何やら不気味な瘴気のようなモノが見えた気がしたので、ヴァンは聞かない事にした。

一行がしばらく歩いていると、視界の先に三人の姿を見つけた。

「ノア様、レン様、ヘルクさん」

声をかけると、三人もヴァン達に気づいたようで、軽く会釈をし

た。

「ヴァンよ、ここに展示されている物はどうだ？ 気に入ったか？」

「ボクはともかく、時雨さんとシエルさんが熱中しているようです」

「ふむ。それは何よりだ」

ハハハ、と笑うノア。

そんな中、レンがヴァンの前に出た。

「初めまして、ヴァンさん。私がハルバード共和国代表のレン・カグラです」

「レン・カグラ？ もしかして、カグラというのは……」

ヴァンは、自分の手に神楽という文字を書く。

「こういう字じゃないですか？」

「そうです。私は東洋の方の血を引いているので。ちなみにレンと
いうのは蓮の字です」

「なるほど」

ヴァンは一度会話と切ると、やや顔に影を落とし、

「それにしても、こう言うのは何ですが、今回は災難でしたね」

「ええ。ですが、おかげでノア殿の知り合いにも頼りになれる方々
が存在するという情報を得られました。これは僥倖です」

「レン様こそ、優秀な護衛がいるようです」

そう言つて、ヴァンはヘルクを見る。

「戦闘の時に見てましたが、全身に銃弾をも防ぐ鎧を纏うとは。あ
れは貴方の技ですか？」

「ええ。私は風と植物と火と土の四つの属性の能力の扱いに長けて
います」

「能力を使う時に変な掛け声を上げるのが癖ですけどね」

「レン様あ……」

ヘルクの困ったような声にレンは笑いながら、

「ふふ、冗談ですよ」

と返した。

そんな様子を見てヴァンは、同情するような顔をヘルクに向け、

「ヘルクさんもなかなか大変そうですね」

と呟くと、それを聞いたレンは、

「それはどういう意味ですか？ヴァン殿」

レンがヴァンに問いかけるとヴァンは慌てふためきながら、

「いえ、決してレン様の事を悪く言った訳ではなくてですね……」

ヴァンとレンの掛け合いを合図にしたかのように、周辺に皆の笑い声が響く。

だが、そんな日常をヴァンは愛おしく思う。

「願うなら、この日々が永遠に続く事を、ですね」

ヴァンの放った言葉は、だが誰にも聞こえる事なく、独り言として消えていった。

奇襲（後編）　そして終幕（後書き）

これで一度一区切りです。

次をどんなシナリオにするかはぶっちゃけ決めてません。

それを考える時間が必要&他にも色々とリアルでやる事があるので更新は遅くなるかもしれませんが、気長に待ってくれる事を願います。

意見や感想、評価等いただければ幸いです。

夏休みの始まり

ヴァンが副業として学校の先生になってから数ヶ月。

生徒二人を襲撃者から守ったり、昔の旧友と出会ったり、大会に出たり、核を中心とした騒動が起きたり、テロリストと対決するような事があったりと色々あったが。

とにかく、季節は夏。

一歩外に出れば熱い日差しが体を照らし、耳には四方八方から蝉の鳴く音が響く。

そんな中、

「……明日から夏休みに入りますが、皆さんあまりハメを外さない程度に遊ぶようにしてくださいね」

ヴァンは通常通り、いつものホームルームを行っていた。

目の前には学校の授業がいつ終わるか待ちわびる気配を隠そうともしない生徒達。

そんな彼女らを見て、

「また、遊ぶのも結構ですが、出された課題をちゃんとこなしてくださいね」

「……はい」

男女区別なく異口同音に返事したのを確認し、

「では、ホームルームを終わります。帰って遊ぶもよし、課題をするもよし、部活動に専念するもよし、自由に動いてくださいね」

その言葉を合図に、生徒達は自由に動く。

ある者は鞆に勉強道具を詰めて帰り支度をし、ある者は近くの友人と会話を、ある者は部活動の場所へと消えていく。

そんな中、

「ヴァン先生」

ヴァンかけられる声があったのでヴァンがそっちを向くと、そこにはサラとフランがいた。

「先生はこれからどうするんですか？」

「ボクですか？」

サラに問われたヴァンだったが、彼自身は自分の事を聞かれるとは思わなかった。

「ボクは机仕事が残ってますので、その処理ですね」

「じゃなくて！夏休みの予定です！」

「夏休みの予定？」

サラの問いに聞き返すヴァン。

「どこかに行ったりとか、そういう予定はないんですか？」

「今の所はありませんね」

「……つまらないな」

「まあ、教師の給料や予定なんてたかが知れていますしね」

自分が本職が軍所属であるという自覚は学校の先生でいる間のヴァンにはあまりないようだった。

「でも、他の先生達で暇な人はどこかへ行ったりするとか予定を立てていますよ？」

「ボクはボク、彼らは彼らですよ」

「じゃあ、どこか出かける予定ができれば私達も連れて行ってくださいな」

「分かりましたよ。まあ、そんな事はないでしょうけどね」

ヴァンとの会話を終えると、二人は椅子に座り、雑談を始めた。

そんな彼女達を見つめ、

「夏休みの予定、ですか」

改めて思っても、傭兵時代が多かったヴァンにとって、長期休暇をどうすごすのかをまず考える事ができなかった。

「まあ、なるようになるでしょう」

教室で後片付けを済ませ、職員室に向かっていると、

『ヴァン先生、お客様が応接室でお待ちです。至急応接室まで来て

ください』

そんな放送が校内に流れた。

「ボクに客、ですか？」

一瞬考えてみたが、誰が来たのか全く検討がつかない。

「まあ、行ってみれば分かりますか」

そしてヴァンが応接室に向かい、中に入ってみると、そこには、
「ヴァンさん、いえ、ここではヴァン先生ですか？」
ヴァンに声をかけた主。

そこには先日博物館で出会ったレンが椅子に座っていた。

「どちらでも構いませんよ。と言うよりレン様じゃないですか。今日はまたどういった用件で？」

「はい。少しヴァンさんと話がしたくて、来てしまいました」

「え……？」

予想外の答えにヴァンは戸惑い、

「ふふ、冗談ですよ」

「……相変わらずですね、レン様は」

ヴァンも苦笑を浮かべた後、

「それで、本題は何ですか？」

「ええ。先日の件では助けていただいたのに、言葉でしかお礼をする事ができなくて」

「いえいえ、それで十分ですよ」

「それではこちらの気がすみません」

「では、一体どうするのです？」

「はい、それはですね……」

レンは少しの間沈黙を置いた後、

「この学校は明日から夏休みだそうです、ヴァンさんはどう過されるつもりですか？」

「特には決めていませんが」

「では決まりですね」

「何がですか？」

「ヴァンさんを、共和国にご招待したいと思います」

「共和国に、招待？」

「はい」

返事と共にレンは笑みを浮かべると、

「予定が無いのでしたら、こちらの国のプライベートビーチで遊ばれるのも一興かと思ひまして。どうでしょうか？」

「まあ、それは別に構いませんが」

「分かりました」

そう言つてレンは立ち上がり、

「移動用の飛行機等はこちらで手配します。それと一人で来るのもなんでしょうし、誰か知り合いでも呼んで来るといいでしょう」

「知り合い、ですか」

「知人友人と海で遊ぶのも楽しいですよ？」

「はあ、そうですね」

言われても、ヴァンにはピンとこなかった。

何しろ、傭兵時代には遊ぶという概念が無かったから。

「……分かりました。とりあえず知り合いに声をかけてみます。連絡はどうしたらいいですか？」

「えっと、少々お待ちください」

レンは近くにあった紙にペンで番号を書くと、

「これは私の携帯の番号です。日程や人数等が決まったらこちらに連絡をください」

「分かりました」

「では、向こうでお待ちしています」

そう言い残すと、レンは応接室から出ていった。

「……遊び、ですか」

遊ぶという概念が全くと言っていいほどないヴァン。だが。

「この機会に、遊ぶという経験をしておいた方がいいかもしれません

んね」

そう言ったヴァンの脳裏には、複数の知人の姿が浮かんでいた。
「この件に、彼女達を誘ってみるのもいいかもしれませんね」

夏休みの始まり（後書き）

さて。

色々と出来事はありましたが、一応この世界の季節は夏です。
ですがリアル季節は冬です、寒いです。

こたつむりになりながら書いてます。

正反対の状況の中、どう書こうかと試行錯誤中です。
意見や感想、評価等いただければ幸いです。

旅行への誘い

応接室から出たヴァンは、まずさっきまでいた教室に向かった。
「一応約束しましたからね。まだ残っているといいんですが……」
言いながらも歩みを進め、教室の前に辿りつく中から会話が聞こえる。

「よかった。まだいるようですね」

そう言つて、ヴァンは教室の扉を開けた。

中には、サラとフランが椅子に座つて二人で話をしていた。

「サラさん、フランさん、今いいですか？」

「何ですか？ヴァン先生」

「それがですね……」

ヴァンは、先程レンとの間に起こった会話を二人に話す。

「そういう事で、もしよかったら二人も来ませんか？」

「プライベートビーチかあ……」

フランは想像でもしているのか、顔に笑みを浮かべて楽しそうな表情を出し、

「楽しそうですね……」

サラも顔に笑みを浮かべながら呟く。

「どうです？」

「じゃあ、せっかくだし行きます！」

「私も行こうかな」

「分かりました。では、二人共来るという事で話を進めておきますね。詳しい日程はこちらで決めますので、決まったら連絡します」

「「分かりました」」

「では」

ヴァンは二人に挨拶を交わし、教室を後にした。

「さてと……」

約束をしていた二人には話したが、ヴァンの頭にはまだあの言葉が残っていた。

「これで知人は誘いましたが、あとは友人ですね」
知人と友人。

レンから誘うように言われたが、あと誰を誘おうかと迷っていた。単に二人だけでもいいのだが、遊びという概念を知らないヴァンにとっては、知人友人と言われたためその両方を誘わないといけなという固定概念に囚われていた。

「友人といえば、あの人達ですね。まだ残っているといいのですが」
そう言って、ヴァンは校舎内を歩いていく。

侍娘との場合

まず最初にヴァンが向かったのは道場だった。
そこでは部活動をしているのか、柔道部や空手部、剣道部の部員達が体を動かしていた。

その中で、ヴァンはある人の姿を捜し……

「おっと、いましたね」

道場の中で、剣道の試合をしている空間。

その中で、ヴァンの捜している人は部員同士の試合の審判をしていた。
いた。

試合をしている場所に近づくと、丁度片方の部員がもう片方の部員の頭に竹刀を振り下ろしていたところだった。

「一本、そこまで！」

声を上げた審判は試合をしていた二人を見届けると、近づいてきたヴァンに気づいた。

「ヴァン殿。ここに来るとは珍しいな」

「ちょっと時雨さんに用がありましてね」

「私に用が？」

「はい。まだ続くようなら手短に済ませますが」

「いや、問題ない。少し待っていてくれ」

そう言い残すと、時雨は他の教員に審判が変わるように頼み、それを終わるとヴァンのところに戻ってきた。

「待たせたな、ヴァン殿。それで用とは一体？」

「はい、それがですね。時雨さんをちょっとした旅行に誘いたいと思います」

「ヴァン殿と、旅行……だと？」

「はい。ボクはプライベートビーチだと聞いているんですけどね。そこで遊ぶのもいいかと思ひまして。どうでしょうか？」

ヴァンは時雨に聞いてみたが、当の本人は、

「ヴァン殿と旅行……ヴァン殿とプライベートビーチ……」

視線を空に漂わせながら、何やらブツブツと呟いている。

「えっと、無理にとは言いませんよ？他に予定があるならそちらを優先してもらってかまいませんが」

「そ、そんなもつたいたい！少し待っていてくれ」

声を荒げて叫ぶと、そばにいた教員の一人に走っていき……

そして数分後。

「少し無理をしたが、何とか予定は空けられそうだ」

「そうですか、それはよかった」

「ではヴァン殿、絶対に連れていってください」

「はい、分かりました」

そう言い残すと、ヴァンは道場を後にした。

「ヴァン殿と一緒に旅行か……」

そんな独り言を呟きながら、普段の彼女らしくない浮かれた顔をした時雨を見た部員達は、少し不思議に思ったそう。

修道女との場合

次にヴァンが向かったのは彼女がいると思われる教会だった。

この学校では各種部活や実習に力を入れているため、それぞれの特殊な授業や部活用に特別な教室や建物が建てられている場合が多い。

教会もその一つである。

閑話休題。

教会の中に入ると、その奥で一人のシスターが祈りを捧げている最中だった。

ヴァンは彼女に近づくも、邪魔をしては悪いと思い、祈りが終わるのを待っていた。

そしてしばらく時が過ぎ……。

「ふう……」

祈りは終わったらしく、彼女は立ち上がり、そしてそばで椅子に座っているヴァンに気づいた。

「あら。いらつしやったのですか、ヴァンさん」

「はい。シエルさんの祈りを邪魔しては悪いと思ひまして、しばらく見ていました」

「何だか恥ずかしいですね、こうしている所を見られるなんて」

言いながら頬を赤く染め、照れるシエル。

「ところで一つ聞きたいのですが、シエルさんは夏休み中は用事等がありますか？」

「夏休み中ですか……特にありませんよ？それが何か？」

「いえ、もし用事が無ければ、シエルさんを旅行に誘おうか、と思ひまして」

「ヴァンさんと、旅行……ですか？」

「はい。まあ、無理とは言いませんが」

「いえいえ、無理なんてとんでもない！ヴァンさんとの旅行に一緒にできないなんて、神が許しても私が許しません！」

「では、シエルさんはOK、という事でいいですね？」

「はい、もちろんです」

「分かりました。詳しい日程等は後日伝えますので、楽しみにしていってください」

そう言って、ヴァンは教会を後にした。

「ヴァンさんと旅行ですか……この縁をいただいた事を神に感謝しないといけませんね……」

ヴァンの去った後、シエルは通常より長く神に感謝し、祈りを捧げていた。

吸血鬼との場合

ヴァンが学校の敷地内を歩き回り、時間は夕方になっていた。

「さて、随分遅くなりましたね」

ヴァンは友人最後の一人を捜していたのだが、彼女は部活にも入っていない警備員的なポジションのため、いる場所が判断しにくい。そういう訳で学校の敷地内をしらみつぶしに探していたのだが、なかなか見つけれなかった。

「どこにいるんでしょうか……」

ヴァンが足を止め、周囲を見渡していた、その時。

「誰かを捜しているのかしら？ヴァン」

「??」

どこからか聞こえてくる彼女の声。

ふと上を見上げると、二階の廊下の窓に腰掛けている彼女の姿が目についた。

彼女はヴァンが視認したのを確認すると、腰掛けていた窓から飛び降り、ヴァンの近くに着地した。

「アリエルさん、どこにいたんですか？貴女を捜していたんですが、なかなか見つからなくて」

「ちよつと散歩にね。その途中で誰かを捜しているようなヴァンを見つけたのよ。にしても私を捜していたなんてね。何の用かしら」

「実は、夏休み中に旅行に行く事になりました。それでアリエルさんもどうかと思ひまして」

「ヴァンと、旅行……？」

「他の用事があればそちらを優先して構いませんが、どうでしょうか」

「他に用事らしい用事も無いし、一緒に旅行で構わないわよ。そっちの方が楽しそうだし」

「分かりました。では、詳しくは後で伝えますので」

「ええ、分かったわ。旅行楽しみにして待つてるわよ」

「はい。では」

そう言い残してヴァンは去り、その場にはアリエルのみが残った。そして。

「ヴァンと旅行……なんて幸せな響きなのかしら……」

そこには見た目相応の幸せそうな笑みを浮かべるアリエルがいた。

「さて、遅くなりましたが、これでボクの知人友人は誘いましたし、ミッションクリアですね」

実はカルマやクラインにも声をかけたのだが、二人とも学校の用事で忙しいらしく、旅行には不参加の表明を出した。

「二人には残念でしたが、その分六人で旅行を楽しめますか」

そう言いながら、ヴァンは手に持った携帯を操作し、レンに連絡を取った。

「もしもし、ヴァンです。行く人が決まりましたので、その報告で

連絡を。……はい、分かりました。その日にその空港ですね」

しばらくヴァンはレンと通話をし、それを終わると通話を終えた。「さて。遊びという事をまったくしなかっただけに、今回の件は非常に興味深い体験になりそうですね」

そう言うヴァンの顔には、初めてもらったおもちゃで遊ぶかを考えている子どものような顔が浮かんでいた。

旅行への誘い（後書き）

個々で話を分けてもよかったのですが、自分の妄想、もとい文章力があまりなかったので、その辺はご勘弁をorz

……つか、次話修羅場じゃね？な感じになりましたが。

事情により一週間程度の暇をいただいたので、気まぐれで話を進められたらいいなと思ってます。

感想や意見、評価等いただければ幸いです。

いざ、避暑地へ

そして旅行当日の朝。

ヴァン達は指定された空港にいた。

「これから飛行機に乗ってハルバード共和国に行くんですね。わくわくするな」

と、喜びの感情を隠そうともしないフランに、

「そうね。ヴァン先生が誘ってくれたんだし、楽しまないとね」

すまし顔ながら、フラン同様に表情を柔らかくしているサラ。

そんな彼女達とは対照的に、

「ヴァン殿と旅行と聞いていたのに……いや、間違っではないが……」

「神よ、これは墮落への道を歩もうとしていた私への罰なのですか orz」

「フフフ……まあ、こんなオチじゃないかとは思ってたけどね」

明らかに落胆の表情を浮かべる時雨、シエル、アリエルの三人。

そんな三人に、ヴァンは、

「あの、皆さんを楽しませようと思って誘ったのですが、なにかいけませんでしたか？」

と聞くが、

「いや、旅行に誘ってくれた事自体には感謝している。どうせなら精一杯楽しむとするか」

「ですね。羽を伸ばすのにもいい機会ですし」

「そうね。ヴァンが誘ってくれたんだし、その点は喜ぶべきかしら？」

「それはよかったです」

そう笑いながら返すヴァンだったが、それに対して、

（（朴念仁。）（））

三人は異口同音にそう思った。

「さて、レン様からは、ここで待っていれば迎えの者が来ると言われたのですが……」

ヴァンがそう呟きながら辺りを見回していると、

「もしかして、あなた達がレン様に呼ばれた方々か？」

そう言いながら、ヴァン達に白髪の男性が近づいてきた。

「そうですが、貴方は？」

「おっと。申し遅れました。私はレン様護衛騎士の一人、ゼウサスと申します。以後、お見知りおきを」

「えっと、貴方に言われた通り、ボク達が今回レン様に誘われた者です。そしてこちらが連れの」

ヴァンは、後ろに立つ女性陣に目を向け、

「ボクの働いている学校の生徒のフランとサラ、友人の時雨さん、シエルさん、アリエルさんです」

「これはこれは、美しい女性方で。さて、ヴァン殿。こちらに専用機がありますので、着いてきてください」

「分かりました」

こうして、ヴァン達はゼウサスの引率の元、専用機に向かった。

「これが、専用機……ですか？」

ヴァン達が連れてこられた先には、普通の飛行機より少し小さい程度の大きさの飛行機があった。

とても個人や数人だけを乗せる用途で製造されたとは思えない大きさだった。

「はい。そうです。専用機と言ってもレン様を乗せるだけでなく、たまにパーティーを開ける程の人数を乗せる事もありますので。そういう事で、これ程の大きさの専用機が発注されたのですよ」

「なるほど……」

「さて、こんな場所で話をするのもなんですし、中に入って早く向かいましょう」

そして、ヴァン達を乗せた専用機は陸を離れ、空へと飛び立った。それからしばらくして。

「さて、もう椅子から離れても大丈夫ですよ。しばらくはご自由にしてください」

「はい、分かりました」

「私はしばらく席を外します。ご用の際は声をかけてください」
そう言つて、ゼウスはその場を離れた。

「さてと、これからどうしましょうか……」

と呟くヴァンだったが、そんな彼に対して、

「そんなの、決まってるじゃないですか！」

声をかけたのはフランだった。

「やっぱりここは、向こうがどんな所か、そして向こうへ行つて何をするか、ですよ！」

「ふむ……」

「先生は、向こうがどんな所かは知ってるんですか？」

「いえ、詳しくは。ただ、プライベートビーチと言っていましたから、ボク達のような決まった客以外はあまり人がいない海辺なんでしょうか」

「だったら、向こうに着いたらまず泳ぐ！ですよね？」

「ですよね？」とボクに疑問系で聞かれても困りますが……そうなんですか？」

「普通はそうですよ」。先生は海とかに遊びに行ったりとかは今までなかったんですか？」

「ボクは先生になるまでは傭兵をしてましたからね。時雨さんもそうだと思いますが、その辺はどうですか？時雨さん」

「そうだな。私もヴァン殿と同じで学校に籍を置かせてもらうまでは傭兵業をしていたからな。遊びという概念はあまり知らないのだ。シエル殿やアリエル殿はどうだ？」

「私もあまり遊ぶといった行動はしてませんでしたね。いつも教会からの指令で動いていたり、手の空いている時は教会の事務仕事や

祈りに時間を潰していましたから」

「私も海に行くのは初めてかしら？どんな所か気になるわ」

「ふむふむ……」

フランは腕を組んでわざとらしく首を縦に振り、

「なら、先生達四人には向こうで私達が遊びの何たるかを教えてあげます！それでいいよね？サラ」

「そうだね。せっかく遊びに誘われたんだし、この機会に先生達も暇を遊んで潰すやり方を覚えるといいですよ」

「分かりました。では、向こうに着いたら二人に遊びを教えてもらうとしましょうか」

そんな風に飛行機の中で会話は進み……
しばらくして。

「あ、先生、窓を見てよ！」

「何ですか？」

フランに言われてヴァンが窓を見ると、その眼下には綺麗な海と、小さい島の群れがあった。

時間が夕方近くだったため、海は赤く染まっていた。

「……これは……絶景ですね」

いつもは変わらない微笑を浮かべているヴァンも、その光景に絶句した。

「先生でもそんな顔をする事があるんですね」

「ボクだって人間ですからね。まあ、今まで飛行機に乗った事もないですし、初めて見る景色には誰でも目を奪われるものですよ」

「そうだな」

ヴァンが窓の外の光景を見ている間に時雨達も窓の外を見ていたらしく、

「私も戦場や陸続きの景色しか見た事がない故、このような光景を見るのは初めてだ。私も初めて言葉にできないという現象に囚われ

た」

「私もです。たまにはこういう場所で遊ぶのもいいかもしれませんね」

「フフフ、そうね」

と、ヴァン達が窓の外の光景を見ていると、ゼウサスがヴァン達の所に近寄ってきた。

「皆さん、そろそろ降下しますので、席に着いてもらえますか？」

「ああ、はい。分かりました」

そしてヴァン達が席に戻った後も空中の旅は順調に終わりを向かえ……。

「着いた〜！」

空港に着くと、フランは両手を挙げ、大声を上げて喜びを表現していた。

「まったく、フランは大げさなんだから」

ため息をつきながら言うサラも、その顔には笑みが浮かんでいる。

「さて。それでは皆さん、近くに泊まる予定のホテルがありますので、そこに行きましょう。レン様もそこにいるはずですよ」

「分かりました」

そうして、ヴァン達一行はゼウサスの案内の元、近くのホテルに向かった。

いざ、避暑地へ（後書き）

前作のあとがきとは裏腹に、あまり修羅場にはなりませんでした。
経験が無いので、そういう場面や恋愛関係の話は相変わらず苦手です
orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5220v/>

無能力な先生

2011年12月16日19時48分発行